

津名郡五色町所在

喜住西遺跡
五反田遺跡

— 一般県道鳥飼浦州本線道路改良に伴う発掘調査 —

2004年3月

兵庫県教育委員会

津名郡五色町所在

喜住西遺跡
五反田遺跡

— 一般県道鳥飼浦州本線道路改良に伴う発掘調査 —

2004年3月

兵庫県教育委員会



鳥飼浦から広石方面を望む（西から）



喜住西遺跡・五反田遺跡遠景（南から）



竪穴住居跡1（西から）



溝11（東から）

例 言

1. 本書は津名郡五色町広石下字喜住に所在する喜住西遺跡、同町広石下字五反田に所在する五反田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は（一）鳥飼浦洲本線道路改良事業に先立ち、兵庫県淡路県民局洲本土木事務所の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が調査主体となって実施した。
3. 調査は平成9年度に確認調査（遺跡調査番号970358）を行い、平成10年度及び翌平成11年度に本発掘調査（遺跡調査番号980198・990137）を実施した。
4. 調査で使用した座標は国土座標第V系であるが、本書では座標値は明示せず、座標北のみ示した。また、水準はT、P、を使用した。
5. 現地での写真撮影は各調査担当者が行った。遺物写真はイーストマン株式会社に委託して行った。
6. 整理作業は、平成14、15年度に兵庫県淡路県民局洲本土木事務所からの依頼にもとづいて行った。
7. 本書の執筆は目次に示したとおり、各担当者が行った。遺物については、原則として縄文土器と弥生土器を仁尾が、平安時代の土器を平田が、中近世の土器を松岡が、石器を藤田が担当した。編集は嘱託職員宮田麻子の協力を得て、藤田が行った。
8. 本書にかかる遺物・図面は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 魚住分館（明石市魚住町清水字立合池の下630-1）で保管している。また、写真については同事務所（神戸市兵庫区荒田町2-1-5）で保管している。
9. 発掘調査・整理作業にあたって、下記の方々・機関のご協力・ご指導を得ました。記して感謝致します。
(敬称略) 足立敬介、伊藤宏幸、大石雅一（以上、津名郡町村会）

本文目次

第1章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経緯	(平田) 1
第2節 調査の経過	(藤田) 2
第3節 整理作業の経過	(藤田) 6
第2章 遺跡の環境	
第1節 位置と地理的要因	(平田) 7
第2節 歴史的要因	(平田) 8
第3章 喜住西遺跡(南地区)の調査	
第1節 概要	(藤田) 11
第2節 層序	(藤田) 12
第3節 弥生時代の遺構と遺物	(仁尾・藤田) 15
第4節 平安時代の遺構と遺物	(平田) 32
第5節 中世の遺構と遺物	(藤田・松岡) 39
第6節 近世の遺構と遺物	(藤田・松岡) 48
第7節 包含層出土の遺物	(仁尾・藤田・松岡) 50
第8節 小結	(仁尾・藤田) 60
第4章 喜住西遺跡(北地区)の調査	
第1節 概要	(藤田) 65
第2節 層序	(藤田) 65
第3節 弥生・古墳時代の遺構と遺物	(仁尾・藤田) 67
第4節 中世の遺構と遺物	(藤田・松岡) 69
第5節 包含層出土の遺物	(仁尾・藤田) 70
第6節 小結	(仁尾) 71
第5章 五反田遺跡の調査	
第1節 概要	(藤田) 73
第2節 層序	(藤田) 73
第3節 縄文・弥生時代の遺構と遺物	(仁尾) 75
第4節 中世の遺構と遺物	(藤田・松岡) 77
第5節 包含層出土の遺物	(仁尾・藤田) 77
第6節 小結	(仁尾) 79
第6章 結語	
第1節 遺構について	(藤田) 81
第2節 溝11出土の土器について	(平田) 83

図 版 目 次

- 図版1 平成9年度 喜住西遺跡南地区(1Tr) 全景(西から)／全景(東から)
- 図版2 平成9年度 喜住西遺跡南地区(1Tr) 2区南壁(北西から)／3区北壁(南西から)／4区南壁(北東から)／3区南壁(北西から)／5区北壁東半(南西から)／5区北壁西半(南西から)／5区南壁東半(北西から)／5区南壁西半(北西から)
- 図版3 平成9年度 喜住西遺跡南地区(1Tr2区) 掘立柱建物跡1・溝1全景(北から)／柱穴2断面(北から)／柱穴1断面(北から)／掘立柱建物跡1全景(西から)
- 図版4 平成9年度 喜住西遺跡南地区(1Tr3区) 上層全景(東から)／土坑4全景(南西から)／溝12断面(西から)／溝5断面(西から)／溝6断面(西から)
- 図版5 平成9年度 喜住西遺跡南地区(1Tr3区) 溝11全景(東から)／同断面(南から)／四土器出土状況(北から)／同全景(北から)
- 図版6 平成9年度 喜住西遺跡南地区(1Tr4区) 竪穴住居跡3(南から)／全景(東から)／溝7(北から)／竪穴住居跡3断面(西から)／ピット4断面
- 図版7 平成9年度 喜住西遺跡南地区(1Tr5区) 上層全景(北西から)／上層全景(東から)
- 図版8 平成9年度 喜住西遺跡南地区(1Tr5区) 土坑18断面1(西から)／土坑18断面2(東から)／土坑18断面3(西から)／土坑18内礎土(東から)／土坑22断面(北から)／土坑23・24断面(東から)／ピット14断面／ピット11・12断面／ピット13断面
- 図版9 平成9年度 喜住西遺跡南地区(1Tr5区) 下層全景(南東から)／溝9断面(東から)／土坑7・8(北から)／溝10断面(東から)／ピット15断面(北から)
- 図版10 平成9年度 喜住西遺跡南地区(2Tr) 全景(東から)／溝14断面(南から)／1区南壁(北西から)／3区南壁旧河道部(北西から)
- 図版11 平成9年度 3Tr・4Tr 3Tr全景(南から)／4Tr全景(東から)／3Tr溝(南東から)／3Tr西壁(東から)
- 図版12 平成9年度 五反田遺跡(5Tr) 全景(東から)／溝4～6(東から)／溝1・2(北西から)／溝4・5断面(北から)／溝1・2断面(北から)
- 図版13 平成9年度 作業風景 遺構面精査／溝11土器検出／溝11実測／広石小学校児童の見学／同左
- 図版14 平成10年度 喜住西遺跡南地区(A区) 1・2区全景(西から)／全景(西から)
- 図版15 平成10年度 喜住西遺跡南地区(A区) 3・4区全景(東から)／4区全景(北から)
- 図版16 平成10年度 喜住西遺跡南地区(A区) 4・5区全景(西から)／5区北西部F層遺構全景(東から)
- 図版17 平成10年度 喜住西遺跡南地区(A区) 弥生時代 竪穴住居跡1全景(西から)／同検出状況(東から)／同全景(東から)
- 図版18 平成10年度 喜住西遺跡南地区(A区) 弥生時代 竪穴住居跡1検出状況(北西から)／同検出状況(北西から)／同南北断面(西から)／同東西断面(西から)／同南北断面南半／同東西断面西半(南から)
- 図版19 平成10年度 喜住西遺跡南地区(A区) 弥生時代 竪穴住居跡1中央土坑断面(南から)／中央土

- 坑・排水溝断面（西から）／ベッド部断ち割り断面（西から）／ベッド部下層の溝（東から）／隅溝内土器（南から）／床面の土器（西から）／主柱穴1断割り（北から）／主柱穴3断割り（北から）
- 図版20 平成10年度 喜住西遺跡南地区（A区）弥生時代 土坑2（北から）／同換出状況（北から）／同完器（北から）
- 図版21 平成10年度 喜住西遺跡南地区（A区）弥生時代 土坑3土器出土（西から）／同（北から）／同完器（西から）／同上器出土（北西から）
- 図版22 平成10年度 喜住西遺跡南地区（A区）弥生時代 竪穴住居跡2全景（東から）／溝2断面（南から）／土坑6断面（西から）／土坑6土器出土（南から）／土坑5断面（西から）
- 図版23 平成10年度 喜住西遺跡南地区（A区）平安時代 溝11全景（東から）／同断面（北から）／西土器出土（西から）／同全景（北から）
- 図版24 平成10年度 喜住西遺跡南地区（A区）中世 土坑9全景（南から）／同断面（北から）／土坑10断面（南から）／土坑11断面（西から）／土坑12断面（南から）／同瀬戸花瓶出土状況（北西から）／土坑14全景（南から）／土坑13全景（南から）／同断面（北から）
- 図版25 平成10年度 喜住西遺跡南地区（A区）中世 土坑18断面（東から）／土坑16断面（南から）／土坑17全景（北から）／土坑19断面（西から）／土坑20断面（西から）／ビット9土器出土状況／1区ビット群（東から）
- 図版26 平成10年度 喜住西遺跡南地区（A区）近世 ビット列1・2・3（東から）／ビット列1土器出土（西から）／土坑27断面（南から）／土坑27全景（北西から）／土坑25断面（南から）／土坑26断面（西から）
- 図版27 平成10年度 喜住西遺跡北地区（C区）中世 全景（北から）／溝15～17（西から）
- 図版28 平成10年度 喜住西遺跡北地区（C区）弥生・古墳時代 全景（西から）／竪立柱建物跡2（東から）／土坑28・ビット17（西から）／ビット17断面（西から）
- 図版29 平成10年度 五反田遺跡（B区）中世 第1遺構面全景（東から）／第2遺構面西半全景（東から）／溝1・2全景（東から）／溝1・2断面（南から）
- 図版30 平成10年度 五反田遺跡（B区）縄文・弥生時代 旧河道1断面（南から）／旧河道2断面（南から）／旧河道1・2全景（東から）／旧河道2全景（東から）
- 図版31 平成10年度 作業風景 竪穴住居跡1検出／同掘削／断面実測／南地区有骨尖頭器出土状況／堺小学校児童の発掘体験／同左／同左
- 図版32 喜住西遺跡出土遺物 弥生土器1 図版41 喜住西遺跡出土遺物 弥生土器10
- 図版33 喜住西遺跡出土遺物 弥生土器2 図版42 喜住西遺跡出土遺物 平安時代の土器1
- 図版34 喜住西遺跡出土遺物 弥生土器3 図版43 喜住西遺跡出土遺物 平安時代の土器2
- 図版35 喜住西遺跡出土遺物 弥生土器4 図版44 喜住西遺跡出土遺物 平安時代の土器3
- 図版36 喜住西遺跡出土遺物 弥生土器5 図版45 喜住西遺跡出土遺物 平安時代の土器4
- 図版37 喜住西遺跡出土遺物 弥生土器6 図版46 喜住西遺跡出土遺物 中近世の土器1
- 図版38 喜住西遺跡出土遺物 弥生土器7 図版47 喜住西遺跡出土遺物 中近世の土器2
- 図版39 喜住西遺跡出土遺物 弥生土器8 図版48 喜住西遺跡出土遺物 中近世の土器3・金属器
- 図版40 喜住西遺跡出土遺物 弥生土器9 図版49 喜住西遺跡出土遺物 石器1

図版50 喜住西遺跡出土遺物 石器2

図版52 五反田遺跡出土遺物

図版51 喜住西遺跡出土遺物 石器3

図版53 五反田遺跡出土遺物

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置	1	第4図	五色町と遺跡の位置	7
第2図	確認調査トレンチ配置図	2	第5図	淡路島の地質	7
第3図	本発掘調査区配置図	5	第6図	周辺の遺跡	8
【喜住西遺跡】					
第7図	南地区 遺構配置図	13			
第8図	南地区 土層断面図	14			
第9図	南地区 弥生時代の遺構1 (竪穴住居跡1)	16			
第10図	南地区 弥生時代の遺構2 (竪穴住居跡1・相立柱建物跡1)	17			
第11図	南地区 弥生時代の遺構3 (竪穴住居跡2・3、溝5・6、土坑4)	18			
第12図	南地区 弥生時代の遺構4 (土坑2・3)	19			
第13図	南地区 弥生時代の遺構5 (土坑6)	20			
第14図	南地区 弥生土器1 (竪穴住居跡1)	23			
第15図	南地区 弥生土器2 (土坑2・3)	25			
第16図	南地区 弥生土器3 (溝・土坑)	26			
第17図	南地区 弥生土器4 (溝・ピット・土坑・旧河道1)	27			
第18図	南地区 弥生土器5 (土坑6)	28			
第19図	南地区 弥生時代の石器1 (竪穴住居跡1・土坑)	29			
第20図	南地区 弥生時代の石器2 (溝・旧河道1)	30			
第21図	南地区 弥生時代の石器3 (溝・旧河道1)	31			
第22図	南地区 平安時代の遺構 (溝11)	32			
第23図	南地区 溝11出土土器指数	33			
第24図	南地区 平安時代の土器1 (溝11)	35			
第25図	南地区 平安時代の土器2 (溝11)	36			
第26図	南地区 平安時代の土器3 (溝11)	37			
第27図	南地区 平安時代の土器4 (溝11)	38			
第28図	南地区 鉄器 (溝11)	39			
第29図	南地区 中世の柱穴群	40			
第30図	南地区 中世の土坑1	41			
第31図	南地区 中世の土坑2	42			
第32図	南地区 中世の土坑3・畝状遺構	43			
第33図	南地区 中世の土器1 (ピット・溝)	45			

第34図	南地区	中世の土器 2 (土坑)	46
第35図	南地区	中世の鉄器	48
第36図	南地区	近世のビット列・土坑	49
第37図	南地区	近世の土器	50
第38図	南地区	溝11出土弥生土器	51
第39図	南地区	包含層出土土器 1 (弥生土器)	52
第40図	南地区	包含層出土土器 2 (弥生土器)	53
第41図	南地区	包含層出土土器 3・七製品 (平安時代以降)	54
第42図	南地区	包含層出土土器 1	55
第43図	南地区	包含層出土土器 2	56
第44図	南地区	包含層出土土器 3	57
第45図	南地区	包含層出土土器 4・金属器	59
第46図	北地区	土層断面図	65
第47図	北地区	遺構配置図	66
第48図	北地区	弥生時代の遺構 (土坑2S)	67
第49図	北地区	古墳時代の遺構 (掘立柱建物跡 2)	68
第50図	北地区	中世の遺構 (溝15~18)	68
第51図	北地区	出土土器	69
第52図	北地区	出土土器・鉄器	70
【五反田遺跡】			
第53図		土層断面図	73
第54図		遺構配置図	74
第55図		縄文時代の旧河道	75
第56図		出土土器	76
第57図		中世の遺構 (溝1断面)	77
第58図		出土土器・鉄器	78
第59図		溝11出土土器の器種構成図	84
第60図		古城山1号竈跡 (三田市) 出土須恵器杯Aの土器指数	85

表 目 次

表 1	調査区名対照表	6
表 2	溝11出土土器観察表	63・64

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

一般県道島飼浦洲本線は津名郡五色町の島飼浦から洲本市に至る道路であり、淡路島中央部において同島を東西に横断する幹線道路のひとつに掲げられる。同県道は淡路島の西浦に面する島飼浦から島飼川沿いに山塊の南裾部を廻り、五色町の広石礼ノ辻で、北部の津名町から龍宝寺山と先山の山間を抜けて淡路島のほぼ中央部を南北に走る主要地方道津名五色三原線に合流する。暫く同線を南下した後、町立城小学校の南側で再び分岐し、南東方向の上境で同郡緑町へと入る。ここで同町の北東隅部をわずかにかすめて、直ぐに花立隧道から洲本市西部中央の奥畑の谷間へと入り、先山の南山麓を回り込みながら本州四国連絡道路洲本J.C.の東側を通過して、上内膳で国道28号線と合流して終点となる。



第1図 遺跡の位置 (1/10,000) (五色町発行「五色町全圖」より)

平成10年に本遺跡の本発掘調査に着手した時点では、鳥飼浦から札ノ辻までの間で現道の部分的な改良・拡幅工事を行われており、全線改良に向けて徐々に事業を進捗しつつある状況にあった。

今回の調査地は、同線の淡路養護学校南側の地点から三叉路となる札ノ辻交差点を迂回して広石郵便局西側の主要地方道津名五色三原線に取り付けるための、いわばバイパス的な新規道路の用地内に相当する。本道路の建設は、用地の確保を周辺で計画されていたは場整備と一連で進めていたため、津名郡町村会によって同事業に伴う分布・試掘等の調査が先行実施されていた。その調査成果から、本事業地の周辺に埋蔵文化財包蔵地が広がることが明らかとなったため、兵庫県洲本土木事務所長（現兵庫県淡路県民局土整備部洲本土木事務所長）から確認調査の依頼を受け、平成9年11月に事業地内の埋蔵文化財の有無を確認するための調査を実施した。

この確認調査の結果、調査対象範囲の東端部・西端部を中心として遺物あるいは遺構が存在することを確認するとともに、隣接地で実施された津名郡町村会による調査結果を参考として、一般国道鳥飼浦洲本線との合流地点から鶴飼川左岸の河岸段丘までの範囲、延長約230mの間を本発掘調査の対象地区とした（第3図）。但し、道路建設工事の工程上道路側溝部分を先行実施することから、平成10年度（平成11年1月～3月）には側溝部分に相当する箇所を調査することとした。喜住西遺跡の1トレンチ・2トレンチ、五反田遺跡の5トレンチとともに、これらに挟まれる地区に設けた3トレンチと4トレンチの計5カ所の本発掘調査を実施した。さらに、翌平成11年度（平成11年5月～8月）には本線部分および一般国道鳥飼浦洲本線との接合箇所の本発掘調査を実施した。調査区名は、喜住西遺跡についてはA区（本線部分）、C区（接合箇所）、五反田遺跡はB区と呼称した。これをもって、同事業に伴う埋蔵文化財についての全調査を終了した。

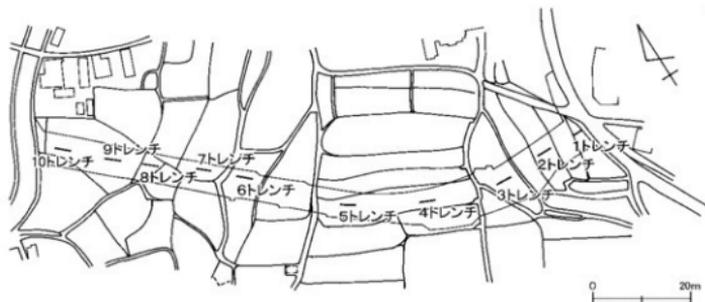
第2節 調査の経過

1. 確認調査

調査担当者：企画調整班 技術職員 柏原正民

調査期間：平成9年11月10日～11月12日

調査面積：190㎡



第2図 確認調査トレンチ配置図

事業地は鳥飼川上流の扇状地に立地し、西へ広がる緩斜面地を階段状に造成して、水田・畑地が設けられていた。工事計画の段階では埋蔵文化財を把握していなかったが、周辺の圃場整備に伴う発掘調査（平成9年10月、津名郡町村会が実施）によって、東部に隣接する「喜住西遺跡」の範囲が広がりを見せたことから、事業地において埋蔵文化財の状況を調査した。

確認調査は、平成9年11月10日から12日の3日間実施した。調査対象は県道から鳥飼川までの施工区間を対象に、等間隔でトレンチ（試掘溝）を設定・調査する予定であったが、実施の段階でも一部では畑作などがおこなわれ、除外せざるを得ない箇所があった。最終的には、東西方向に2m×5m（1トレンチ）または2m×10m（2～10トレンチ）の合計10箇所を掘削した。

調査では重機ならびに人力による掘削をおこない、土層に含まれる遺物及び断面の観察によって埋蔵文化財の有無を判断した。掘削後に、断面の整形と堆積状況の写真撮影・記録を実施、調査が終了した時点で埋め戻した。掘削深度は各トレンチによって異なるが、原則として遺構面と考えられる洪積層（以下、基盤層）まで掘り下げ、一部では下層の堆積を確認するため、意図的に掘り抜いた。

トレンチは、地形の異なる3地点に配置した（第2図）。地形ごとに調査概要と成果をまとめる。

1～3トレンチは、丘陵の裾部にあたる田面へ設定した。水田の造成による亡失も考えられたが、すべてのトレンチで遺物包含層ならびに遺構を検出した。包含層から出土した遺物には土師器・弥生土器が目立ち、確認調査における遺物の大半が出土している。

4～6トレンチは鳥飼川左岸の河岸段丘上に設けた調査区で、Na5を中心に緩やかな谷状をなす。大半は現地表面（耕土）について、遺物包含層と基盤層を検出した。遺構状の土層変化は少ないが、遺物包含層から細片化した土器が出土した。

7～10トレンチは、鳥飼川の左岸に設定した。河岸段丘の低位にあたる平坦地で、7トレンチの東側は1.5mの比高をもつ崖面を挟んで6トレンチに続く。拳大の円礫を大量に含む鳥飼川旧河道とみられる堆積のほか、検出した堆積はいずれも砂質が強く、河道の影響による変質が認められる。遺物の出土ならびに遺構の存在は確認できなかった。

以上の状況から、遺物の出土ならびに安定した基盤層を確認した調査区の東部（1～6トレンチ）において、埋蔵文化財の存在を確認した。

2. 平成10年度の本発掘調査

調査担当者：復興調査班 主査 平田博幸、同 藤田淳

調査期間：平成11年1月21日～平成11年3月12日

調査面積：846㎡

本年度の調査は、周辺のは場整備事業とのかねあいから、道路側溝部分だけを先行して実施したものであるため、5つの調査区（トレンチ）はすべて幅約3mの細長いものとなっている（第4図）。

1・2トレンチは喜住西遺跡に、5トレンチは五反田遺跡に設けた調査区で、3・4トレンチは両遺跡に挟まれた調査区である。このうち3トレンチはほぼ南北方向であるが、他は東西方向を基本とする調査区である。

対象地が圃田となっている1・2トレンチは、長さがそれぞれ67mと38mあり、圃田の段ごとに上から1区～6区までの小地区に区分し、遺物取り上げなどの便を図った。4・5トレンチも延長の長い調査区であるが、遺物が極めて希薄であったことから、特に細分は行わなかった。

調査は1トレンチから順に開始し、機械掘削の後、人力で遺物包含層の掘削や遺構面の精査、遺構掘削を行い、写真撮影と遺構実測を行った。遺構の実測については、先行して周辺の調査を行っていた津名郡町村会が設置した基準杭を利用して、国土座標（第V系）にもとづいて、手書きで行った。

1トレンチは喜住西遺跡の中心部に比較的近いところにあたると考えられ、遺構、遺物とも今回の調査では最も多かった。当初、遺構面は1面と考えていたが、それぞれの棚田の落ち際近くでは下層の遺物包含層を挟んで2面の遺構面が存在することが判明した。主に弥生時代、平安時代、室町時代の遺構が発見されたが、中でも平安時代の溝からは多量の土器が出土した。

2トレンチは遺構、遺物とも極めて希薄となっており、喜住西遺跡の周辺部となっていることが判明した。2トレンチ西端では、弥生時代の旧河道が発見された。

3・4トレンチはそれぞれ1条と2条の溝が検出されただけで、遺物もほとんど出土しなかった。本線部分については、次年度の調査対象からは除外してもさしつかえないことが明らかとなった。

5トレンチは調査区の南と北で津名郡町村会がちょうど調査を終えたところであった。町村会ではそれぞれ遺構面を2面確認していたが、下層の遺構面については認識できなかった。上層も溝数条を検出しただけで、居住を示すような遺構は認められなかった。

なお、調査期間中、地元の広石小学校3年生と6年生約30名の見学があり、発掘の様子や土器の出土状況などを熱心に見学した。

3. 平成11年度の本発掘調査

調査担当者：復興調査班 主査 藤田 淳、技術職員 仁尾一人

調査期間：平成11年5月6日～平成11年8月30日

調査面積：2396㎡

本年度については、昨年度調査を行わなかった道路の部分を調査対象とした。喜住西遺跡は2カ所（A区、C区）を、五反田遺跡は1カ所（B区）を調査した（第3図）。

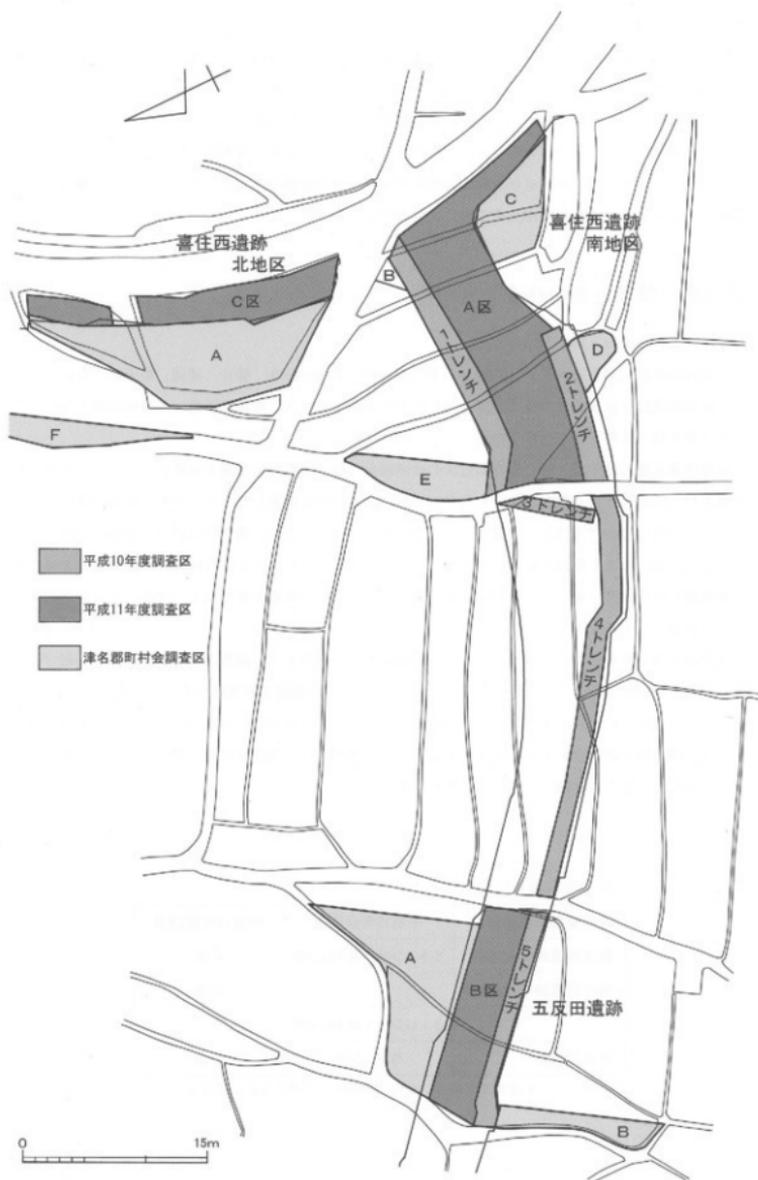
A区は現在の県道とT字形に繋がる道路本線部分と南側の県道拡幅部分で、昨年度の1～3トレンチに南北と西側を囲まれている。生活道路となっている小道を挟んで北側の拡幅部分がC区である。したがって、A区は東西に細長く、C区は南北に細長い調査区となる。調査区は丘陵の末端を段々に開墾した耕地となっており、眼下の平坦な扇状地へ向かって、緩やかに傾斜している。

B区は昨年度の5トレンチの北隣である。段丘末端に当たるため、調査区の西端には段丘崖があり、これより西側の鳥飼川側とは地形的に区分される。

調査はA区から開始し、B区、C区の順に進めた。手順は昨年度と同様である。A区では昨年度に倣って、棚田の段ごとに小地区に区分し遺物の取り上げなどの便を図った（第7図1区～6区）。遺構実測は昨年度と同様に手書きで行った。

喜住西遺跡では、A区で弥生時代の明確な竪穴住居跡が初めて発見され、弥生時代の集落遺跡としての位置づけがより明確となった。昨年度大量の土器が出土した平安時代の溝は、直線的に長く延びることなく自然に消滅してしまい、その性格が曖昧なものとなってしまった。室町時代の遺構はピット、土坑、溝などで特に際立ったものは発見されなかった。

C区はA区と同じような時期の遺構が発見されているが、調査区の南半に集中し、北半では急に散漫となる。新しい知見として、これまでの調査で未発見であった古墳時代の遺構（掘立柱建物跡）が追加



第3図 本発掘調査配置図

されることとなった。

五反田遺跡（B区）では、昨年度と同一の溝が発見されたが、断面でのみ確認していた鋤溝状の遺構も平面的な調査に加えた。さらにその下層から町村会の調査区に続く旧河道を確認した。旧河道の中層からは少量であるが縄文土器が出土し、時期を特定することができた。

なお、調査期間中、トライやるウィークの一環として五色中学校と津名中学校の2年生が見学に訪れた。さらに、地元の堺小学校6年生14名が遺跡の見学と発掘体験を行った。初めての経験に興味津々の様子で、小さくても土器片が出土すると、大喜びであった。

第3節 整理作業の経過

整理作業は平成14・15年度に行った。

平成14年度は、遺物の水洗から開始し、ネーミング、実測・拓本、接合・補強、復元までを行った。

平成15年度は、金属製品の保存処理と、レイアウト、トレース、写真撮影並びに遺構図補正を行い、編集作業を経て本報告書を刊行した。

整理作業を進める中で、隣り合う調査区の遺構図を実測の基準とした国土地標にもとづいて合成する作業を行ったが、うまく整合しないものがあった。国土地標を使用したと言っても、厳密な測量手法にもとづいて行ったわけではなく、精度は不十分なものである。また、調査時における遺構の認識の度合いによっても、うまく整合しない結果となったと思われる。したがって、町村会の調査成果をも含めた各調査地点の全体図（第7図、第47図、第54図）は、そうした無理を承知の上で全体の状況を概観するために作成したものである。

本発掘の調査年度が2年に渡っているため、調査区名や遺構名は、編集段階で新たな名称を付けることとした。調査区名については第1表に示したように、喜住西遺跡を南地区（1トレンチ、2トレンチ、A区）と北地区（C区）にまとめ、五反田遺跡の5トレンチとB区は一つとした。ただし、遺構写真図版では、調査時の調査区名をそのまま使用している。遺構名は、調査時に用いていたSBやSKなどの記号ではなく、堅穴住居跡や土坑など和名を使用することとした。

第1表 調査区名対照表

報告書掲載遺跡名	平成10年度調査	平成11年度調査
喜住西遺跡（南地区）	1トレンチ・2トレンチ	A区
喜住西遺跡（北地区）		C区
	3トレンチ・4トレンチ	
五反田遺跡	5トレンチ	B区

*遺構写真図版では、各年度ごとの地区名称を使用している。

第2章 遺跡の環境

第1節 位置と地理的要因

喜住西遺跡が所在する津名郡五色町は、淡路島のほぼ中央部西海岸に面する人口11,000人強の町であり、県内市町の人口比では中盤より若干少ないランクの人口数となる。同町の公式ホームページでは、「健康・福祉・環境のまち五色」をキャッチフレーズに掲げている。特に、健康・福祉に関しては県内でも早い段階から積極的な取り組みを行い、内外の自治体から多くの視察を迎える状況と聞く。環境に関しては、「クリーンエネルギー五色風力発電施設」と銘打った風力発電機を1基設け、エネルギーの有効利用に努めている。その一方で、北前船を用いた海運業で一財を成した高田屋嘉兵衛の生誕の地としても知られている。

喜住西遺跡（五反田遺跡を含む）は五色町の南端部に所在し、慶野組銅鐸と上ノ御堂銅鐸（外縁紐1式・同范）の出土地である景勝地“慶野松原”（三原郡西淡町）に程近い鳥飼浦を河口とする、鳥飼川の中流域に位置する。鳥飼川によって形成された平野部の幅は河口付近で約500m、中流域で300m強程度を測る。本河川は遺跡の所在する広石下付近で北東方向の本流と南東方向の境川に枝分かれし、実質的な平野部は両分流域に建つ広石小学校と境小学校付近までとなる。従って、河口部からの延長は約4kmを測る。本遺跡は鳥飼川の分枝部分の東奥、河口を正面にみる西向き山裾部からその下方の平野部に位置する。

鳥飼川流域はその北方の龍宝寺山・東方の先山・南方には小さな峰である愛宕山という、いずれも領家新期あるいは同古期に属する花崗岩系の母岩からなる三山に囲まれている。この三山に囲まれる範囲には、各峰から派生した低位の山塊や丘陵が広がっており、いずれも砂礫・砂・シルト・粘土・火山灰層等から構成される大阪層群の下部亜層群とされるものである。鳥飼川流域の平野部とされるものは、厳密には砂礫・砂・シルト・粘土からなる中・低位段丘層であり、平野部は河口と広石小学校付近のみとされる。

遺跡は先山から派生した山塊の西裾部にあたり、中位段丘層からなる扇状地の裾部とその下方に続く低位段丘上に位置することとなる。第3図に示す調査区のうち、3～5トレンチ・B区の4調査区は低位段丘上となり、残る調査区は中位段丘層の範囲となることが分かる。



第4図 五色町と遺跡の位置



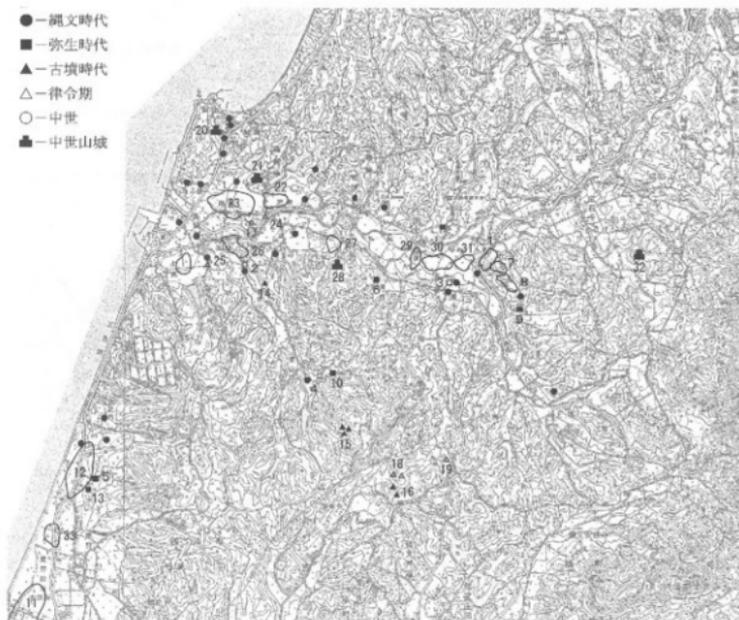
第5図 淡路島の地質

第2節 歴史的要因

喜住西遺跡周辺の歴史的な環境は、非常にコンパクトに納まる状況にあるといえる。というのも、北方の都志川流域から本流域に至る間にはほとんど遺跡の分布が無く、東城については先山の山塊部となるため、ここでも存在はまったく確認されていない。南方域は西浜町との町境付近から慶野松原にかけて遺跡の分布がみられはじめ、縄文時代前期の北所遺跡 (No.5)・弥生時代中期の御堂遺跡 (No.13) や次郎谷遺跡 (No.12)、奈良時代の慶野北松原遺跡、中世まで継続する松原千畳敷遺跡 (No.11) などが知られているものの、その間は非常に希薄な状態にある。つまり、烏飼川流域という限られた範囲内でひとつの地域史を形成しているのである。

縄文時代

特に注目したいのは、五色町内における縄文時代の遺跡が、現時点でこの烏飼川流域のみで確認されている事実である。同河川の河口付近で分かれる奥所川の分岐部付近に奥ノ下遺跡 (No.2)、その最上流部に中島遺跡 (No.4) が存在するものの、両遺跡ともその実態は明らかではない。ただ、中島遺跡からは旧石器時代から縄文時代草創期に属すると考えられるサヌカイト製の有舌尖頭器が1点出土している。一方、平野奥部に近い南岸の外ヶ鼻遺跡 (No.3) では、淡路島内でも類例の少ない縄文時代後期の竪穴住居跡が確認されている。



第6図 周辺の遺跡 (1/50,000) (国土地理院発行 1/25,000「都志」より)

弥生時代

この時期にも、遺跡数の急激な増加傾向は見受けられない。奥ノ下遺跡の北西部に石出遺跡 (No.26) が、中島遺跡の東側に倉谷遺跡 (No.10) がみられるとともに、鶴飼川流域にも面積的にかなりな広がりをもつ喜住西遺跡 (No.1)・喜住遺跡 (No.7)・飛谷遺跡 (No.8)をはじめとして、北岸に家の東遺跡、南岸の大崩遺跡 (No.6) など若干の広がりを見せるものの、まだ平野部の上流域に限られている。また、これらの集落遺跡はいずれも所謂“高地性集落”に分類される立地条件にあるものばかりであり、時期的にも中期の後半から後期を中心としている。このうち飛谷遺跡では、堅穴住居跡から建物を描いたと想定される絵面上器が2点出土している。喜住遺跡からは、同時期の土器棺墓も確認されている。一方、平野部に位置する外ヶ鼻遺跡では、中期に属する土器棺墓と木棺墓が確認されている。

古墳時代

集落遺跡はまったく未確認であり、奥ノ下遺跡南東の殿熊遺跡 (No.14) では小規模な丘陵頂部から銅鏡1面が出土していることから、古墳が存在していたのではないかと考えられる。中島遺跡からさらに谷を遡った山腹部に所在する愛宕山古墳群 (No.15) は、3基の円墳から成る後期古墳であり、1・2号墳は横穴式石室を内部主体とするが、3号墳は小石室を主体部としている。1号墳が群形成の契機となった古墳であり、石室内からは須恵器・土師器の土器類の他に、ガラス小玉・水晶製切子玉・勾玉・管玉等の玉類と鉄鎌や馬具・耳環など豊富な遺物が出土している。西淡町・緑町との町境に存在する築穴古墳群 (No.16) は現在2基の古墳が残るが、いずれも横穴式石室を内部主体とする。消滅してしまったものも含め、町内に存在していた古墳の半数近くがこの二つの古墳群に集中することとなるが、その立地条件等から勘案して、これらの古墳群は奥所川上流域に属するものではなく、西淡町の松帆地域あるいは三原町・緑町の倭文地域を意識して築造されたものと考えられる。

律令期

この時期にも、遺跡数の増加傾向は見受けられない。出石遺跡の北側段丘上にとみのほら遺跡 (No.17)・鶴飼八幡宮遺跡 (No.24) が、その西側に宗田原遺跡 (No.25) 等があり、河口部を中心とした展開をみせるが、その実態はほとんど明らかになっていない。津名郡の政治・経済的な中心である郡衙が、その地名から一宮町の郡家に置かれていたと考えられるため、海路を用いた租税・物資の運搬に適した海岸部が活気を帯びてきたものと考えられる。また、8世紀末から9世紀前半に操業していたとされる角床古窯址群 (No.18) と奥ノ池古窯址 (No.19) が築穴古墳群の付近に存在するが、愛宕山古墳群・築穴古墳群同様、国衙の置かれていた三原郡方面の関係によって構築・運営されたことが想定できる。

中世

この時期になると、爆発的に遺跡数が増加する。山間部にも2、3の遺跡がみられるものの、その多くは鶴飼川流域の平野部とそれも見下ろす段丘上に立地するようになる。比較的大規模となるものは、平野部の肥余遺跡 (No.22)・居内遺跡 (No.29)・オノ神遺跡 (No.30)・五反田遺跡 (No.31) などであるが、その最大となるものは河口部に成立する鶴飼中瀬遺跡 (No.23) である。流域平野奥部を占める肥余遺跡から五反田遺跡と対峙するように、河口部・港湾を押さえる鶴飼中瀬遺跡の図式がそこには読みとれる。流域平野部全体が活動拠点として最大限に活用されはじめたことを伺わせる。こうした集落遺跡を統括するように、海岸部には岡田城跡 (No.20)、鶴飼中瀬遺跡の北側には高丸城跡 (No.21)、中流部の南岸には市城跡 (No.28) が築城されるが、いずれも小規模な山城である。

参考文献

兵庫県 1996年『兵庫の地質』

五色町教育委員会・淡神文化財協会 1991年『柳杭遺跡 発掘調査報告書』

五色町教育委員会 1994年『五色町遺跡分布図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』

五色町教育委員会 社会教育課 1999年『ごしきの遺跡 平成2～9年度ほ場整備事業に伴う発掘調査』

津名郡町村会 1999年『津名郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』平成7～9年度 埋蔵文化財発掘調査

津名郡町村会 2000年『津名郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅱ』平成10年度 埋蔵文化財発掘調査

津名郡町村会 2001年『津名郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』平成11年度 埋蔵文化財発掘調査

津名郡町村会 2002年『津名郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅳ』平成12年度 埋蔵文化財発掘調査

第3章 喜住西遺跡（南地区）の調査

第1節 概要

南北に細長い調査区で、調査面積は2年度合わせて1,687㎡である。6段の棚田があり、各段の高低差は0.5～1.0m、全体の高低差は約5mある。次節で述べるように、中世以降、元は傾斜地であった所に平坦地を設けるために、地山の削平が行われており、それが現在の棚田にも受け継がれている。このため、削平が行われた部分は地山が遺構検出面となるが、棚田の落ち際には遺物包含層を挟んで複数の遺構面が認められるところがある。

発見された遺構には弥生時代、平安時代、室町時代、近世のものがあり、遺物では縄文時代のものも出土している。

縄文時代では石鏃や石匙などが出土している。縄文土器はまったく確認していないが、五反田遺跡では後期の土器が出土しており、関連性を考慮しても良いかもしれない。また、草創期の有舌尖頭器1点も単独で出土している。

弥生時代の遺構には竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝、ピット、旧河道などがある。中期後半～後期に属するものである。

竪穴住居跡は3棟あるが、1区の竪穴住居跡1が最も残りが良い。他の2棟（竪穴住居跡2・3）は周溝と思われるものを確認したのみである。

掘立柱建物跡は2区で1棟のみ確認できた（掘立柱建物跡1）。他のピットは時期を特定することができるものは少ないが、遺構の分布などから1、2区や5区のピットには弥生時代のものが存在すると考えられる。

土坑は1、2区と5区に散在する（土坑1～8）。このうち土坑3からは完形に近いものを含む弥生時代後期の土器が一括出土した。

溝は1区と3区の竪穴住居付近でいくつか確認しているが、浅く幅の狭いものである（溝1～10）。溝1は掘立柱建物1の周囲に巡らされた溝の一部と考えられるが、これ以外には区画を意図したようなものは認められない。

旧河道は6区の南西隅に東側の肩部を確認したが、平成10年度の3トレンチ、4トレンチでは西側が発見されていないので、丘陵裾を回るように、6区と3トレンチの間を北西に抜けているのであろう。

平安時代の確実な遺構は9世紀後半～10世紀初頭の溝一条である（溝11）。杯類を中心とした須恵器、黒色土器、土師器が多量に出土し、緑釉陶器も1点含まれる。平成10年度の調査では南北方向に直線的に延びる溝と思われたが、平成11年度の調査で、南へいくにしたがって緩やかに西へ曲がり、掘り込みも曖昧になり、やがて消失することが判明した。

中世の遺構にはピット、溝、土坑、畝状遺構がある。出土遺物から15世紀を中心とする時期が考えられる。

ピットは4区と5区を中心にこの時期のものが存在すると考えられるが、遺物の出土が少なく、時期を特定することができるものは少ない。4区のピット群などでは比較的通りの良いものが認められるが、建物を復元できるような並びは確認できなかった。

溝は調査区を横断するように南北に走行するものが数条あり、そのうちいくつかは現在の棚田の段の下に位置する。したがって、南地区の棚田は、この時期の地形改変を利用して耕地への転換が図られていると考えられる。

土坑は3区～5区にまばらに分布するが、5区では比較的集中する（土坑16～24）。上面に礫を積んだもの（土坑9）や、中に礫を入れたもの（土坑17）などがあるが、性格は不明である。特筆すべき遺物としては、土坑12から瀬戸灰釉花瓶が比較的残りの良い状態で出土している。

近世の遺構は1、2区を中心に分布し、土坑や溝、ピット列がある。遺物は少ないが、18世紀後半以降に位置づけられる。

土坑は1区で不整形の深い土坑と結び桶を埋めた土坑がある（土坑25～27）。性格は不明であるが、前者は瓦粘土の探掘坑のようなものかもしれない。

ピット列は2区で南北方向に並行に並んだものを3列確認した（ピット列1・2・3）。

第2節 層序

先述のように、南地区は丘陵の先端部に位置する。現在は棚田として開墾されているため、明瞭な段差が生じているが、北壁上層断面図（第8図）の地山の線を結ぶと20°ほどの傾きをもった緩傾斜地であることがわかる。

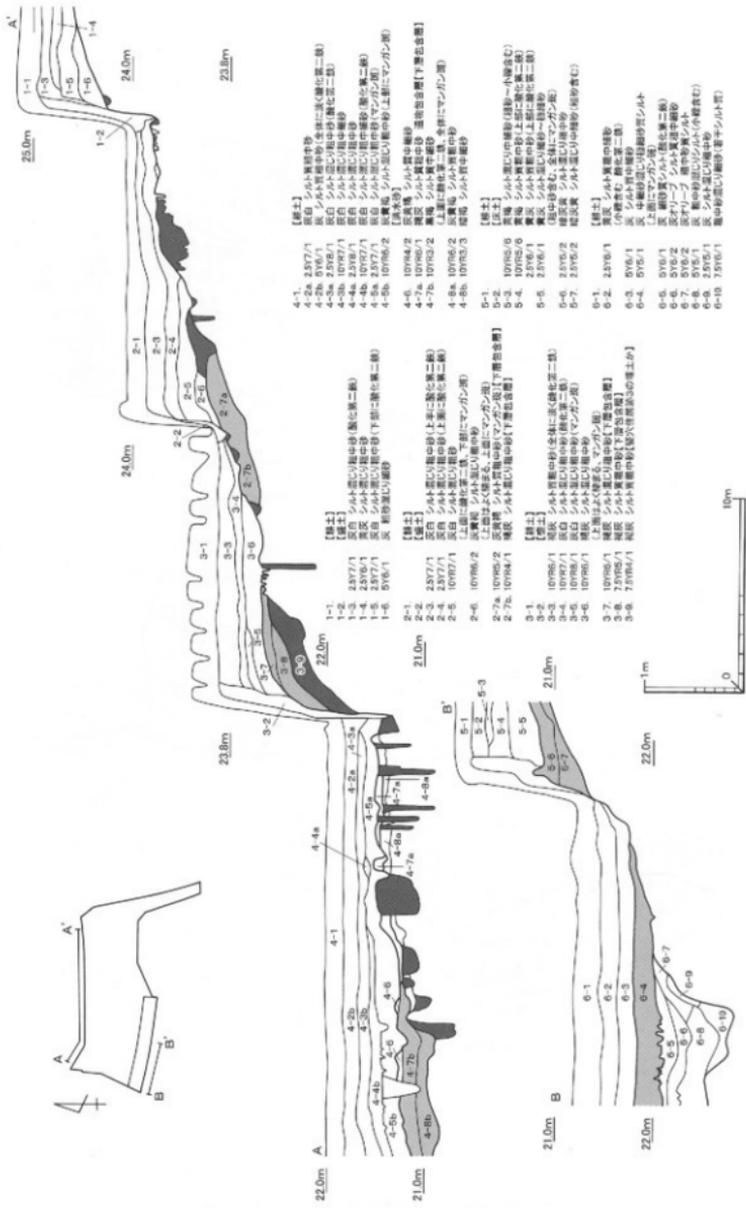
地山上に堆積した各層はシルト質あるいはシルト混じりの砂層を主体としており、上部の層では酸化第二鉄や酸化マンガンの沈着が顕著である。繰り返し耕地として利用されている。

棚田ごとに区分したそれぞれの小地区の堆積状況を見ると、耕作土から3層目ぐらいまでは、水平に広く堆積しているが、それ以下の層は各段の落ち際近くを中心に傾斜して堆積している。こうした堆積の状況は、傾斜地に平坦地をするために地山を削平したために生じたもので、本来は傾斜に沿って堆積していたものが分断され、その上部は水平な堆積となったものである。

遺物包含層と呼べる層は大きく分けて2層あり、上層（1-5・6層、2-4～6層、3-4～6層、4-5層、5-5層、6-3層）には中世を主とする遺物が含まれているが、遺物量はそれほど多くない。下層（2-7層、3-7・8層、4-7b・8b層、5-6・7層、6-4層）は弥生時代の遺物が主となるが、それ以降の遺物も若干混在する。

遺構面は下層遺物包含層を挟んだ上下で確認した。しかし、下層遺物包含層の分布範囲はそれぞれの段の落ち際付近に限られており、遺構面は1面のところが大半であった。

遺物包含層と遺構の時期や分布状況などをみると、先に述べた平坦地は、中世およびそれ以降に居住地として利用するために造成されたものと考えられる。段直下に土坑9が掘削されている3区や、南北方向に走行する溝（溝13）を境に現在の棚田より3mほど幅の狭い平坦地を造った4区、段直下に溝14が走行する5区などは、明らかに中世に行われた削平である。しかし、それ以前にはこうした削平が行われた痕跡は認められない。



第8図 周辺の遺跡

第3節 弥生時代の遺構と遺物

1. 遺構

弥生時代の遺構は、竪穴住居跡3棟（竪穴住居跡1～3）、掘立柱建物跡1棟（掘立柱建物跡1）、溝9条（溝1～3・5～10）、土坑（土坑1～8）、ピット、旧河道（旧河道1）が検出された。これらの遺構は弥生時代中期～後期に位置付けられる。

竪穴住居跡1（第9・10図 図版17～19）

調査区東端の1区で検出された住居跡である。標高約25.4mの地点に立地しており、黄褐色土の地山を掘り込んで造成されている。住居跡の東側中央および北東隅部は近世の擾乱によって、一部破壊されているが、平面形は東西約6.5m、南北約6.8mを測る円形を呈している。検出面から約30cmが残存していたが、西端部では壁面の立ち上がりは確認されておらず、全面的に後世の削平による影響を受けている。住居跡内には、4本の主柱穴と中央土坑、周壁溝が検出され、柱穴の外側は一段高い屋内高床部となっている。

4本の主柱穴は、直径40～50cmを測り、住居跡床面より約60cmの掘り込みが確認された。柱穴間の長さは、四辺とも約3.3mを測り、ほぼ均一である。中央土坑は、長径1.2m、短径1.0mを測る楕円形を呈し、断面形は浅いすり鉢状である。土坑内には焼土あるいは炭などは検出されなかったが、壁面の一部に被熱をうけた痕跡が確認された。また、中央土坑から北西方向に長さ約3.8m、幅約40cm、深さ約20cmを測る溝が住居跡外側へと伸びている。周壁溝は中央土坑から伸びる溝によって全周しないが、幅30～50cm、深さは残存状態のよいところで約10cmを測り、住居跡の形状に沿って巡っている。柱穴外側の屋内高床部は、床面より約15～20cm高く、北側では柱穴内側の地山を削り込み、東西および南側においては盛土によってそれぞれ床面との高低差をつけている。なお、南半部の屋内高床部の下層からさらに幅約30cm、深さ約20cmを測る半円する周壁溝が検出された。この南半部に巡る下層の周壁溝は築造当初につくられた住居跡にともなうものと考えられ、同一住居内において南側をわずかに拡張する遺り替えが行われている。

遺物は壺、甕などの土器（1～7）の他、石器12点が出土している。

竪穴住居跡2（第11図 図版22）

3区の西端に溝が弧状に検出されたため、竪穴住居跡と判断した遺構である。標高約23.2mの地点に立地し、4段目の標田（4区）によって西端半部は大きく削平されているが、直径約5.5mを測る円形に巡っていたものと考えられる。検出された溝は住居跡の周壁溝と考えられ、幅40～50cm、深さ約10cmを測る。住居跡内にはいくつかの柱穴が検出されたが、主柱穴と考えられるものは確認されなかった。

竪穴住居跡3（第11図 図版6）

4区の北端に円形に巡ると考えられる溝が検出されたため、竪穴住居跡と判断した遺構である。標高約22.5mの地点に立地し、大半は調査区外へ続いているが、直径約5.8mを測る円形に巡っていたものと考えられる。検出された溝は住居跡の周壁溝と考えられ、幅40～90cm、深さ約20cmを測るが、柱穴などは調査区内では確認されておらず、詳細は不明である。

掘立柱建物跡1（第10図 図版3）

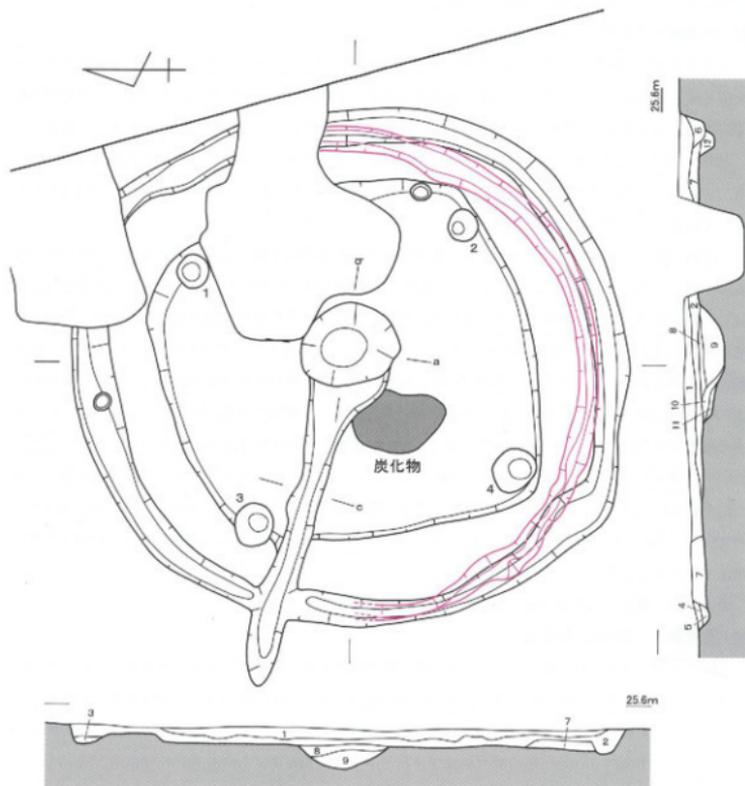
2区の北端、標高約24.8mの地点より東西2間×南北1間の並びをもつ柱穴列が検出された。北側と

西側はし字状の浅い溝（溝1）によって区画されているが、南側の並びは削平などによって十分に確認されなかった。

土坑1

1区の西端の落ち際、標高約24.8mの地点に立地し、直径約90cmを測る円形を呈している。後世の開墾による削平のため、深さ約14cmが残存するのみである。

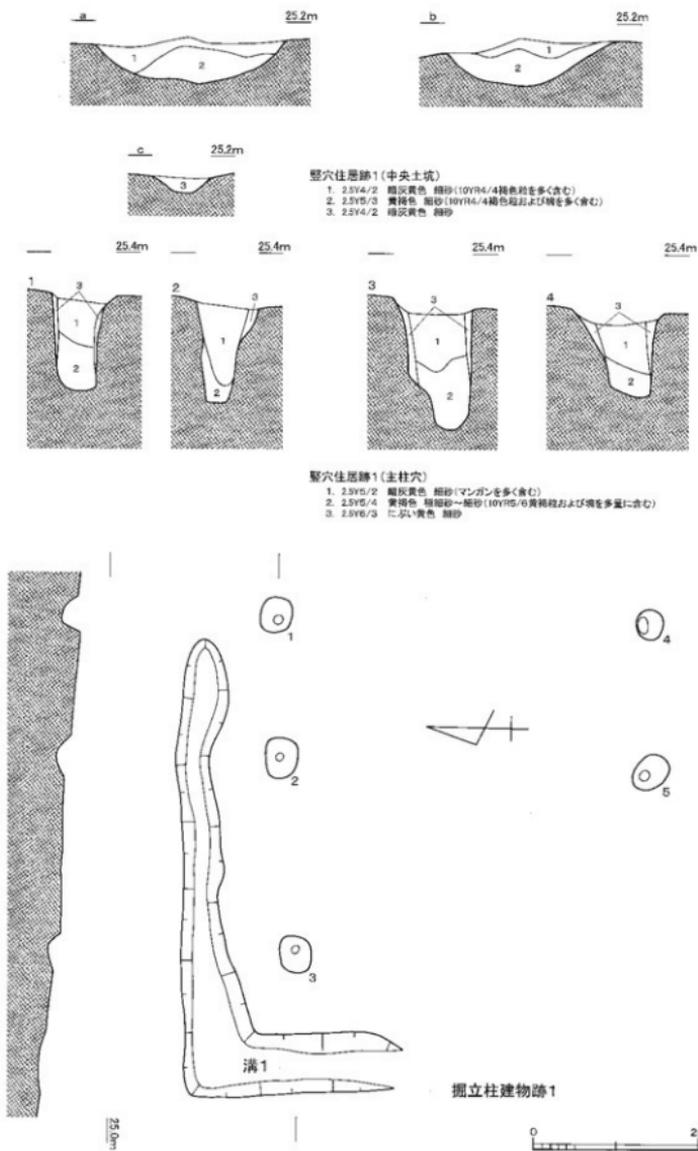
遺物は壺、甕など（57～62）が出土している。



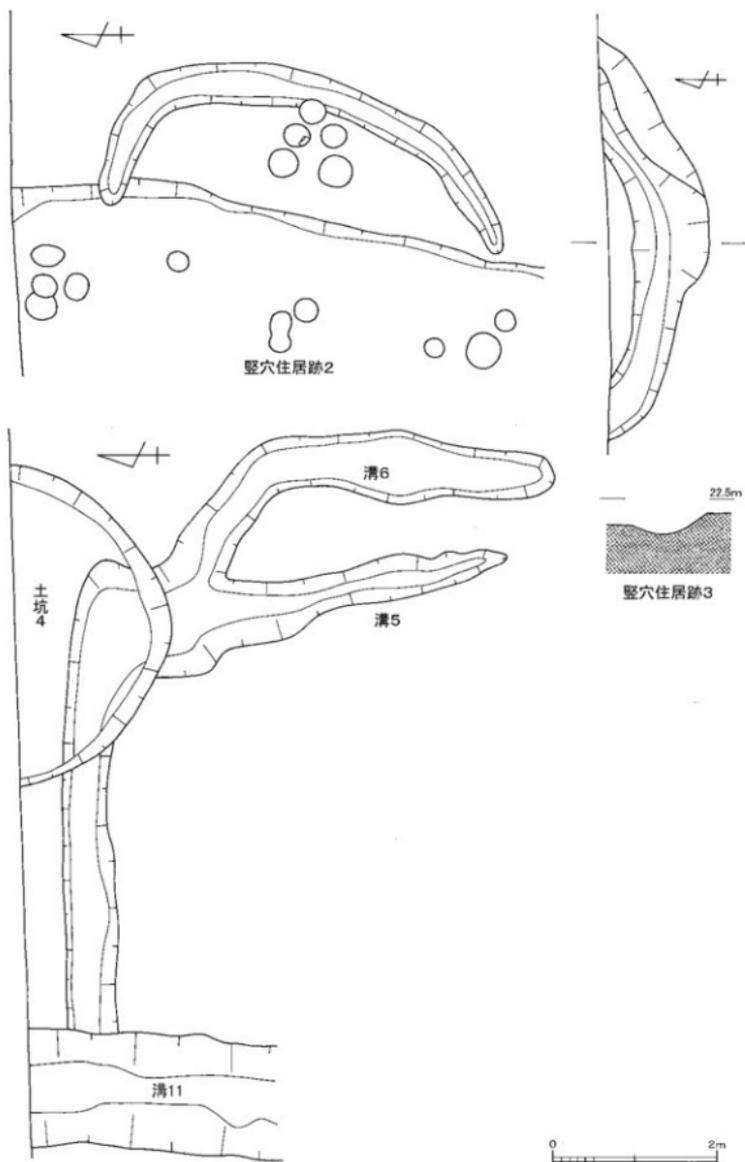
1. 25V7/3 透黄色 編織砂～細砂(25V5/6黄褐色粒およびマンガンを多量に含む)
2. 25V5/2 暗灰黄色 細砂(マンガンを多く含む)
3. 25V5/2 暗灰黄色 細砂(10V9S/9黄褐色粒および塊をわずかに含む)
4. 25V6/3 黄褐色 細砂
5. 25V6/3 黄褐色 細砂(25V5/6黄褐色粒及び塊をわずかに含む)
6. 25V5/3 黄褐色 細砂(25V6/3黄褐色粒及び塊をわずかに含む)
7. 25V6/3 に近い灰色 細砂(25V5/6黄褐色粒および塊を多量に含む 硬土)
8. 25V4/2 暗灰黄色 細砂(10V9A/4褐色粒をわずかに含む)
9. 25V5/3 黄褐色 細砂(10V9A/4褐色粒および塊を多く含む)
10. 25V4/2 暗灰黄色 細砂
11. 25V5/3 黄褐色 細砂(10V9A/6褐色粒を多く含む)
12. 25V6/4 に近い黄褐色 細砂

0 2m

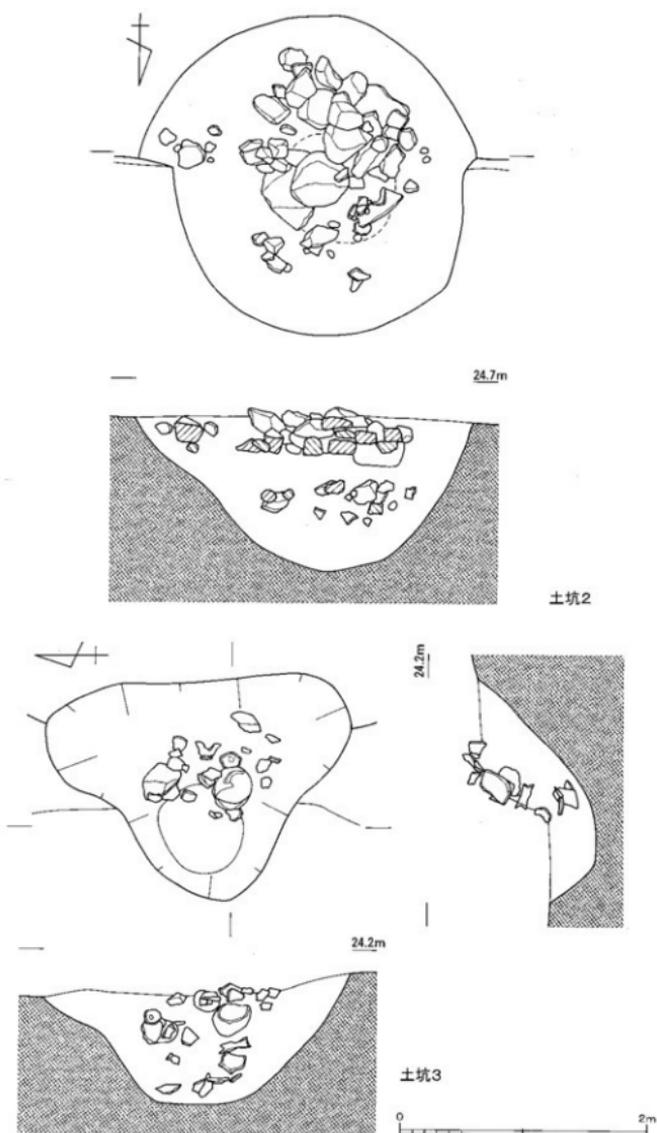
第9図 南地区 弥生時代の遺構1（竪穴住居跡1）



第10図 南地区 弥生時代の遺構2 (堅穴住居跡1・掘立柱建物跡1)



第11図 南地区 弥生時代の遺構 3 (竪穴住居跡 2・3、溝 5・6、土坑 4)



第12図 南地区 弥生時代の遺構4（土坑2・3）

土坑 2 (第12図 図版20)

2区の南端、標高約24.6mの地点に立地し、遺構の一部は平成11年度に津名郡町村会が調査を実施したC地区(以下、町村会C地区)にも広がって検出された。平面形は東西約1.4m、南北約1.3mを測る円形を呈し、深さ約60cmを測る。

遺物は検出面および中層から多くの河原石とともに壺、甕、高杯など土器(8~14)および石器1点(S9)が出土している。

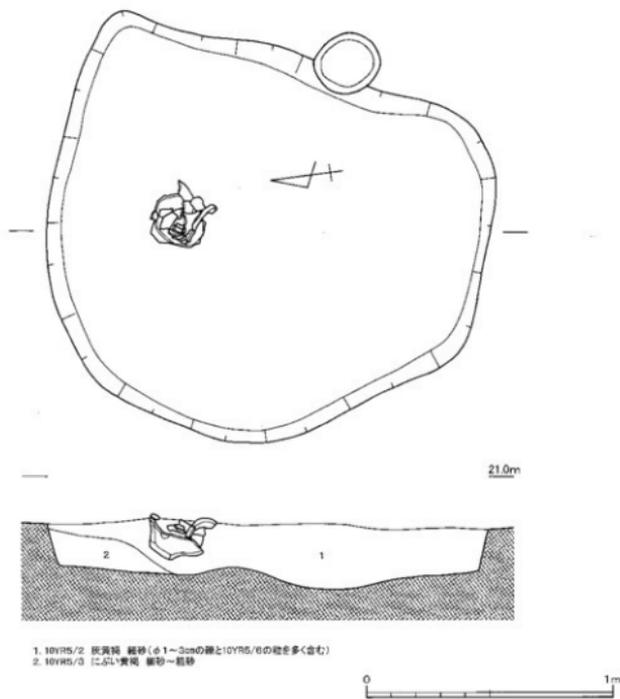
土坑 3 (第12図 図版21)

2区の西端、標高約24.1mの地点に立地し、後世の開墾によって遺構の西半部上方は削平された状態で検出された。平面形は東西約90cm、南北約1.2mを測る不整形な三角形を呈し、深さ約50cmを測る。削平前は、一辺約1.2mを測る隅丸方形の平面形を呈し、ナリ鉢状に掘り込まれていたものと考えられる。

遺物は壺、甕の他、鉢など土器16点(15~30)が一括して出土した。

土坑 4 (第11図 図版4)

3区の北端、標高約23.6mの地点に立地し、円形土坑の南側半部が検出された。調査区北側に続く、



第13図 南地区 弥生時代の遺構 5 (土坑 6)

直径約4mを測る円形土坑と考えられるが、今回の調査ではすべてを掘削できなかった。後述する「字」状に検出された溝5および溝6を切り込んでいるが、土坑南端には溝の底部が残存している。

遺物は甕、高杯など(49・50)が出土している。

土坑5(図版22)

5区の標高約21.2mの地点に立地し、中世の遺構面を掘り下げた下層から検出された。平面形は長径約2.2m、短径約2.0mを測る楕円形を呈し、深さ約40cmを測る。

遺物は甕の他、高杯、器台など土器(67~73)および石器16点(S8他)が出土している。

土坑6(第13図 図版22)

5区の西端、標高約20.8mの地点に立地し、土坑5同様、中世の遺構面の下層から検出された。東西約1.6m、南北約1.8mを測る方形を呈し、深さ約25cmを測る。

遺物は甕、壺など(77~79)が出土している。

土坑7・土坑8(図版9)

5区の北端、標高約21.0mの地点に立地し、中世の遺構面の下層から隣接して検出された。土坑8は長径約1.1m、短径約80cmを測る楕円形を呈していたと考えられるが、直径約1.1mを測る円形を呈する土坑7に切り込まれている。

溝1(第10図 図版3)

2区の北端、標高約24.5mの地点に立地し、東西方向に約5.6mが検出され、直角に南に曲がり約2.6mの地点で消失する。幅は40~80cmを測るが、深いところでも約10cmしか残存しておらず、周辺は広い範囲が削平されていると考えられる。

遺物は土器(31)および石器1点(S12)が出土している。

溝2(図版22)

1区の南端、標高約25.1mの地点に立地し、竪穴住居跡1の南西に位置している。南北方向に約7mが検出されたが、隣接する町村会C地区では後世の開墾にともなう削平によって検出されなかった。幅40~70cm、深さ約20cmを測る。

遺物は甕、壺など土器(51~53)および石器3点(S11他)が出土している。

溝3

1区の南西端、溝2の西側に立地し、南北方向に約3.7mが検出された。幅約50cm、深さ約20cmを測るが、溝2と同様、町村会C地区では検出されなかった。

遺物は七器(54・55)および石器1点(S10)が出土している。

溝5・6(第11図 図版4)

3区の北端、標高約23.6mの地点に立地し、「字」状に検出された。南北方向の溝は二股に分かれ、土坑4を城に合流し、ほぼ直角に流れを変え東西方向へと続いている。土坑4以南の2条の溝は、上方(東側)を溝6、下方(西側)を溝5としているが、合流付近は土坑4に切り込まれていたため、1条になった東西方向の溝については溝5あるいは溝6の判断ができず、溝5・6と仮称している。溝6はわずかに屈曲するが延長約5.5m、溝5は約4.2mがそれぞれ検出され、幅は溝6が約80cm、溝5が約60cmを測り、いずれも深さ約20cmを測る。また、溝5・6は土坑4底部に残る部分も含め約6.5mが検出されたが、西端は平安時代の溝11によって切り込まれ、それ以西では確認されなかった。

遺物は甕、壺、鉢など土器(32~48)および石器2点(S15他)が出土している。

溝7 (図版6)

4区の北西端、標高約22.5mの地点に立地し、竪穴住居跡3の南に位置している。南北方向に約2.8mが検出され、幅約40cm、深さ約15cmを測る。北側は竪穴住居跡3の周壁溝が、南側は後世の開墾によって、両側ともに削平されたものと考えられる。

溝8

5区の西端、標高約20.8mの地点に立地し、土坑6の南西に隣接している。南北方向に約30cmが検出され、ゆるやかに西に屈曲しながら調査区西側へと続いていく。幅約30cm、深さ約10cmを測る。

遺物は高杯(74)が出土している。

溝9 (図版9)

5区の北端、標高約21.0mの地点に立地し、東西約40cm、直角に北に曲がり約10cmが検出された。西端は削平され、北側は調査区外へと続いていく。幅約40cm、深さ約20cmを測る。

溝10 (図版9)

5区の北端、溝9の北西際立地し、東西方向に約30cmが検出された。両端とも削平され、幅約50cm、深さ約20cmを測る。

旧河道1 (図版10)

6区の南西端において、旧河道の東側肩部が検出された。深さ約1.6mが残存し、幅6m以上を測ると考えられるが、平成10年度に調査を実施した3・4トレンチでは西側の肩部が検出されていないため、丘陵の裾部に沿って北北西方向に流れていくものと考えられる。

遺物は壺、高杯など土器(75・76)および石器5点(S13・14・16他)が出土している。

2. 遺物

弥生土器と石器がある。弥生土器では土坑2、3から良好な一括資料がある。石器は竪穴住居跡1や土坑3、5などから出土している。ただし、遺構出土であっても、中世以降の遺構で明らかな混入品と判明するものや、ピットなど単独で時期を決しがたい遺構から出土したものは、原則として包含層出土遺物に準じて第6節で扱っている。

弥生土器

竪穴住居跡1出土土器(1~7)

住居跡の床面あるいは周壁溝などから出土した土器もみられるが、大半は埋土中からのもので、いずれも残存率の低い小破片である。そのうち、図化できたものは1~4の壺、5~7の甕の以上7点である。4点の壺は口縁部のわずか一部分が残存するのみであり、器高あるいは全体の形状などを復元することはできない。さらに、土器の表面は摩滅によって調整等の観察は困難であった。そのうち、床面直上から出土した2は頸部に列点文が巡り、口縁外面にはたて方向のミガキの痕跡が認められる。また、ほぼ垂直に立ち上がる口縁端部には、6条の波状文と円形浮文が飾られる装飾性の強い壺である。5~7の甕については、底部のみが残存しているため、器高や全体の形状などは不明であるが、いずれも外面には斜めあるいはたて方向のタタキ調整が施されている。

土坑1出土土器(57~62)

57・59・61・62は壺、58・60は甕である。57は口縁端部の下方が肥厚し、口径約29cmに復元される比較的大型の壺である。底部のみが残存する59・61・62は直線的に立ち上がり胴部へと至る類似する形状

を呈している。58の口縁には擬凹線文の痕跡がわずかに残っており、胴部は比較的細長い形状を呈していたものと考えられる。しかし、これらの土器の表面は摩滅が著しく調整等は不明である。

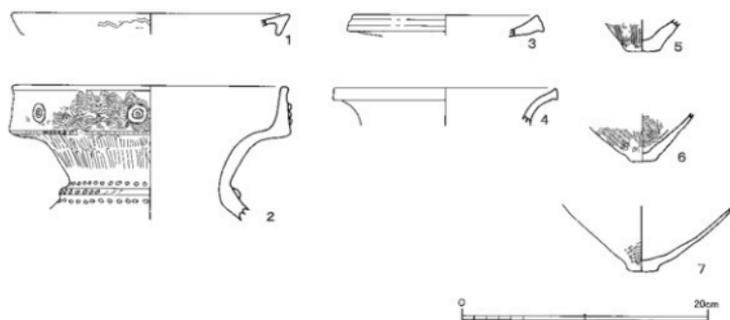
土坑2出土土器（8～14）

8～10は甕、11は高杯、12～14は壺である。8・9は口縁部の小破片に加え、調整は摩滅によって認めることはできない。底部が残存する10についても、摩滅が著しく調整は不明である。11の高杯は杯部の一部から脚部上方が残存しており、杯部は摩滅によって調整は不明であるが、脚部にはたて方向のミザギが施されている。12は口縁部の小破片であるが、低い立ち上がりをもつ直口壺と考えられ、内外面には横ナデの痕跡がわずかに残っている。13・14は緩やかに外反する口縁部をもつ広口壺である。13は口縁端部に横ナデ、内面にナデ、外面に斜め方向のハケメの痕跡が残っている。14は口縁端部がほぼ水平する面をもち、口縁部には浅い5条の凹線文が巡っている。また、頸部外面には列点文の痕跡が残り、胴部外面には斜め方向のハケメ調整が施されている。

土坑3出土土器（15～30）

16点の土器（15～30）が一括出し、器種も甕、壺の他に鉢が含まれる。

15～17・20～25は甕、18・19・26・27は壺、28～30は鉢である。15は最下層から出土した口径10.7cm、器高10.3cmを測る小型の甕である。内外面ともに摩滅がみられるが、口縁端部に横ナデ、内面の一部にナデの痕跡が残っている。また、外面にはタタキと斜めおよびたて方向のハケメ調整が行われている。16は口径14.7cm、腹径17.7cmを測り、外面にはタタキ、口縁部から内面および胴部下方に横ナデの痕跡が認められる。17は口縁部にナデ、胴部外面に斜め方向のタタキの痕跡が残っているが、全体的に摩滅によって調整の痕跡は認めにくい状態である。20～23および24・25は底部のみであるため、器高や全体の形状などは不明であるが、後者の24・25の外面には明瞭に斜め方向のタタキ調整が施されている。また、内面はともにナデの痕跡が認められるが、25については板状の工具によって行われたと考えられる痕跡が残っている。18は口縁端部が内傾する小さな面をなし、口縁部がわずかに受口状を呈すると考えられる壺である。外面には横ナデの痕跡がわずかに残っている。19は口縁端部に横ナデ、口縁下方から頸部外面にたて方向のハケ調整が施された口縁部が外反する壺である。底部が残存する26の内面には指頭圧痕が認められ、摩滅している内外面にもわずかにナデの痕跡が残っている。27は口径4.9cm、器高9.8cm



第14図 南地区 弥生土器1（竪穴住居跡）

を測る不均整な形状を呈する小型甕である。口縁部には横ナデ、外面全体には指ナデによる成形痕が明瞭に残っている。28は口径19.5cmを測る大型の鉢である。口縁部に凹線が巡り底部はやや丸みを帯びている。内外面ともに摩滅が著しく調整等は不明である。29・30は底部に低い台部が取り付く鉢である。口縁部の形状は直線的に立ち上がる29に対し、30は外反する口縁をもつものである。また、29は内外面ともにナデ調整が施されており、底部外面には指押さええの痕跡が残っている。30については、胴部外面にナデおよびタタキ、内面の底部には指押さええの痕跡がわずかにみられるが、完存する底部の外面全体には指押さええの凹凸が明瞭に残っている。

土坑4出土土器 (49・50)

いずれも残存率の低い甕(49)と高杯(50)である。そのうち、50は口縁外面直下に1条の凹線文が巡り、杯部は内彎する形状を呈している。内面に横ナデ、外面にはナデおよび一部にミガキの調整痕が残っている。

土坑5出土土器 (67~73)

67~69は甕、70~72は高杯、73は器台である。67の口縁部および68・69の底部は、いずれも表面の摩滅は著しく、調整等は不明である。70は内側を巡る内面突帯より低く水平に伸び、垂下する高杯の口縁であり、72・73は「ハ」の字状に開く高杯および器台の脚部である。いずれも表面の摩滅によって、調整等の痕跡を認めることはできなかったが、71の脚部上方にはしぼり痕跡がわずかに認められる。

土坑6出土土器 (77~79)

77・79は甕、78は甕である。口縁端部が上下に肥厚し、3条の擬凹線文の痕跡が残る77は、頸部には6本を1単位とした3条の直線文が巡っている。全体的に摩滅によって調整等は認めにくいだが、口縁部の外面に一部横ナデの痕跡が残る。78は口縁部が屈曲し、肩の張った胴部をもつ形状を呈するが、摩滅によって調整等は不明である。79は完存する甕の底部である。内面は摩滅しているが斜め方向のハケメ痕跡が認められ、外面底部には指押さええおよびナデの痕跡が残っている。また、外面にハケメおよびミガキの痕跡がわずかに残り、成形の段階にケズリが施され、のちミガキ等が行われている。

溝1出土土器 (31)

31はほぼ完存する甕の底部である。内外面ともに著しい摩滅によって調整等は不明である。

溝2出土土器 (51~53)

51は甕、52・53は甕である。51は内外面ともに摩滅によって調整等は不明であるが、口縁端部は上下にわずかに肥厚し、口縁部は屈曲する。52は体部の小破片であるが、外面には6本を1単位とした直線文と波状文が巡る。53は残存率が低く、全体の形状は不明であるが、直行する頸部をもつ直口甕と考えられる。口縁端部から3条の貼付け突帯が巡っている。

溝3出土土器 (54・55)

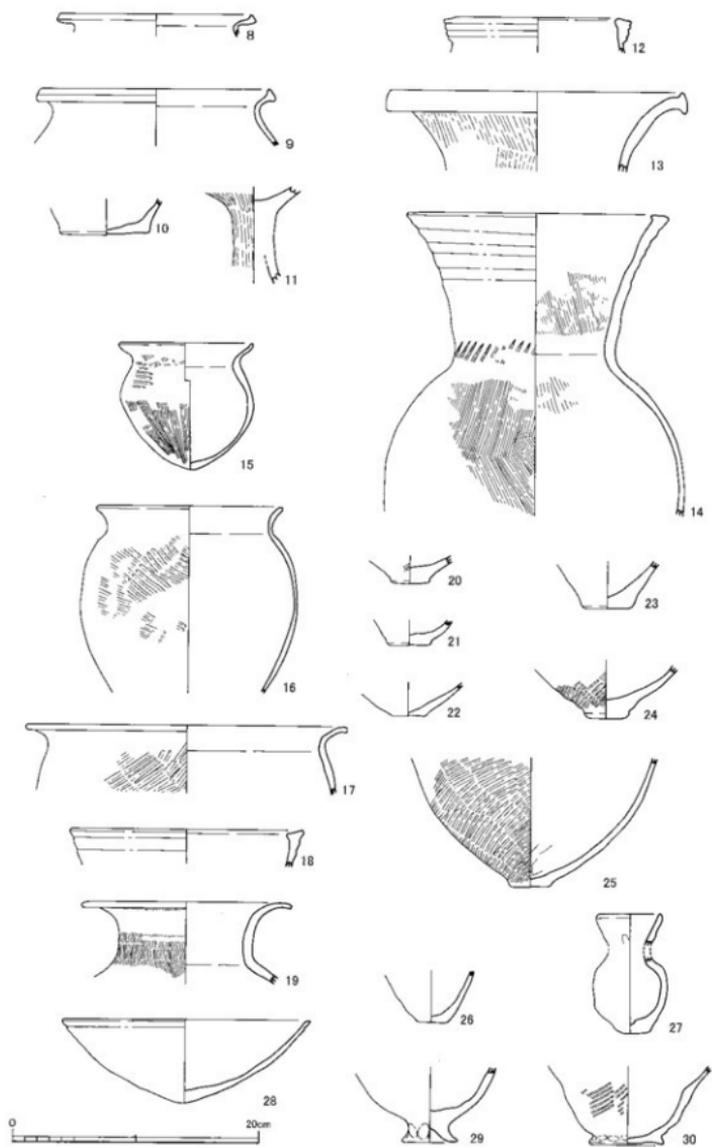
54・55はいずれも甕であり、口縁端部が外反する54の外面には横ナデが施されている。底部からの立ち上がり低い55の内外面は、著しい摩滅によって調整等は不明である。

溝4出土土器 (56)

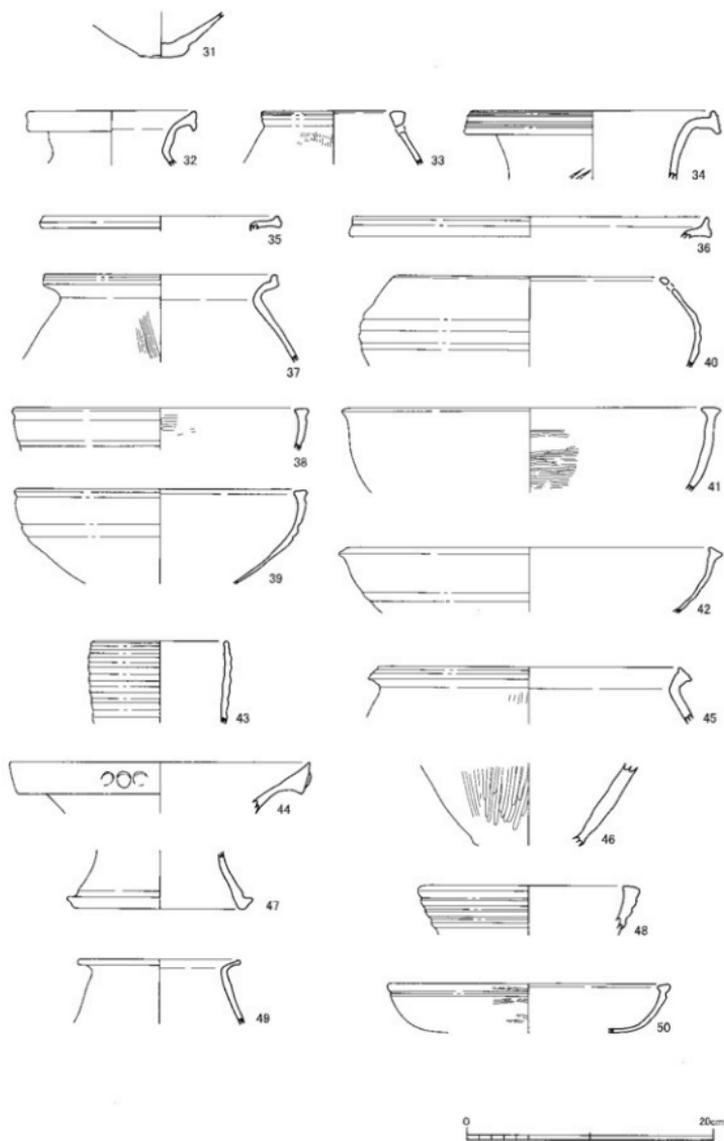
口縁端部の上方がわずかに肥厚する56は、外面の調整は摩滅によって不明であるが、内面には横ナデが施されている。なお、溝4は中世以降に掘削された溝と考えられ、この遺物は混入であろう。

溝5・6出土土器 (32~48)

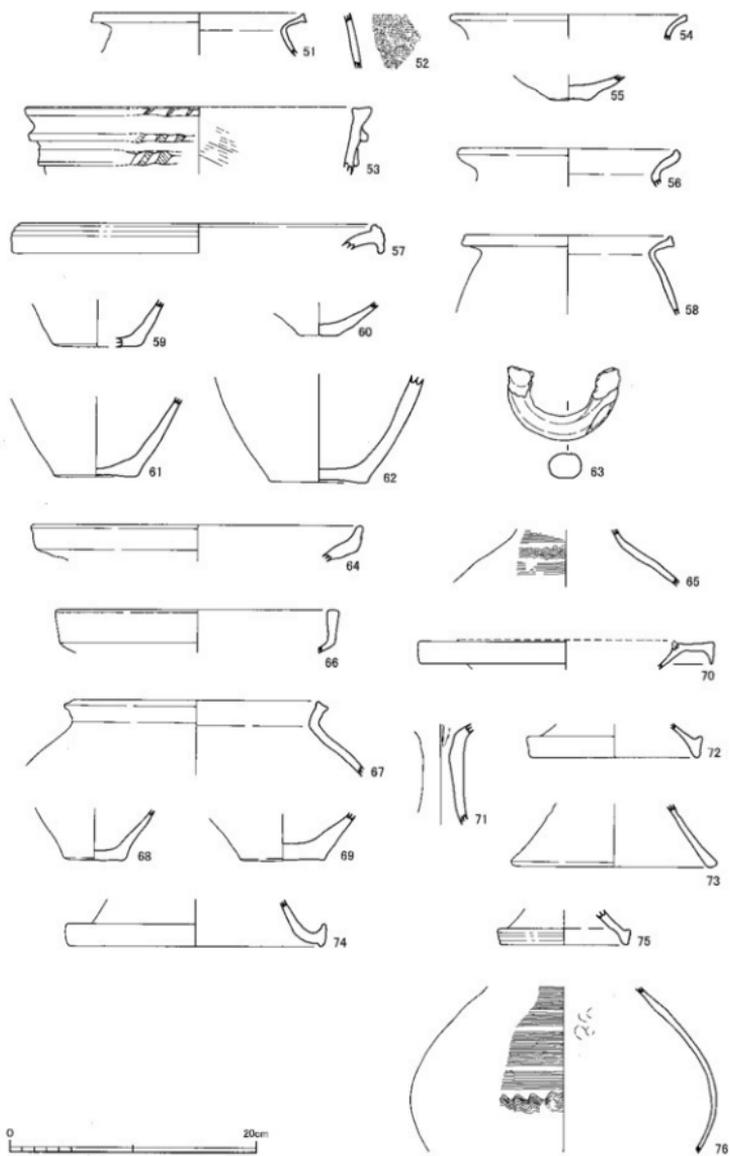
32~41は溝5から、42は溝6から、残る43~48は土坑4以西の地点(溝5・6)から出土している。



第15图 南地区 弥生土器 2 (土坑 2·3)



第16图 南地区 弥生土器3 (清·土坑)



第17図 南地区 弥生土器4 (溝・ピット・土坑・旧河道1)

32~36および43~45は壺である。残存率の低いもの(35・36・43~45)が大半を占めるが、32・34は口縁部が外反する広口壺であり、「ハ」の字状に開く口縁部をもつ33と直行する口縁部をもつ43の直口壺がある。調整の痕跡が残るもの(33・34・45)は少ないが、内外面ともに横ナデが施されている。また、44の口縁部には円形の浮文が飾られている。

37・46は甕である。受口状の口縁をもつ37の内面にはナデ、口縁部の内外面には横ナデ、外面には斜め方向のハケメがそれぞれ施されている。38~42および48は鉢である。38・39は口径約23cmを測る類似する碗形を呈するもので、外面にナデ、内面にミガキの痕跡がわずかに残っている。41・42は口径約30cmを測る。38・39に類似した碗形を呈する41に対し、口縁が緩やかに立ち上がる42は高杯の杯部とも考えられる。41の内面には横方向のミガキの痕跡が明瞭に残っている。口縁が狭まる形状を呈する40の口縁部には穿孔が認められる。

47は内外面とも摩滅が著しい高杯の脚部である。

清8出土土器 (74)

74は高杯の脚部としたが、小片のため壺の口縁部の可能性もある。わずかに横ナデの痕跡が認められる。

ビット1出土土器 (63)

63は半円形を呈する鉢に取り付くと考えられる把手部分である。

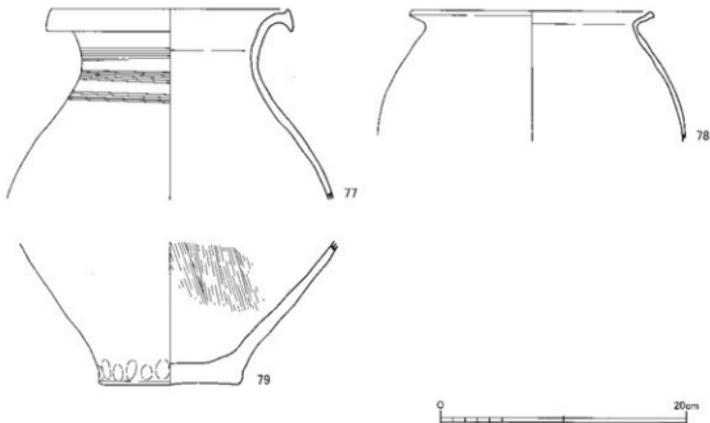
ビット2出土土器 (64)

64は口縁端部を上方につまみあげる形状を呈する甕であり、内外面に横ナデの痕跡がわずかに残っている。

ビット3出土土器 (65)

65は壺の頸部のわずかな破片であるが、内面にはナデ調整が施され、外面には上から9条の直線文、7条の波状文、7条の直線文が巡っている。

旧河道出土土器 (75・76)



第18図 南地区 弥生土器5 (土坑6)

75は「ハ」の字状に開く高杯の脚部である。内面にはケズリ、外面には横ナデの調整が施されている。
 76は直径24.6cmを測る球状を呈する壺の胴部である。内面にはナデが施されており、上方にわずかに指押さえの痕跡が認められる。外面上方に直線文、その下方に波状文が巡り、ナデの痕跡もわずかに残っている。

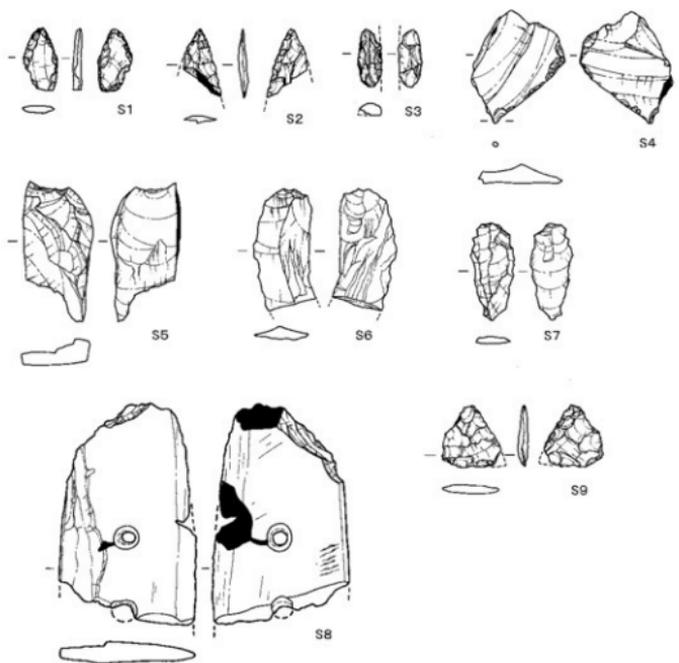
石器

竪穴住居跡1出土石器（S1～S7）

S1とS2は石鏃である。S1は細かな周辺加工で整形した五角形の平基式石鏃であるが、先端部に鋭さはなく、基部は折れ面をそのまま残す。基部側に抉入り状の剥離があり、形態を崩している。長さ1.9cmと小型である。下層の周溝から出土した。S2は先端部だけの破片であるが、全面加工で薄く丁寧な仕上げをしている。S1とはまったく異なった作りであり、縄文時代の遺物が流入した可能性が考慮される。

S3、S4は石錐である。S3は蒲鉾形の断面に整形されている。両端が欠損するが棒状錐であろう。S4は剥片の一端に、2面の錯交剥離で小さな錐部を作り出している。周溝内から出土した。

S5～S7は剥片である。S5の背面には多方向からの剥離面が観察されるが、S6・S7は腹面と



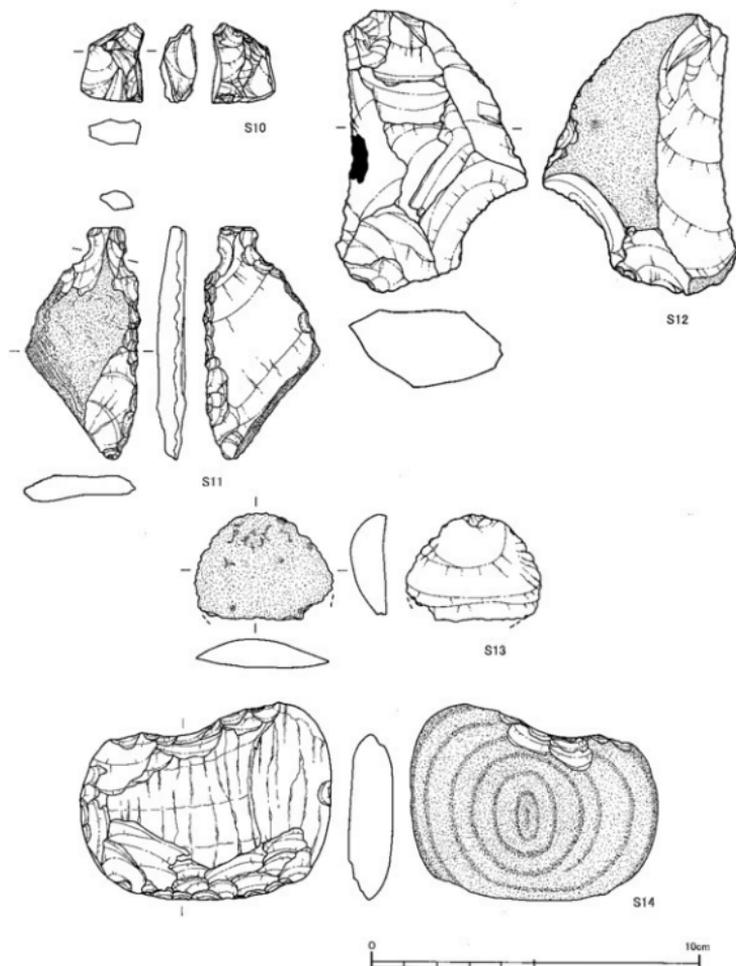
第19図 南地区 弥生時代の石器1（竪穴住居跡1・土坑）

同一方向で、形態も縦長である。3点とも打面はハジケている。

このほか、剥片・チップ4点が出土している

土坑3出土石器 (S9)

石鏃1点だけが出土している。S9は正三角形に近い平基式石鏃であるが、先端に鋭さはなく、左右



第20図 南地区 弥生時代の石器2 (溝・旧河道1)

も非対称である。先端側は全面に加工が及ぶが、基部側は周辺加工にとどめている。表裏に残る素材面から、薄く平坦な剥片を素材としていることがわかる。

土坑5出土石器 (S8)

S8は緑泥片岩製の磨製石包丁である。器体の約1/3を欠損する。刃部は両刃で刃縁、背縁ともにわずかに外彎する。紐孔は両側穿孔で、背縁と刃縁のほぼ中間に穿たれている。紐摺れが不明瞭なため主面がどちらになるか定かではない。

この他、削器1点、楔形石器1点、二次加工のある剥片2点、剥片・チップ1点が出土している。

溝1出土石器 (S12)

S12は礫面付きの大型剥片を素材とした石核である。礫面の状況から、原石は円礫であることがうかがい知れる。主に腹面側を作業面としており、上下に打面を設けている。

溝2出土石器 (S11)

S11は石匙で、石理に沿って剥離された板状の剥片の側縁に直線的な刃部を設け、一端に抉りを入れて摘み部としたものである。刃部の加工は粗く階段状となる。この他、チップ2点が出土している。

溝3出土石器 (S10)

楔形石器1点が出土している。S10は上下一対の加撃痕と剪断面が認められ、縦断面は凸レンズ状を呈する。

溝6出土石器 (S15)

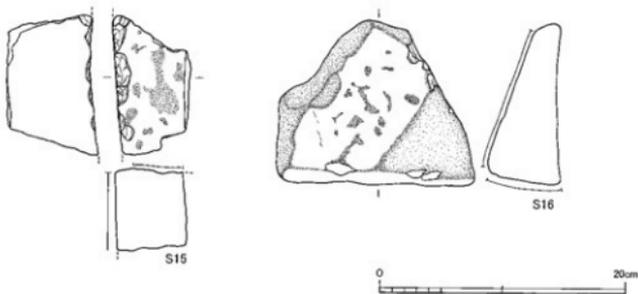
S15は砥石である。2面を除き、他は欠損面である。2面のうち1面は全面が研磨、もう1面は、窪んだ所以外に研磨が及び、角には打撃が加えられている。安山岩と思われる石を使用した荒砥である。

旧河道1出土石器 (S13・S14・S16)

S13はサヌカイトの剥片である。背面が自然面、円礫の一端を加撃して剥離した最初の剥片である。

S14は結晶片岩製の楔形石器である。円礫から石理に沿って割り取った、断面薄斜状の剥片に上下一対の加撃痕を残すものである。サヌカイト製の一般的な楔形石器よりもかなり大型である。

S16は砥石である。砂岩の自然礫をそのまま使用したもので、砥面は表面と下端の2面に認められる。下端は全面が平滑に研磨されているが、表面は窪んだ部分を磨き残す。



第21図 南地区 弥生時代の石器3 (溝・旧河道1)

第4節 平安時代の遺構と遺物

平安時代に属する遺構は非常に少なく、明確なものは溝11のみである。その周辺で多数のピットを検出しているが、同一面で弥生時代・中世の遺構も検出されるため、それらのピットを時期別に振り分けることはできない状況にある。従って、本節では溝11についての記述のみとなる。時期的には、後述する溝11内から出土する土器によって、概ね平安京Ⅱ期中型式同新型式に相当するものであり、9世紀後半から10世紀初頭に編年されるのではないかと考える。

1. 遺構

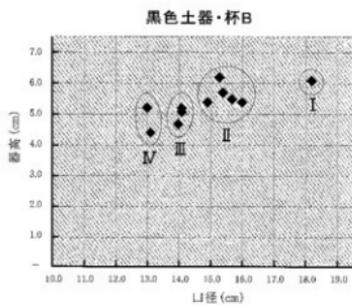
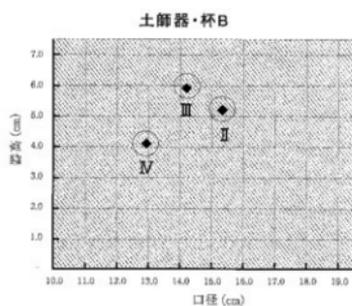
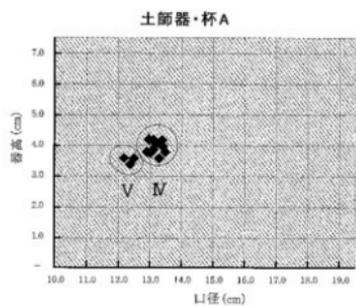
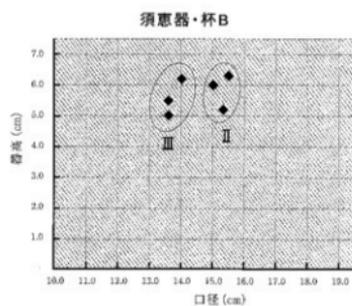
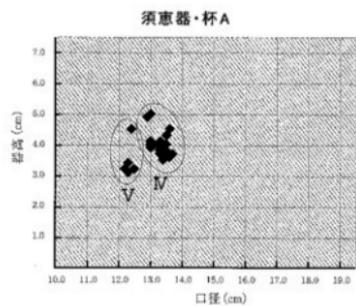
溝11 (第22図 図版5・23)

3区に位置し、平成10年度の1トレンチ北側調査区外からほぼ南北方向に伸びる溝状の遺構である。南進するに従って次第に深度が浅くなり、調査区全幅のほぼ中央部で消失することとなり、調査区北壁からの延長は約17mを測る。調査区北壁からほぼ直線的に10m程南下した後、南端部がわずかに西側に湾曲して終息する。断面形状は浅い「U」字状を呈し、最大深度約30cm、最大幅約1.4mを測る。基本的な方向は周囲の水田畦畔と同様に南北の方位を取るとともに、本遺構の南側に存在する2条の溝や中世の溝13等も同様の方向となる。また、周辺地形および溝底のレベル等から勘案して、北から南（最終的には南西）に向かって流れていたことが知れる。

北半部を中心として内部には多量の上器が包含されており、特にその底部を中心として堆積する状況にある。土器は須恵器を中心とするが、土師器・黒色土器もかなりの点数にのぼる。完全形を留めるものは極少ないが、比較的大型の破片が多く、接合復元可能なものを多数認めることができることから、極短期間に投棄または廃棄されたものと考えられる。その堆積状況・出土状態から判断して、比較的一括性の高い土器群として捉えても問題はないものと考えられる。



第22図 南地区 平安時代の遺構(溝11)



第23図 南地区 溝11出土土器指数

2. 遺物

上記したように、溝11内から須恵器を中心として比較的一括性の高い土器類が出土している。数量的に概観すると、須恵器が5割程度を占め、土師器が3割、黒色土器が2割を占める状況にある。器種構成の面では、壺・甕の貯蔵形態のものが著しく少なく、杯・碗・皿類に代表される供膳形態の器種がその大半を占める傾向にある。こうした状況は須恵器・土師器・黒色土器のいずれにも伺える傾向であり、本遺跡の性格を如実に示しているものと推定される。また、遺存状況は非常に悪いものの、溝11内より土器とともに刀子状の鉄器1点とスラッグ2点が出土している。

溝11出土土器

須恵器（杯、鉢、壺、皿）、施釉陶器（緑釉陶器：皿）、土師器（杯、皿、鉢、壺、甕）、黒色土器（杯、鉢、甕）が出土している。ここでは各土器の形態的・型式的な特徴を記述するに留め、法量、色調、整形・調整手法等の詳細に関しては、第2表を参照願いたい。

須恵器（80～123）

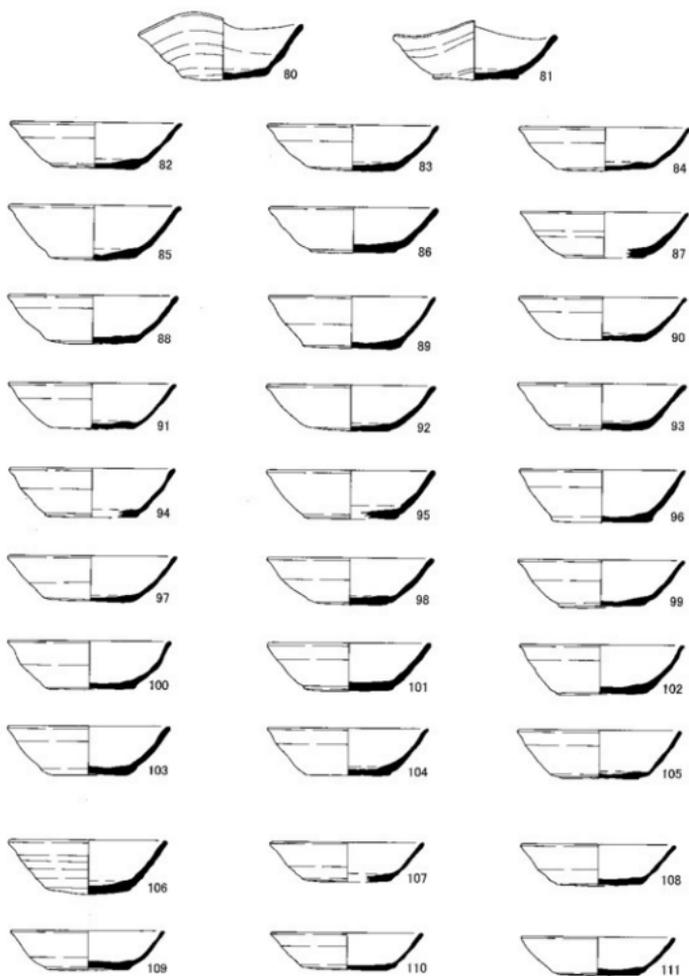
80～111は杯Aとなる。器高指数によって細分を行うとIV・Vの2型式となり、器高の高い1類と低い2類に分類される。IV型式は80～105であり、口径的には13cm台のものが相当する。1類は器高が5cm前後の80・81の2点であり、82～105は器高が4cm強～3cm半ばまでの2類となる。ただ、80・81の2点は焼成時の歪みが著しく正確な器高が測定できないため、最高器高と最低器高の平均値をそれに当てているため、数値的にはかなり不正確なものとなっている。従って、一応「IV1」型式として分類したが、「IV2」型式と同化する可能性を含まれている。口径13cmを中心とするV型式の1類は106の1点のみであり、器高は4.5cmとなる。107～111は器高が3cm前半のV2型式となる。口縁部の形態は僅かに内湾しながら開き、口縁端部が小さく外湾するものを基本とするが、97・101・105・106～111のように、ほぼ直線的に開いて納まるものもみうけられる。V2型式は後者が基本形態となる。底部の調整は、唯一106がヘラキリ後にナデを加える以外はヘラキリのままとする。

112は台付の鉢となる。体部は上方に向かって直線的に開き、口縁部外面が小さく屈曲して丸く納まる。脚部は外開きとなり、水平接地する。底部外面に爪当たりの痕跡を留める。

113～121は杯Bである。器高指数の判明するものうち113～115が口径15cm強のII型式となり、116・117が口径14cm弱のIII型式となる。II型式は2形態に細分され、113・114が器高6cm強の1類であり、115が器高5cm強の2類となる。III型式も2形態となり、116は器高6cm強の1類であり、117・118は器高がそれ以下となる2類である。口縁部の形態は、114・115が小さく外湾して開く他は、外湾しながら角度を変えて上方に伸びる形態となる。脚部は底体部境から小さく開くが、121のみ底体部境のやや内側に付加される。113には爪当たりの痕跡が底部外面に残る。

122は壺の口縁部である。僅かに開き気味となりながら伸び、端部は水平に開いた後内傾して極小く立ち上がる。

123は耳皿である。灰釉陶器の可能性も完全には否定しがたいが、施釉の状態を確定できないため、ここでは一応須恵器として記述する。全体の半分強を欠損する細片であるが、耳部への屈曲を確認することができる。内面には淡い緑色の釉がかかるが、耳部の内側・体部外面に明確な釉を確認できないため、自然釉がかかったものと考えられる。胎土は他の須恵器とは異なり灰白色を呈するため、他地域からの搬入品の可能性が高い。



第24図 南地区 平安時代の土器 1 (溝11)

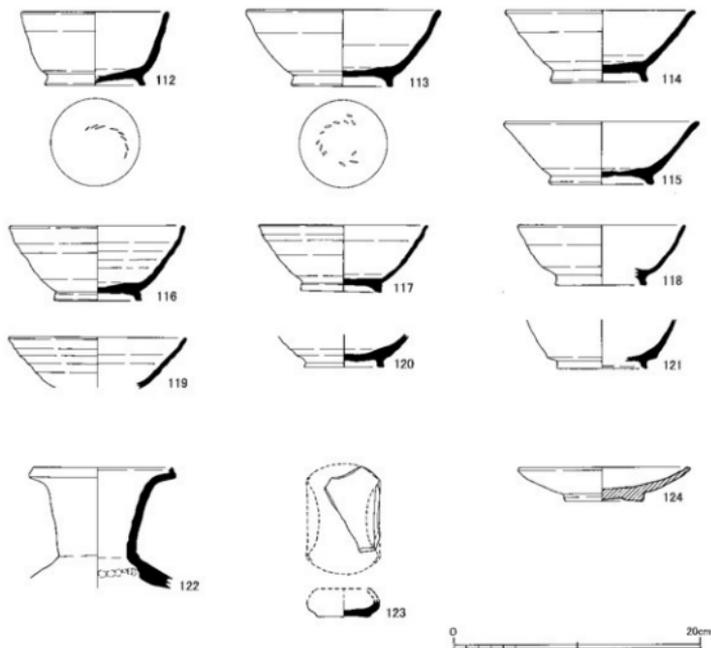
緑釉陶器 (124)

124は緑釉陶器の皿である。口縁部はわずかに内湾しながら開き、その端部内面に極浅い溝をなした後丸く納まる。平高台は削り出しとなっており、その底部中央をわずかに削り込む蛇の目高台である。見込み部には重ね焼きの痕跡を留めるが、平高台部にはそれを看取することはできない。器面のヘラミガキも比較的丁寧に施されており、器壁は須恵器に類似した硬質の焼成となる。全面旋軸が行われているが口縁端部のみ除かれ、外面も薄い施釉となっている。こうした特徴から、平安京Ⅱ期古段階に属する山城系の製品と考えられる。

土師器 (125~149)

125~138は杯Aであり、IV型式とV型式に分かれる。IV型式は口径13cm前半の125~134であり、器高は4cm前半の1形態のみであるが、須恵器等との比較から2類に相当するものとなる。V型式には口径が12cm前半の135~138が当たり、器高は3.5cm前後の2類のみである。体部の形態は直線的に開き、口縁端部が極小さく外湾するものを一般的とするが、136は口縁端部を小さく上方に積み上げる。137は他のものより底径が極端に小さくなり、138は底体部境が丸味を残し前代の杯の形態を留める他は、基本的な形態が須恵器杯と類似する点が多い。また、132と135がヘラキリ後に底部をナデるが、他のものはヘラキリのままの調整となる。

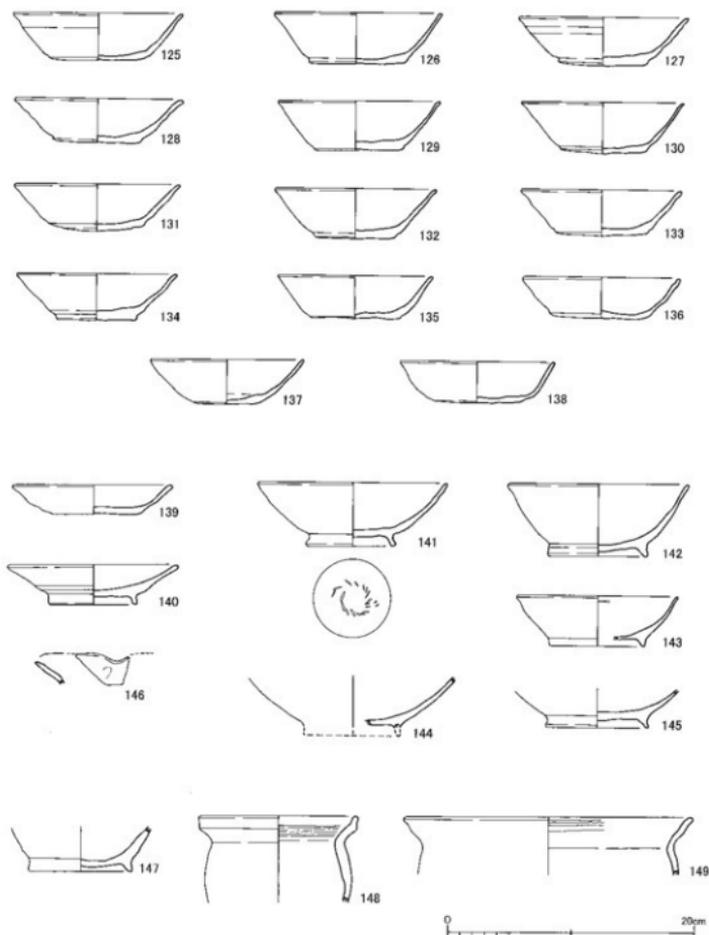
139は皿としたが、杯に近い形態を色濃く留める。口縁部が僅かに外湾しながら開く形態となる。140



第25図 南地区 平安時代の土器2 (溝11)

は台付の皿であり、脚台部は短く垂下する。底径が139より格段に小さいため、大きく開いた印象があり、体部外面は僅かに外湾して、口縁端部は丸く納まる。

141～145は杯Bとなる。器高指数の明らかな141～143をみると、それぞれ141がⅡ2型式に、142がⅢ1型式に、143がⅣ2型式に細分することができる。141は口径15cm強、器高5cm強となる。体部はわずかに内湾しながら大きく開き、脚部は開き気味に比較的高い形態となる。底部外面に爪当たりの痕跡を留める。142は口径14cm強であるが、器高が6cm弱とかなり器高の深い形態となる。体部は僅かに内湾しながら開き、口縁部が小さく外湾して納まる。脚部は外開きとなるが、長さがやや短くなる。143は



第26図 南地区 平安時代の土器3 (清11)

口径13cm弱であり、器高は4cm強となる。体部が比較的大きく内湾した後口縁部が外湾する。脚部は短く、断面三角形となる。3例とも表面の剥離が著しく調整は不明であるが、143の口縁端部内面に横方向のヘラミガキの痕跡を確認することができる。

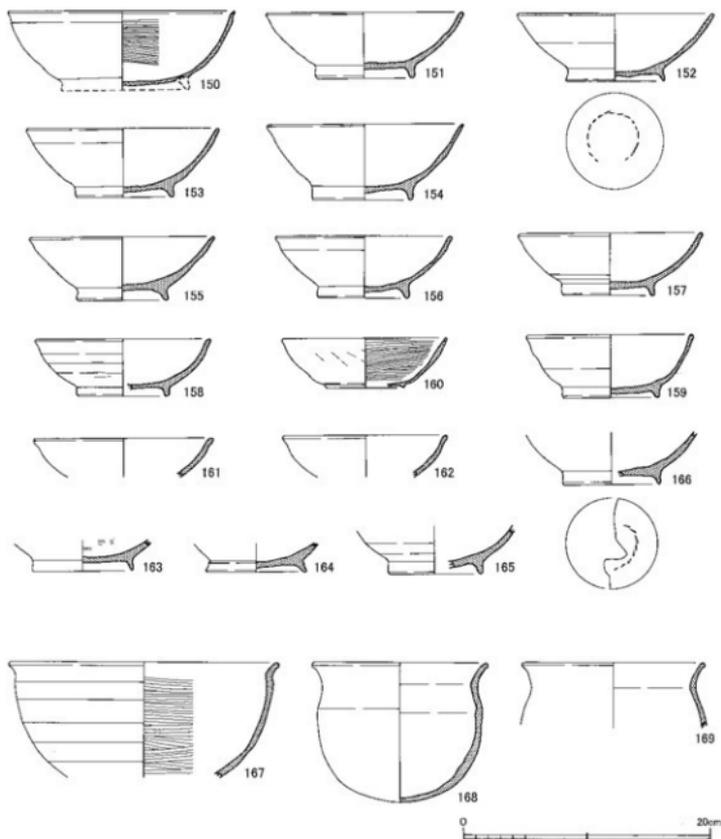
146は片口鉢になるとと思われる口縁部の細片である。

147は壺の底部であり、短い脚部が底体部境に取り付く。

148・149は壺となる。148は小型に分類されるものであり、頸部が比較的大きく、口縁部は小さく外反した後端部が上方に立ち上がる。口縁部内面を板ナデ調整する。149は口縁部の屈曲が大きくないものの、端部がさらに外湾する形態となる。口縁端部内面に横方向のヘラミガキを施す。

黒色土器 (150~169)

内面が黒灰色または暗灰色を呈するA類となるものであり、B類の存在は確認されない。



第27図 南地区 平安時代の土器4 (溝11)

150～166は杯Bあるいは碗として分類されるものであり、口径的に4型式に細分される。I型式は150の1点であり、口径18cm強となる。体部は内湾しながら開き、口縁端部は小さく擴んで外湾する。体部内面には横方向のヘラミガキを残すが、脚部は欠損する。151～155がII型式となる。口径は15cm～16cmを測る。体部は僅幅かに内湾するが、口縁端部の屈曲がほとんど無いため、I型式と比較すると直線的な形態となる。脚部は僅かに外開きであり、長い形態を留める。III型式は156～158の3例であり、口径14cmのものである。口縁端部が小さく外湾する形態となる。159・160は口径13cm強のIV型式であり、口縁端部は直線的に納まる。脚部はI型式と同様の形態にある。土師器杯Bさらには須恵器杯Bの指数を参考にすると、I型式については類例がないため断定はできないが、恐らく1類に分類されるものと推定される。II型式も1類であり、III型式は2類となるものである。IV型式については非常に判断に困るところではあるが、159を1類、160を2類として考えておきたい。166は底部外面に爪当たりの痕跡を留める。

167はボール型の形態となる鉢である。短い口縁部は小さく外反し、口縁端部は丸く納まる。

168・169は体部が球形を呈する小型の甕である。いずれも頸部の縮まりが小さく、体部から口縁部へと緩やかに移行する。杯類とは異なり、土師器甕との形態的な共通性はまったく認められない。

溝11出土金属器 (T1・T9・T10)

刀子状の鉄器1点とスラッグ2点が出土している。

T1は両端部を欠損しており、現長で約15.6cmを測る。上端から4.5cmの箇所を段をもって両側に広がり、幅1.5cmとなる。そこから下端に向かって幅を次第に細くする。断面形状は、段から下段が二等辺三角形となり、段から上段が縦長方形となることから、上段部分を中子とした刀子と考えられる。

T9・T10はスラッグである。T9は最大長5.5cm、T10は最大長3.4cmを測る。



第28図 南地区
鉄器 (溝11)

第5節 中世の遺構と遺物

1. 遺構

ピット (第29図 図版15)

4区の溝13の西側に多数のピットが集中している。ピットの径は15cm以下のものが大半で、深さは20cm前後のものが多い。建物跡を復元できる配列は確認できなかったが、集中状況から、溝13あるいは5区との段と方向を同じくするような建物が存在したと考えられる。

このうちピット9には1個体の土師器羽釜(175)が割って入れられていた。

溝12 (図版4)

3区北端の中央付近に位置する。南東から北西の方向に走行する溝であるが、幅30cm、深さ5cm足らずの小さなものであり、平成10年度の1トレンチでのみ検出した。自然流路のようなものであろう。

遺物は、瓦質土器摺鉢(178)がある。

溝 13 (第29図 図版15)

4区中央付近を緩やかに蛇行して南北に24m以上走行する溝である。幅90~125cm、深さ約20cmあるが、溝を境に段差を生じており、上方側(東側)が約5~10cm高くなっている。溝の西側はほぼ平坦となっており、ピットが多数存在する。時期が判明する遺物は出上していないが、土坑12に切られており、それより以前に掘削されたことが知られる。

溝 14 (図版10)

5区東端に位置し、4区の段下を南北に走行するが、南方に向かうほど段の直下から離れて行く。4区と5区の段差は約1mあり、今回の調査区の中では最も段差が大きい。溝の掘削もこの造成とほぼ併行して行われたと考えられる。幅70~90cm、深さ約10cmで、長さは津名郡町村会の調査分を含めて28m以上確認している。

遺物は、土師器羽釜(177)がある。

土坑 9 (第30図 図版24)

2区との段差に接した、3区北東隅近くに位置する。径2.3m、深さ40cmの円形土坑である。上面には華大よりも少し大きな石が、東側に寄って敷き詰められていた。土坑の断面形に添うように、中央が少し下がっている。埋土は7層に細分され、上部には黄灰色の、下部は灰色の埋土が堆積している。

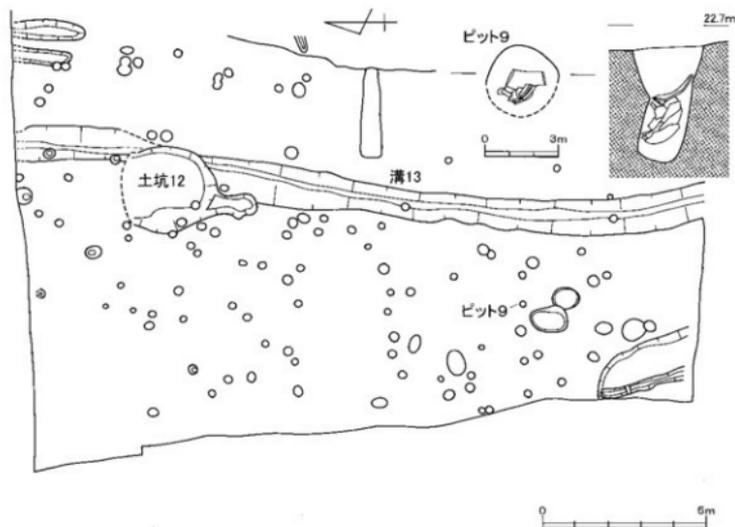
遺物は、土師器羽釜(179~182)がある。

土坑 10 (図版24)

土坑9の南に約2m離れた位置にある。長径1.2m、短径1m、深さ25cmの楕円形土坑である。

土坑 11 (第30図 図版24)

3区中央付近に位置する。長径2.1m、短径1.5m、深さ20cmの楕円形土坑で、西側に浅い溝のような



第29図 南地区 中世の柱穴群

窪みが短く取り付く。埋土は3層に分かれ、中層に地山土のブロックを多く含む層を挟む。

土坑12 (第30図 図版24)

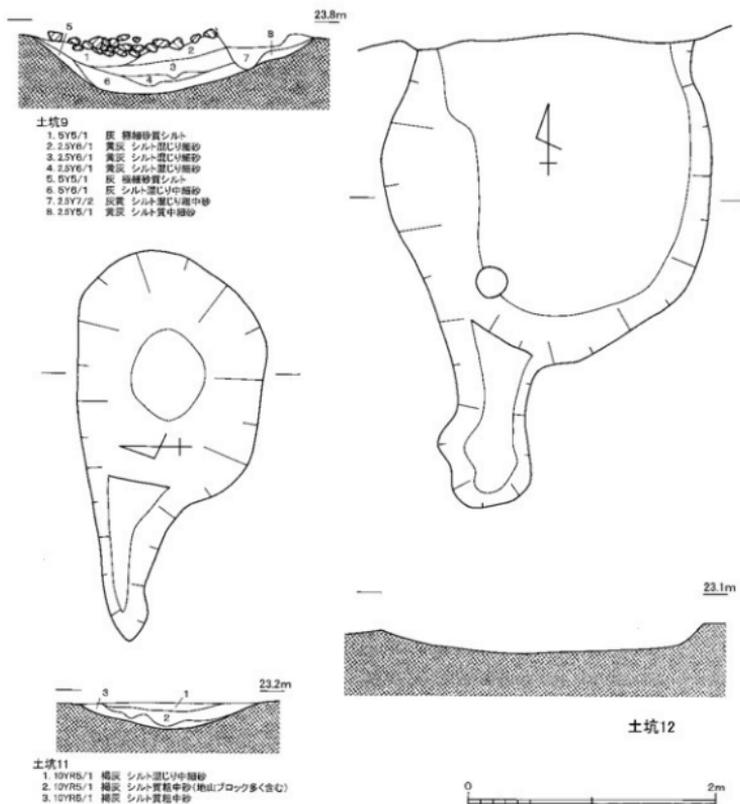
4区北東寄りに位置する。径2.6m、深さ20cmの浅くやや歪な円形土坑である。南側には浅い溝のような窪みが短く取り付く。平成10年度の調査区に北端がかかっていたはずであるが、調査時には認識できなかった。埋土は1層である。

遺物は、土師器羽釜(183~186)や瀬戸・美濃系灰釉陶器花瓶(188)などがある。

土坑13 (第31図 図版24)

4区南西寄りに位置し、規模や埋土が類似した土坑14と接している。長径80cm、短径70cm、深さ22cmの楕円形土坑である。土坑内には6個の礫が、底から10cmほど浮いた位置に並べられていた。礫は最大長10~20cmほどの垂角礫である。

遺物は、土師器皿(189・190)、羽釜(191・192)がある。



第30図 南地区 中世の土坑1

土坑14 (第31図 図版24)

長径1.16m、短径78cm、深さ24cmのやや歪な楕円形土坑である。底には中央より北側に寄って礫が散漫に置かれていた。礫の大きさは最大長20cm以下の亜角礫で、土坑13の礫よりも小さなものが主となる。埋土は1層で、地山土の小ブロックを多量に含む。

土坑15

4区南西隅に位置し、5区との段差によって西側が削られている。全体の形状は不明であるが、円形状を呈するとすれば、径4mほどの比較的大きな土坑になると思われる。深さは約30cmである。

遺物は土師器羽釜(193)がある。

土坑17 (第32図 図版25)

5区北東寄りに位置する。長軸方向の長さ2.1m、最大幅約1.7m、深さ50cmの不整形な土坑である。土坑の底は平坦で、南壁際では礫が底から壁に沿うように積み上げられていた。礫は円礫や亜角礫で、大きさは最大長が10~30cmぐらいのものである。

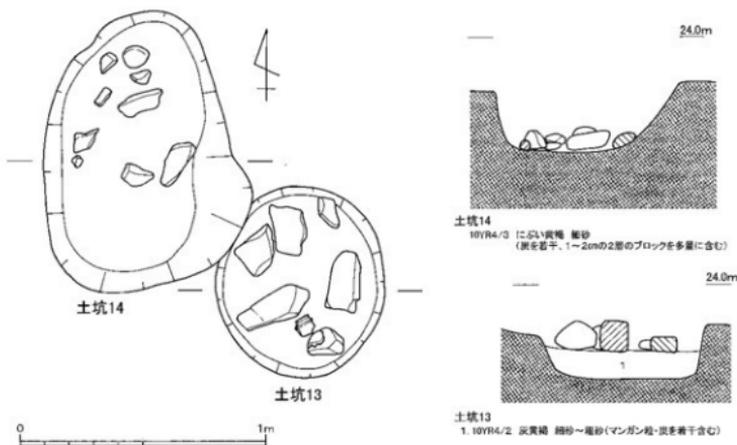
土坑18 (図版7・25)

5区北端近くにあり、2年次にわたる調査区にまたがって検出されたため、全体の形状は不明瞭な点がある。東西4.9m、南北80cm~1m、深さ約10cmの溝状を呈していたと考えられ、西端の底部では厚さ2cm弱の炭化物層が30cm×60cmほどの範囲に広がっていた。土坑の東端と西端には幅20cmほどの浅い溝がほぼ直角に取り付き、全体としてはクランク状となる。土坑18の北西側には不整形な浅い落ち込みや溝状の遺構が連続して認められ、この土坑と一体となる遺構である可能性もある。

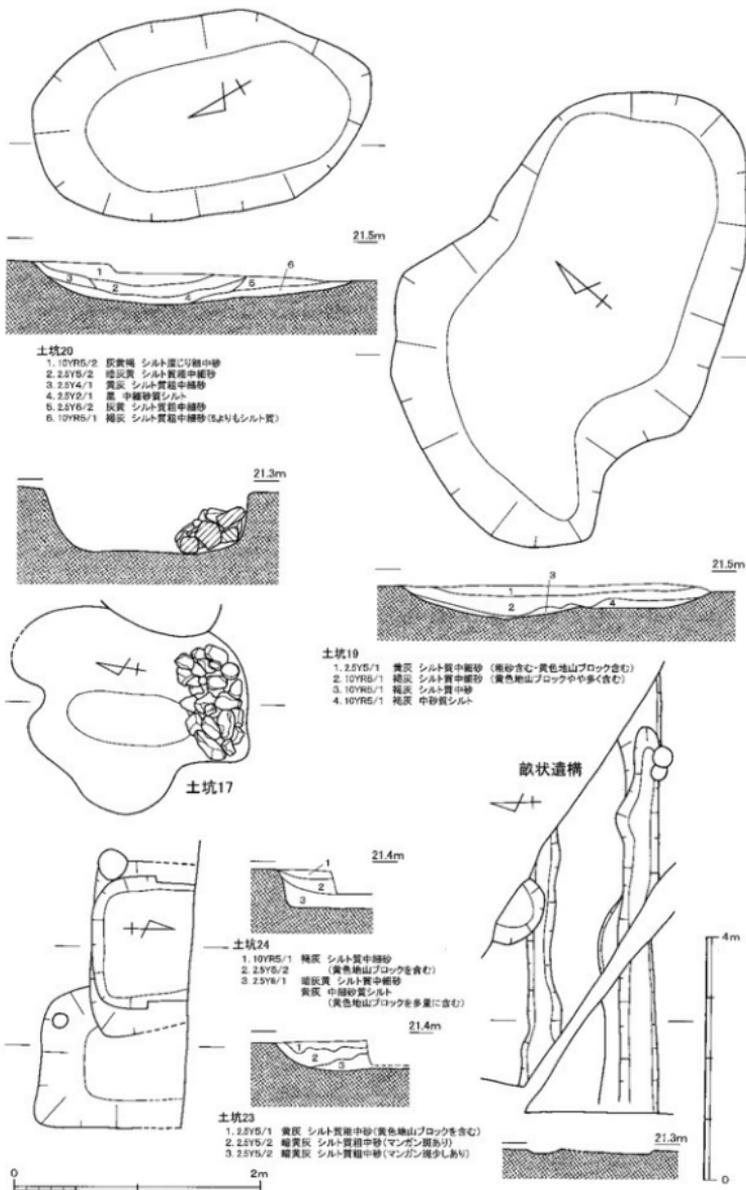
遺物には土師器鉢(194)と須恵器鉢(195・196)がある。

土坑19 (第32図 図版25)

5区中央付近に位置し、この付近にはこの土坑と類似した浅くやや大きな土坑が集中する。長軸方向



第31図 南地区 中世の土坑2



第32図 南地区 中世の土坑・敵状遺構

の長さ3.9m、最大幅2.6m、深さ25cmの不整形な土坑である。埋土は、主に褐灰色の砂質土で、上層には地山のブロックが含まれている。

土坑20 (第32図 図版25)

土坑19の南西に近接する。長径2.8m、短径1.6m、深さ30cmの浅い楕円形土坑である。埋土は、6層に分かれ、上半は砂質土であるが、下半はシルト質である。

遺物は龍泉窯系青磁蓮弁文碗(197)がある。

土坑21

土坑19や20などの集中する一角の北東に位置する。一角のみを確認したが、西側への広がりには明らかにできなかった。

遺物は土師器羽釜(199)がある。

土坑23 (第32図 図版8)

5区北端中央に位置し、土坑25と切り合っている。北側は調査区外に延びるが、長方形と思われる土坑で、長さ1.2m以上、幅1.15m、深さ25cmである。埋土は3層に分かれるが、黄灰色系の砂質土で、類似している。

土坑24 (第32図 図版8)

長方形土坑と思われ、南北80cm以上、東西1.1m、深さ30cmである。埋土は3層に分かれ、上層と下層には地山ブロックが多く含まれる。

畝状遺構 (第32図 図版7)

5区北西隅にあり、東西方向に平行して走る溝2条のみ確認できた。溝と溝の間隔は約1mあり、溝の幅は40~60cm、深さは10cmほどでごく浅い。

溝の埋土は1層で、洪水砂と思われる灰黄褐色の粗い砂が堆積していた。

2. 遺物

ビット2出土土器 (172)

172は土師器皿である。口径11.8cm、体部は短く斜め方向に伸び、口縁端部は薄く仕上げている。

ビット6出土土器 (170)

170は土師器小皿である。口径11.8cm、体部は短く斜め方向に伸び、やや内弯し、口縁端部は薄く仕上げている。

ビット7出土土器 (171)

171は土師器皿である。口径11.2cm、体部は短く斜め方向に伸び、口縁端部に沈線2条を施す。

ビット8出土土器 (173)

173は土師器羽釜である。口径22.6cm、口縁部は、直立気味で、断面三角形を呈する鐔部をもち、鐔部の端部が丸みをもつ形態のものである。タタキ成形で、外面は未調整でタタキ目残り、内面はハケ目調整を行う。体部外面には煤が、内面には付着物がある。

ビット9出土土器 (175)

175は土師器羽釜である。口縁部は内傾し、断面三角形の鐔部をもつが、痕跡程度のもので、器高が低くやや扁平化した形態である。口縁部内面には凹みをもち、タタキ成形で、体部外面はタタキ目残り、内面は横ナデを施す。

ピット10出土土器 (174)

174は土師器羽釜である。口径25.8cm、口縁部は内傾し、断面三角形を呈する貼り付け成形の鐙部をもつ。鐙部内面には凹みをもたない。タタキ成形で、内面は刷毛目調整を施す。

ピット16出土土器 (176)

176は土師器足鍋の脚部である。残存長12.35cm、径2.3cm、面取りを行い、部分的に指押さえが認められる。

溝12出土土器 (178)

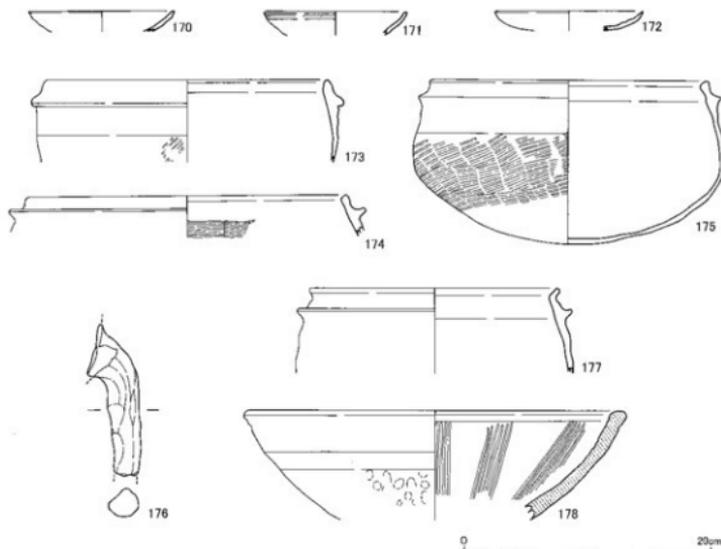
178は瓦質土器溜鉢である。口径30.0cm、内湾する体部から口縁端部は水平に切った形態で上面に平坦面をもつ。内面には、10条1単位の間隔のおろし目が施されており、体部内面から体部上半部までは横ナデ、体部下半部は不定方向のナデ調整が認められる。

溝14出土土器 (177)

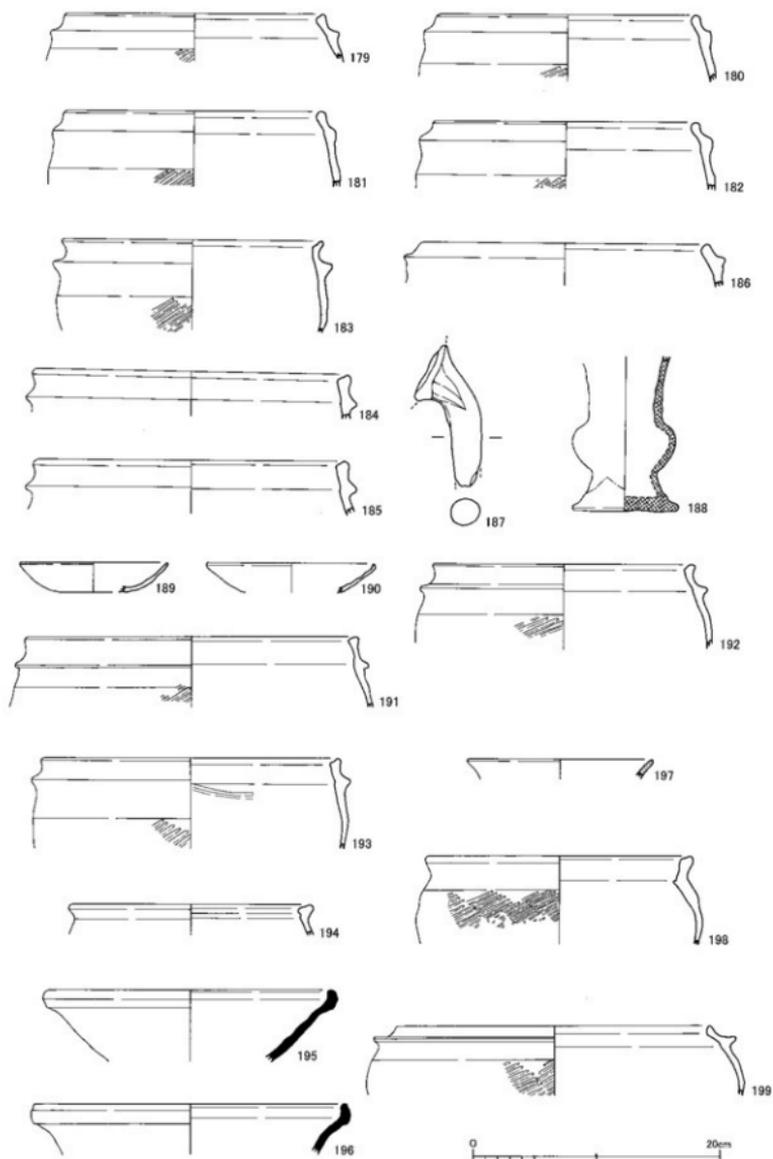
177は土師器羽釜である。口径20.2cm、口縁部は内傾するが、口縁端部は外方につまみ出し、断面三角形の鐙をもつ。内外面はナデ調整を施し、外面に煤が付着する。

土坑9出土土器 (179～182)

土師器羽釜が4点出土した。鐙部が、断面三角形を呈するが痕跡程度のもの(179)と、鐙が段状の突帯に退化したもの(180～182)とがある。179は口径20.6cm、口縁部が内傾し、鐙部が痕跡程度のもの、口縁部内面に凹みをもつ。タタキ成形で、口縁部内外面ヨコナデ調整、体部外面にはタタキ目が残る。180は口径20.6cm、181は口径20.2cm、182は口径21.2cm、いずれも口縁部が内傾し、鐙が段状



第33図 南地区 中世の土器1 (ピット・溝)



第34図 南地区 中世の土器2 (土坑)

の突帯に退化したものである。タタキ成形の後、口縁部内外面をナデ調整し、段状の突帯を形成する。その際に段部内面にも凹線が形成される。

土坑 1 2 出土土器 (183~188)

土師器羽釜、土師器足鍋脚部、瀬戸・美濃系灰釉陶器花瓶が出土した。

183~186は断面三角形の罫をもつ土師器羽釜である。183は口径20.7cm、しっかりした断面三角形の罫部で、口縁部は直立し、口縁端部を外方につまみ出す。タタキ成形で、外面はタタキ目が残りに、口縁部内外面と体部内面はヨコナデ調整を施す。184~186は口縁部が内傾し、罫部が痕跡程度のもので、口縁部内面に凹みをもつ。タタキ成形で、口縁部内外面にヨコナデ調整を施し、体部外面にはタタキ目が残る。

187は土師器足鍋の脚部である。長さ11.6cm、径2.2cm、外面に面取りが認められる。

188は残存高12.7cm、底径8.6cm、平底で、体部は半球形状を呈し、頸部は直立する瀬戸・美濃系灰釉陶器花瓶である。外面は全面に施釉され、内面と底部外面は露胎である。

土坑 1 3 出土土器 (189~192)

土師器皿、羽釜が出土している。

189・190は平底で体部は直線的に外方開く形態の土師器皿である。189は、口径11.9cm、体部が直線的に外方に開く形態で、体部は内外面とも横ナデ調整を施す。190は、口径13.7cm、器壁は薄く、内外面ヨコナデ調整である。

191・192は土師器羽釜である。罫部は痕跡程度で、口縁部内面に強いナデによって形成された凹みをもつ。口縁端部は面を持ち、口縁部内外面ヨコナデ、体部外面はタタキ目が残る。

土坑 1 5 出土土器 (193)

193は土師器羽釜である。口径23.6cm、罫部は痕跡程度で、口縁部のすぐ上の内外面に強いナデによって形成された凹みをもつ。タタキ成形、内外面ナデ、内面ハケ目調整の後、ナデ消しを行う。

土坑 1 8 出土土器 (194~196)

194は土師器鍋である。口径19.0cm、体部から短い口縁部が立ち上がる壘型タイプの鍋である。口縁部は内傾し、口縁端部を内側に巻き込む。

195・196は須恵器鉢である。いずれも口縁部内面にわずかに凹みをもち上方につまむ形態である。195は口径25.0cm、196は口径22.9cm、焼成は甘い。

土坑 2 0 出土土器 (197)

197は龍泉窯系青磁蓮弁文碗の小片である。

土坑 2 1 出土土器 (199)

199は土師器羽釜である。断面三角形の短い罫をもち、口縁部は内傾する。口縁部内面は強いナデで凹む。外面にはタタキ目が残りに、口縁部・体部内面はヨコナデ調整を施す。

土坑 5 出土土器 (198)

198は土師器鍋である。体部から短い口縁部が立ち上がり、口縁端部上面が水平な形態のものである。外面はタタキ目が残りに、内面は板ナデ調整を施す。なお、土坑 5 は弥生時代の遺構と判断され、この土器は混入であろう。

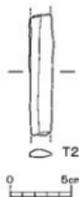
これらの遺構出土土器のうち土師器鍋・羽釜について岡田・長谷川の分類によれば(岡田・長谷川2003年)、まず、羽釜形状タイプでは、播磨型A系列I A類に相当し15世紀前半に比定されるもの(177・18

3)、播磨型B系列I A類に相当し15世紀前半に比定されるもの(199)、播磨型A系列I B類に相当し15世紀中頃に比定されるもの(173・174)、播磨型A系列I C類に相当し15世紀後半に比定されるもの(186)、播磨型B系列I C類に相当し15世紀後半に比定されるもの(175・179・184・185・191~193)、播磨型II類に相当し16世紀代に比定されるもの(180~182)がある。甕形タイプの鍋では、播丹型V類に相当し15世紀後半に比定される(194・198)。

土師器鍋・羽釜以外では、須恵器鉢(195・196)は東播系須恵器こね鉢E 1類に相当し、14世紀後半に比定されている(池田2004年)。瓦質土器播鉢(178)については、形態的には、栗岡編年2期(14世紀前半)相当の備前焼播鉢に類似する(栗岡2000年)。瀬戸・美濃系灰釉陶器花瓶(188)は、藤澤編年古瀬戸後III期相当のもので、15世紀中頃に比定されている(藤澤1996年)。龍泉窯系青磁蓮弁文碗(197)は、蓮弁の形態からみて13世紀後半以降の製品と考えられる。

土坑18出土金属器(T2)

T2は細長い板状の鉄製品である。両端が欠損しているため全体の形状は不明である。断面をみると片側が鋭くなっており、刀子のようなものかもしれない。



第35図 鉄器

第6節 近世の遺構と遺物

1. 遺構

ビット列1~3(第36図 図版26)

2区東半に位置する。北1区の段下から南南西に向かって一直線上に並ぶビットが3列あり、津名郡町村会の調査区にも延びていると思われる。建物のように方形に並ぶ配列ではなく、それぞれが別個に並んでいる。列の間隔は、北側ほど少し狭くなっており、ビット列1と2が2.9~3m、ビット列2と3が2.3~2.5mである。ビット列3の方向はS20°Eで、ビット列1と2はこれよりわずかに西に振る。ビット間の間隔はビット列1が1.8m、ビット列2が2~4m、ビット列3が1.8~2.7mあり、ビット列2の間隔が他より広い。ビットの径は、弥生時代や中世のビットよりも少し小さく、約15cmで、深さは約20cmである。

遺物はビット列1の南端のビットより土師器小皿(200)が出土している。

土坑25(第36図 図版26)

1区北寄りにある。長さ3m以上、幅2.5m、深さ80cm以上の不整形な土坑である。

遺物は燻し瓦が出土している。

土坑26(第36図 図版26)

1区北寄りにある。長さ3m、幅2m、深さ55cm以上の不整形な土坑である。

遺物は陶器播鉢(201)と燻し瓦が出土している。

土坑27(第36図 図版26)

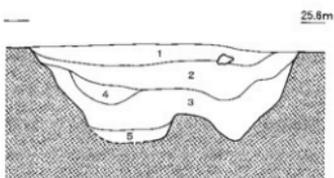
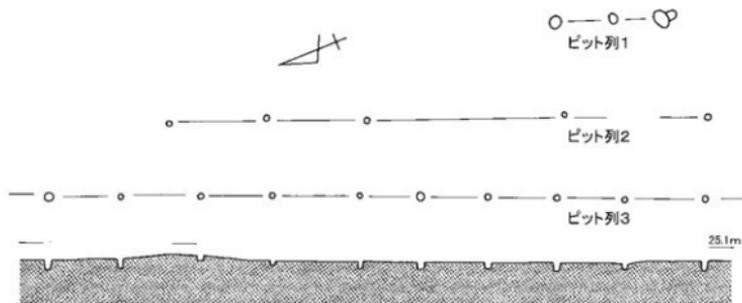
1区北寄りにある。径1.5~1.6m、深さ1m以上の円形土坑である。土坑内には径1.2mの結び桶が設置されていた。桶内の埋土は3層に分かれ、最下層には灰色の粘土が堆積していた。

遺物は、桶内から、陶器播鉢(202)、燻し瓦が出土している。

2. 遺物

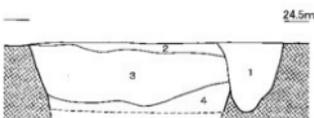
ビット列1出土土器(200)

200は土師器小皿である。口径8.5cm、器高1.5cm、平底で体部は直線的に斜め上方に延び、口縁部は上方につまみ上げる形態で、口縁部から体部は内外面回転ナデ調整、底部の切り離し技法は、回転糸切りである。内面から口縁部外面にかけて透明釉を施軸するいわゆる柿釉の皿である。口縁端部に黒色の付着物があることから、灯明皿として使用されたと推測でき、18世紀後半代以降の製品と考えられる。



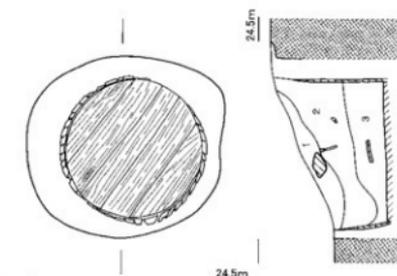
土坑25

1. 10YR5/6 明黄褐 細砂(φ1~3mmの10YR7/2にぶい黄緑及び10YR5/6黄緑の粒を多量に含む)
2. 10YR5/3 にぶい黄緑 細砂
3. 7.5YR5/6 明褐 粗細砂(5~20cmの10YR6/1焼灰塊を多く含む)
4. 2層に2層の粒子が多く含まれるマンガン炭多量
5. 7.5GY5/1 緑灰 粗細砂
6. 10YR5/4 にぶい黄緑 粗砂(10YR6/8焼灰塊及び10YR6/2灰黄緑地を多く含む)



土坑26

1. 5Y6/1 灰 シルト質中細砂(φ350mの線が多く散入されているマンガン炭多量)
2. 5Y6/1 灰 シルト質中砂(強く暗赤色 マンガン炭有)
3. 2.5Y6/4 黄緑 シルト質中細砂(粗砂含む マンガン炭有)
4. 7.5Y6/1 灰 シルト質中細砂(1cmφ球含む)



土坑27

1. 5Y6/1 灰 シルト質中細砂
2. 2.5Y6/1 黄灰 シルト質中砂(1層より暗赤 マンガン炭)
3. N4 灰 砂中砂混じり粘土(部分的に粗砂を含む) 小粒含む
4. 10YR5/6 黄褐 シルト質中細砂(地山の礫の混入)



第36図 南地区 近世のビット列・土坑

土坑26出土土器 (201)

201は陶器指鉢である。底径16.6cm、平底で、体部は直線的に斜め上方に立ち上がる形態である。内面のおろし目は櫛描きで密に施されている。底部内面のおろし目の施文方法から丹波焼と考えられ、18世紀後半以降に比定されている。

土坑27出土土器 (202)

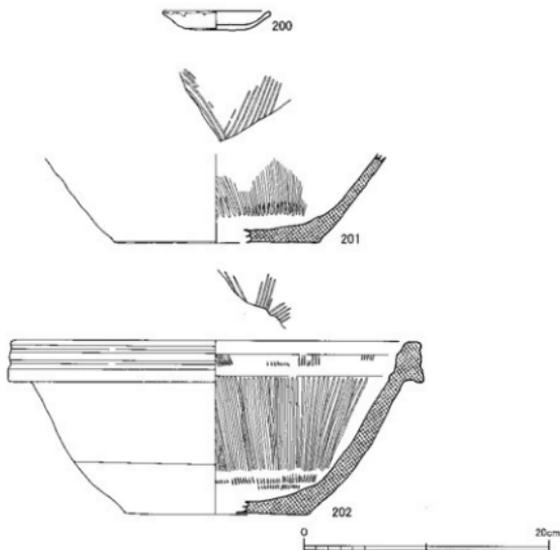
202は陶器指鉢である。口径32.1cm、器高14.2cm、平底で、体部は直線的に斜め上方に立ち上がり、口縁部は断面三角形の縁帯をもつ。縁帯部外面には2条の沈線を施す。体部内面には8条1単位の櫛描きのおろし目を施す。口縁部内外面は強いナゲ調整を施す。口縁部の形態から埴・明石産の指鉢と考えられ、18世紀後半～19世紀前半のものと考えられる。

第7節 包含層出土の遺物

弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、石器、鉄器が出土した。なお、平安時代の遺構である溝11の上層から比較的まとまって出土した弥生土器もここで記述する。

弥生土器 (203～238)

溝11上層から出土した土器 (203～216) では、203～207・214・215は壺、208～210は壺、212・213・216は高杯、211は鉢と考えられる。203～206は残存率が低いため、図化した形状に疑問が残るが、いずれも類似する口縁をもつ壺である。207は「く」の字に外反する口縁をもつもので、口縁端部には横ナ

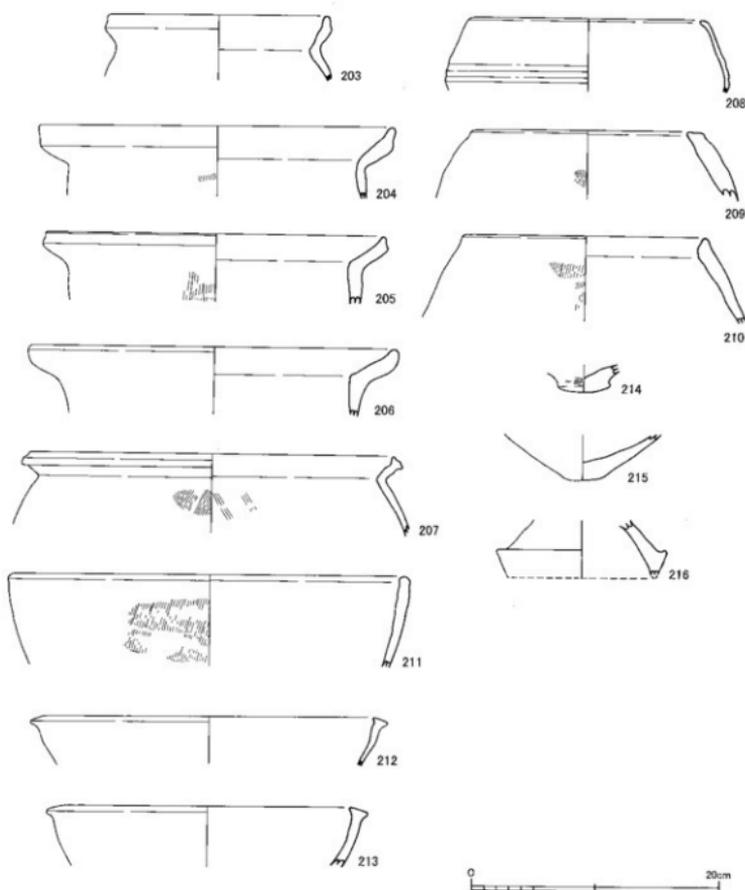


第37図 南地区 近世の土器

デ、内外面にハケメ調整の痕跡が残っている。214・215は内面にナデが施されており、214の外表面にはタタキの痕跡がわずかに残っている。208～210は口縁端部の形状に違いがみられるが、いずれも胴部から直線的に口縁部に至る無頸蓋と考えられる。高杯はいずれも残存率が低いが、212・213は類似する形状を呈している。鉢と考えられる211は外面にハケメ、口縁端部から内面にかけて横ナデの調整痕が残っている。

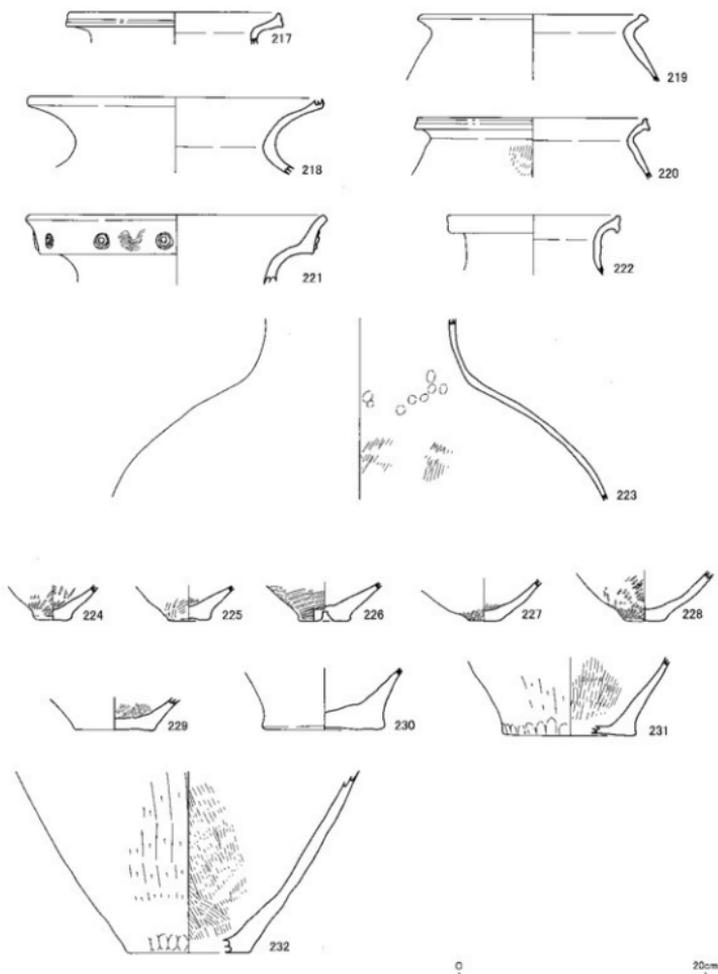
包含層より出土した土器では、図化できたものは22点（217～238）を数える。このうち、217～220・224～228・231・232は甕、221～223・229・230は壺、233～237は高杯、238は器台である。

甕の口縁部はいずれも残存率が低いが、横ナデあるいはハケメ調整の痕跡が認められる。224～228・

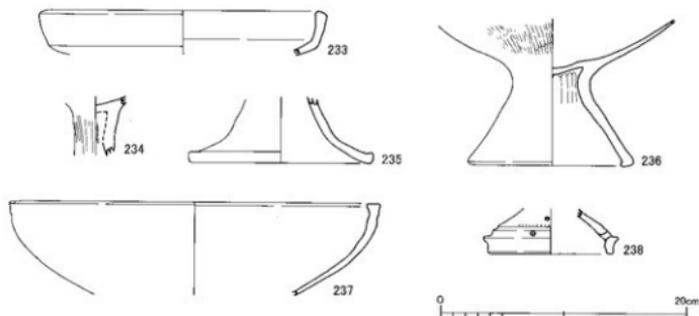


第38図 南地区 溝11出土弥生土器

231・232は、底径が3cm前後のもの（224～228）と約10cmのもの（231・232）とに分類される。前者の外面にはタキが施され、内面には一部にハケメあるいは板状工具の調整痕が残るものがある。226の底部中央には充填されなかった製作過程の名残がみられる。また、後者の外面にはケズリ、底部には指押さえ、内面にはハケメ調整が施されている。221の口縁端部には円形浮文が飾られ、波状文の痕跡がわずかに残っており、竪穴住居跡1より出土した2と類似する壺である。頸部から胴部の一部が残存す



第39図 南地区 包含層出土土器1 (弥生土器)



第40図 南地区 包含層出土土器 2 (弥生土器)

る223は、内面に指押さえおよびハケメの痕跡が認められる。229の外面にはたて方向のナデ、内面にはハケメ調整の痕跡が明瞭に残っている。236は杯部の器壁は薄く緩やかに立ち上がり、完存する脚部は「ハ」の字状に開く形状を呈している。全体的に摩滅が著しいが、杯部外面の一部にミガキの痕跡が残っている。238は残存する部分は小さいが器台の脚部と考えられる。2ヶ所に穿孔が認められ、内外面に横ナデの痕跡がわずかに残っている。

平安時代以降の土器・土製品 (239～251)

239は須恵器杯である。口径12.2cm、器高3.4cm、平底から体部は直線的に外方に開き、口縁端部は丸みをもつ。口縁部と体部内外面は回転ナデ調整、底部は外面未調整でヘラキリ痕が残る。

240は須恵器壺の底部である。底径7.0cm、底部の切り離し技法はヘラキリである。

241は須恵器鉢である。口径27.4cm、口縁部内面にわずかに凹みをもち口縁端部は上方につまむ形態である。池田分類東播系須恵器こね鉢E1類に相当し、14世紀後半に比定されている。

242は須恵器甕の小片である。外面には綾杉状タタキが残る。

243は土師器杯である。口径11.7cm、器高3.2cm、内外面回転ナデ、底部外面はヘラキリ後ナデ調整を施す。

244は土師器羽釜である。口径23.3cm、短い鈔部をもち、端部は丸みをもつ。口縁部内外面に横ナデを施す。羽釜タイプ：播磨型A系列I B類に相当し、15世紀中頃に比定されている。

245は備前焼壺の口縁部である。口縁部は直立し、口縁端部は玉縁状を呈する。栗岡編年3期相当、14世紀後半に比定されている。

246は碗の底部で、断面台形状の輪高台を貼り付けている。胎土から東海系の灰釉陶器と考えられ、9世紀後半～10世紀の時期が考えられる。

247は土師器皿で、口径8.65cm、器高1.65cm、平底で、体部は直線的に外方に開く形態である。口縁部から体部の内外面は回転ナデ調整、底部の切り離し技法は回転ヘラキリである。内面から口縁部外面にかけて透明釉を施軸するいわゆる柿釉の皿である。口縁端部に煤が付着していることから、灯明皿として使用されたと推測でき、18世紀後半以降の製品と考えられる。

248は陶器播鉢である。口径29.2cm、体部は直線的に外方に伸び、口縁部は直立する。口縁端部は左

右に拡張し、上面に平坦面をもつ。内面には16条1単位の間隔をおろし目を密に施し、口縁部内面から外面全面に鉄軸を施す。近代以降の丹波焼である。

249は染付皿である。高台はU字形を呈し、底部の器壁は厚い。底部と体部の境は大きく屈曲し、体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。体部内面には、菊花文と草花文を貝須で施文し、底部内面にはくずれた五弁花文をこんやく印判で施文する。内外面とも施軸されるが、墨付の軸葉は掻きとっている。肥前系波佐見産の製品と考えられ、18世紀後半と考えられる。

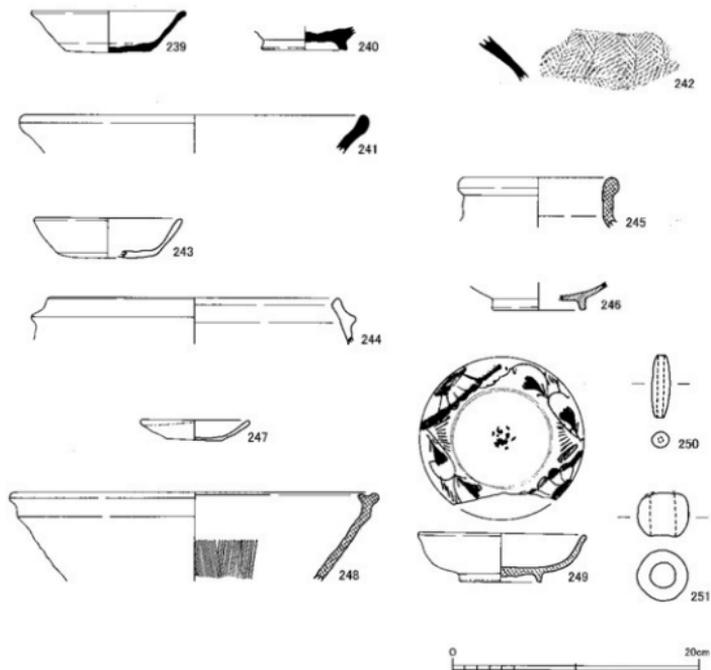
250・251は上鐙である。いずれも、棒状の芯に粘土を巻きつけ成形した中空のもので、外面はナデ調整を施す。250は長さ5.15cm、径1.3cmで完存している。251は径4.15cmである。

石器 (S17～S63)

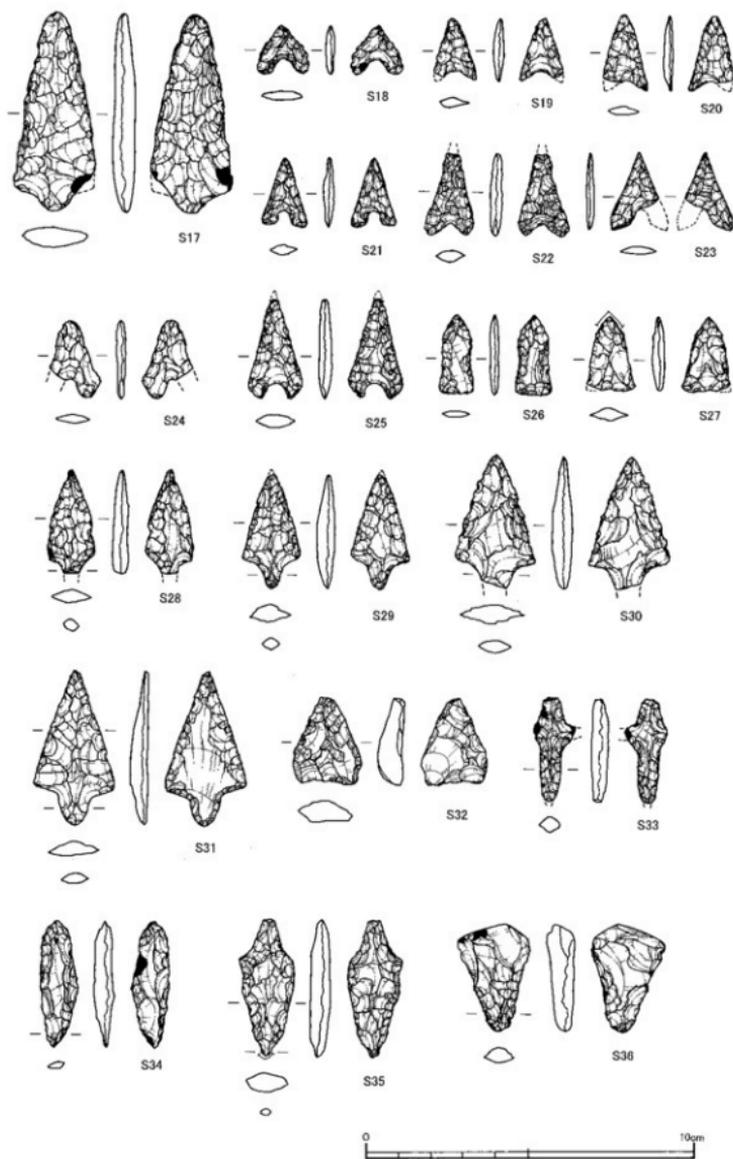
有舌尖頭器・石鏃・石匙・削器・楔形石器・打製石包丁・剥片・砥石がある。

S17は有舌尖頭器である。長さ6cmあまりの中型に属するもので、舌部は短く両側縁がゆるやかに内彎する。平行剥離は表側に一部認められるのみで顕著ではない。他の石器に比べ、全体が強くローリングを受けている。

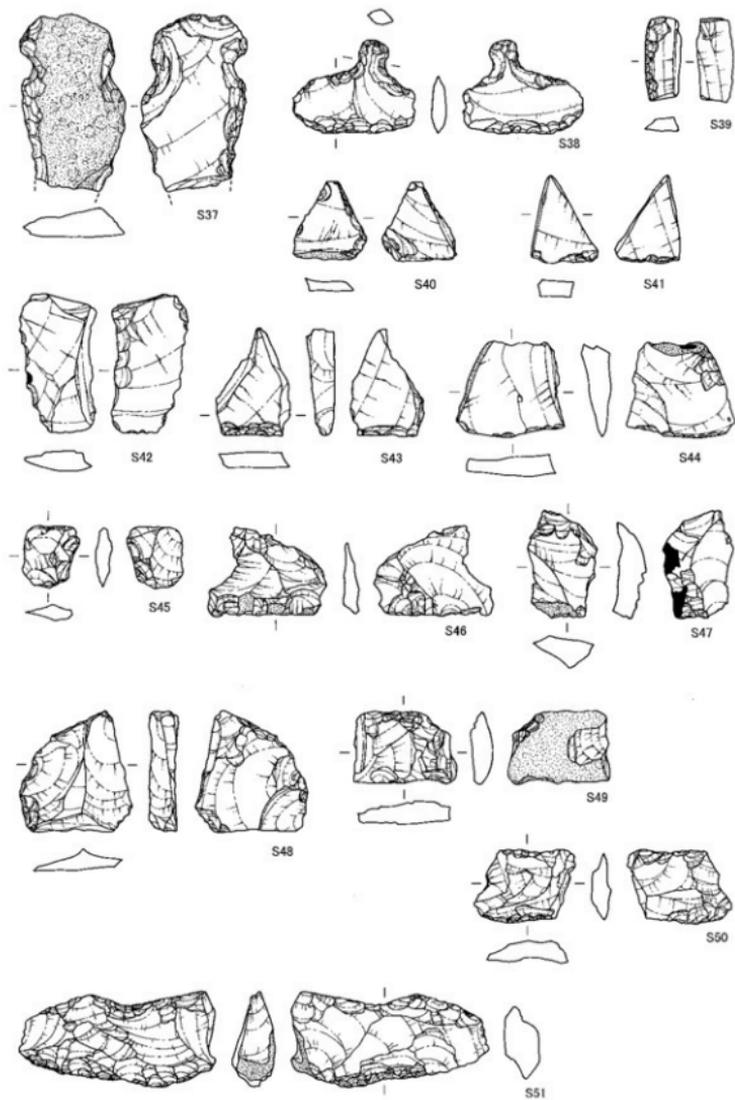
S18～S31は石鏃である。凹基式 (S18～S25)、平基式 (S26・S27)、有基式 (S28～S31) があ



第41図 南地区 包含層出土土器3・土製品 (平安時代以降)



第42图 南地区 包含层出土石器 1



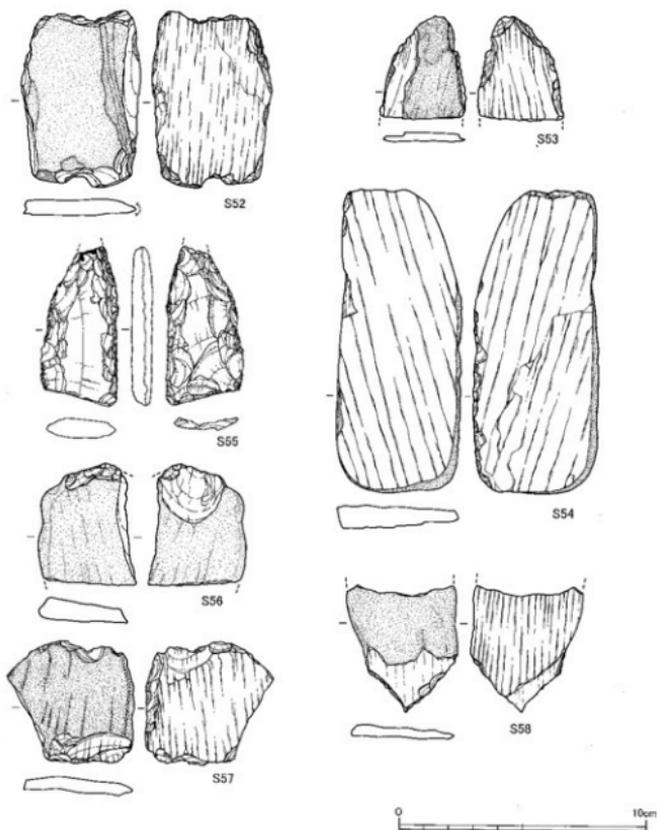
第43图 南地区 包含层出土石器 2

るが、突基式は見られない。S22とS32がチャート製で、他はサヌカイト製である。

凹基式には各種形態のものがある。S18は先端角が大きく、側縁が外湾するものである。基部の挟りは深い。S19・S20は先端角が小さく、基部の挟りが浅いもので、基部先端は斜め外方に向かって尖る。S21～S25も先端角は小さいが、基部先端が丸みをもったり、外に広がらず下方あるいは内側に向かうものである。二次加工の状況は裏材面をまったく残さないか、残したとしてもごく一部である。

平基式は側縁が屈曲する五角形縁である。S27は屈曲部から先端にかけて側縁を研磨して尖らせている。

有茎式は凹基式や平基式にくらべ大型で厚みがある。すべて、長さは3cmを、重量も2gを越える。凹基式や平基式のほとんどが2.5cm以下、1g以下となるのに対照的である。基部は水平あるいはわずかに突出し、左右に強く張り出す。茎部と基部は明確な変化点をもつが、S28はやや曖昧である。



第44図 南地区 包含層出土石器3

S32は赤色チャート製の両面加工石器で、押し剥離をほぼ全周に施すが、厚みがあり側面観が非対称、先端も節理面をそのまま残す。また、わずかに残る自然面は素材剥片の打面である。石鏃の未製品としておきたい。

S33～S36は石鏃である。擴みの無い棒状鏃（S33・S34）、石鏃の転用（S35）、擴みから鏃部へそのままいたるもの（S36）がある。S33は横に突起が付く。35は有茎式石鏃の転用で、その先端部のみ細く尖らせており、わずかに磨耗する。

S37・S38は石匙で、縦型と横型が各1点ある。S37は粗雑なつくりの縦型で、厚みのある直線的な刃部と大きな擴みをもつ。素材は背面がすべて自然面となる剥片で、刃部加工は両面から行う。これに対して横型（S38）は素材剥片の形態をうまく利用して、楕円形の体部に小さな擴みを作り出す。刃部は平坦剥離で両刃とする。

S39～S44は削器である。二次加工が比較的連続しているものを削器としたが、斉一的な形態のものはない。S39は平坦剥離によって直線的な片刃の刃部を作り出している。S42は刃部が鉤齒状となる。S41・S43は2つの折れ面で三角形を呈する。折れと刃部加工との前後関係は判断しがたいが、剥片剥離の際に生じた折れというより、意図的な切断が想定される。

S45～S51は楔形石器である。側縁の潰れや抉れ、階段状剥離などが顕著なものが多い。

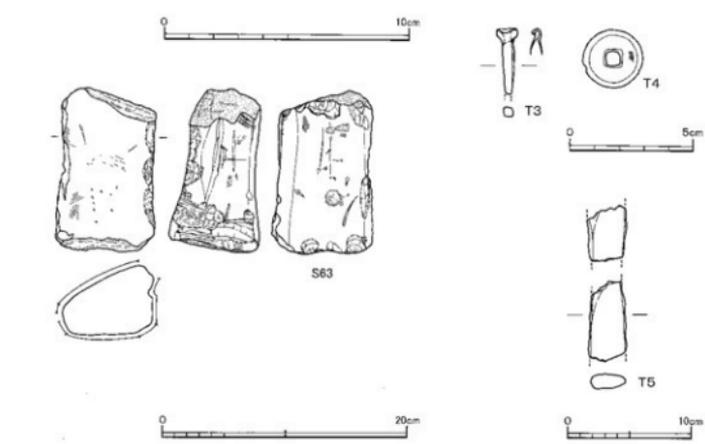
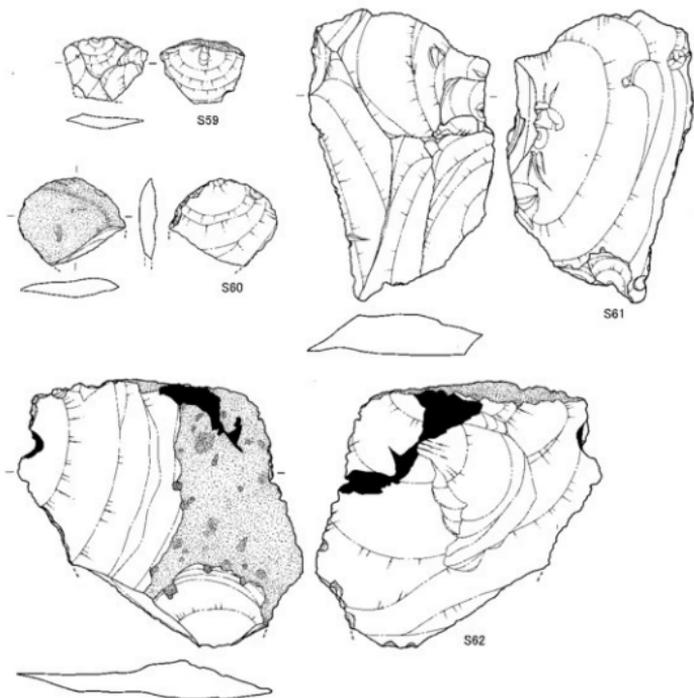
S52～S54は打製石包丁および未製品である。S52は唯一の完形品で、緑泥片岩の板状剥片を用い、両端中央に抉りを入れたものである。片面はほぼ自然面、裏面は石理に沿った分割面である。端面は片側が研磨されているが、刃縁と背縁は調整剥離すらほとんど行われていない。刃縁は磨耗し、丸みを帯びて光沢がある。S53は半月形を呈すると思われる。S52よりもかなり薄手である。やはり石理に沿って薄く割り、部分的な調整剥離で形を整えている。紅廉石片岩製。S54は未製品で、結晶片岩の礫を輪切りにするように石理に沿って割っている。端部などに若干の調整剥離を行っているが、ほぼ全周に自然面を残す。

S55はサヌカイト製の尖頭器様をした石器である。左右非対称であることと、直線的な方の側縁が鋭さを失っていることから、小型ながら石包丁と同様な用途を想定したい。

S56～S58は結晶片岩の薄い剥片の一部に調整剥離が加えられたものである。S53と同様、片面の大半は自然面である。形態から見て打製石包丁あるいは未製品とするのは躊躇されるため、打製石包丁に関連する石器としておきたい。

S59～S62はサヌカイトの剥片である。87点出土しているが、大型の2点と剥離の状況が特徴的な小型の2点を示す。S59は幅広い自然面の打面をもつ剥片で、打点を左右に移動させながら剥片剥離を進行させている。小型の剥片でこのような明瞭な打面を持つ剥片は極めて少ない。S60は旧河道1出土の剥片（S13）と同様、円縁の一端を加撃して剥離した最初の剥片である。溝1出土の石核（S12）と同一母岩であると思われる。S61・S62は大型の剥片で、剥片の形で遺跡内に搬入されたものであろう。

S63は砂岩製の砥石である。両端を除くほぼ全面が砥面として使用されている。砥面の断面形は、横断面ではすべてわずかに外彎するが、縦断面では内彎する。右側面には深いV字状の溝が生じている。また、刃物の角が当たったような三角形の浅い傷が部分的に認められる。両端は原石の分割面であろう。



第45图 南地区 包含层出土石器4·金属器

金属器 (T3~T5)

T3は鉄釘の頭部である。先端部は先細りしている、長さは4cm程度であろう。T4は銅銭である。残りが悪く、文字は読み取れない。T5は厚みのある板状の鉄製品で、2片に分かれており接合状況は明らかではない。断面形は丸みがある。

第8節 小 結

1. 遺構について

今回の調査では、弥生時代および中世の遺構の他に、9世紀後半から10世紀初頭の土器が一括出土した平安時代の溝などが確認された。弥生時代の遺構では調査区の東端、最も標高の高い地点において比較的良好な状態で検出された竪穴住居跡1の他、調査区全域から十坑・溝・ピットなど多数の遺構が検出された。これらの遺構は、出土した土器の形状および内外面に残る施文や調整痕などから弥生時代中期から後期にかけての時期に営まれていたものと考えられる。また、中世の遺構は、瀬戸灰釉花皿や土師器の杯、羽釜などから15世紀を中心とした室町時代に属するものと考えられる。これらの遺構は、遺物包含層の下層で複数の遺構面を検出した一方、調査地周辺で行われた開墾などともなう削平によって地山面で遺構を検出した地点も存在している。削平された地点では、弥生あるいは平安、室町時代の各時期の遺構が同一面で検出され、遺物が出土しなかったために時期が特定できなかったものが多くみられる。

調査区東側には現在、丘陵裾部に沿って主要地方道津名五色三原線が走行しており、その東には比較的古い旧地形を残した丘陵が広がっている。調査を実施した南地区の6区以西の平成10年度3・4トレンチでは遺構および遺物が確認されなかったことから、丘陵上に喜住西遺跡の中心が存在するものと考えられ、南地区あるいは北地区一帯は遺跡の縁辺部に位置していると考えられる。

2. 遺物について

土 器

弥生土器は中期中葉から後期までのものが出土している。残存状態の良好なものが少なく、多くは小片であるが、比較的残りの良いものを中心に時期を検討しておきたい。

まず、旧河道1出土の壺は彫摺文の特徴などから、弥生土器の中では最も古く第Ⅲ様式期に位置づけられる。

次に、溝5・6および土坑6出土土器には、広口壺、直口壺、無頸壺、甕、鉢、高坏などがあり、広口壺や直口壺、鉢には凹線文が施されている。形態の特徴からもⅣ様式期のものであろう。これに続くものとして、土坑2出土土器がある。壺の形態や口縁部への凹線文などの特徴などから中期最終末に位置づけられよう。

後期では土坑3出土土器と竪穴住居跡1出土土器がある。土坑3出土の甕では小用品を除き底部までタタキが施され、広口壺は端部を拡張せず無文のものである。底部が尖底となる鉢や小型の台付き鉢を伴っている。これらの土器は洲本市寺中遺跡住居址B-2出土土器とよく類似しており、後期後半の特徴を示すものである。竪穴住居跡1出土土器も、小片が多く特徴を示すものが少ないもの、おむね

同様の時期と考えられる。

この他、土坑や溝出土の上器については、ほとんどが小片であるが、弥生時代中期後半（Ⅲ様式期～Ⅳ様式期）の特徴を示すものが主体である。

中世の土器では第5節で記述したように、土師器羽釜と鍋を中心に15世紀代のものが主体を占め、少数ながら14世紀代あるいは16世紀代のものを含む。

近世の土器はわずかであるが、すべて18世紀後半以降のものである。

なお、平安時代の土器については第6章第2節で詳述するので、ここでは割愛する。

石 器

南地区で出土した石器には、縄文時代～弥生時代までのものを含み、大部分はサヌカイト製である。

縄文時代では草創期の有舌尖頭器が最も古く位置づけられる。他の石器に比べ著しく磨耗を受けており、原位置からは相当に遊離しているものと思われる。

石鏃のうち凹基式の大半および平基式のものも、形態から縄文時代に帰属させうる。縄文土器はまったく出土していないが、周辺の五反田遺跡や外ヶ鼻遺跡からは縄文時代後期の土器が出土しており、関連性を想定できる。石鏃それぞれを単体として見た場合、幾つかの時期のものが混在していると考えられることも可能かもしれないが、ここではそういった立場はとらず、同じ時期のものと考えておきたい。淡路島の中で縄文時代後期を中心とする極めて良好な資料が発見された佃遺跡出土石鏃の形態変異の中で理解できるものであろう。

この他、縄文時代のものと考えうる石器には石匙がある。S38のように丁寧な作りのものはそれとみなしても良いと思われるが、S37のように握みが大きく粗雑な作りのものは、弥生時代としてもよいかもれない。

弥生時代の石器では、遺構から出土したものは少ないため、時期が明らかでないものが多い。その中で竅穴住居跡1出土の石器は弥生時代後期後半に位置づけられる。石鏃、石錐、剥片があり、石鏃のうち1点（S2）を除いて粗雑なつくりのものである。石器製作の終焉期の姿を示すものといえよう。

次に、すべて包含層からの出土であるが、大型の有茎石鏃が4点（石鏃に転用されたものを含めると5点）出土している。すべて長さは3cmを、重量も2gを越え、戦闘石鏃（松木1989年）と呼ぶにふさわしいものである。ただし、凸基式や平基式的大型石鏃が見られないので、形態的には偏ったありかたといえる。こうした大型の戦闘石鏃は瀬戸内沿岸部ではⅢ様式期前半から出現し、讃岐平野では畿内に近い東部ほど有茎式の占める割合が高くなるという（松木前掲）。土坑や溝にはⅢ様式期～Ⅳ様式期のものがあり、これらの大型有茎石鏃も同様な時期のものと考えておきたい。

磨製石廬丁と打製石廬丁では、緑泥片岩など三波川変成帯に産する石材を用いている点に、淡路南部に位置する当遺跡の特性が現れている。形態も徳島県の吉野川流域など三波川変成帯周辺の遺跡出土の打製石廬丁と共通する。

なお、溝1出土の石核（S12）や旧河道1出土の剥片（S13）から推定される剥片剥離技術は、瀬戸内沿岸部の弥生時代遺跡で確認されている阿極打法を主とする剥片剥離技術とは異なっている。原石は淡路産サヌカイトの可能性が高く、剥片剥離技術とも関連しているのかもしれない。

このほか、石錐や削器、楔形石器、剥片類、砥石などは時期を決しがたいが、遺構や遺物包含層出土の土器に弥生時代中期後半のものが多く認められることから、これらの石器の多くは当該期のものと考えられるのが妥当であろう。ただし、弥生時代中期後半の一般的な石器組成の中で磨製石斧類が欠如してい

るのは、偶然というよりは何らかの要因を考えるべきかもしれない。

参考文献

- 池田征弘 2004年 「須恵器」『兵庫津遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会
- 種原昭嘉 2000年 「明石標鉢の編年について」『近世の実年代資料』第12回 関西近世考古学研究会大会資料集 関西近世考古学研究会
- 岡田章一・長谷川眞 2003年 「兵庫津遺跡出土の土製茶炊具」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第3号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 野上建紀 2000年 「磁器の編年（色絵以外）1 碗・小杯・皿・紅皿・紅猪口」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
- 乗岡実 2000年 「備前焼標鉢の編年について」『第3回 中近世備前焼研究会資料』
- 藤澤良祐 1996年 「瀬戸」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～』資料集（財）瀬戸市埋蔵文化財センター
- 松木武彦 1989年 「弥生時代の石製武器の発達と地域性—特に打製石鏃について—」『考古学研究』第35巻 第4号

第2表 溝11出土土器観察表

No.	器種	型式	口径	高さ	取数	焼成	色調(内/外)	口クロ	彫形・調整	備考	
灰土器											
80	杯A	IV1		5.0	38.5	良	灰色/灰色	右回転	体部内外面ともヨコナガ、底部はヘラキリ	全体の歪みが大きい	
81	杯A			4.9	38.0	良	灰色/灰色	右回転	体部内外面ともヨコナガ、底部はヘラキリ	全体の歪みが大きい	
82	杯A			3.7	27.0	不良	灰白/灰-洗黄褐色	—	割線が著しいため調整不明		
83	杯A			3.7	27.0	不良	灰白色/灰白色	右回転	体部は内外面ともヨコナガ、底部はヘラキリ	表面が若干割線	
84	杯A			3.6	26.6	良	灰白色/灰白色	右回転	体部は内外面ともヨコナガ、底部はヘラキリ	表面が若干割線	
85	杯A			4.5	33.1	不良	灰白色/灰白色	右回転	体部は内外面ともヨコナガ、底部はヘラキリ	表面が若干割線	
86	杯A			3.7	27.4	良	灰白色/灰白色	右回転	体部は内外面ともヨコナガ、底部はヘラキリ		
87	杯A			3.8	28.1	良	灰色/灰白色	右回転	体部は内外面ともヨコナガ、底部はヘラキリ	内面に火焼痕あり	
88	杯A			4.0	29.6	不良	灰白色/灰白-灰色	右回転	体部は内外面ともヨコナガ、底部はヘラキリ	表面が若干割線	
89	杯A			4.3	31.9	不良	灰白色/灰白色	右回転	体部は内外面ともヨコナガ、底部はヘラキリ	表面が若干割線	
90	杯A	3.5	28.1	良	灰白色/灰白色	右回転	体部は内外面ともヨコナガ、底部はヘラキリ				
91	杯A	3.8	28.4	良	灰白色/灰色	右回転	体部は内外面ともヨコナガ、底部はヘラキリ				
92	杯A	3.8	28.4	不良	灰白色/灰白色	右回転	体部内外面をヨコナガ、見込みナガ、底部ヘラキリ	表面が若干割線			
93	杯A	IV2		3.8	28.4	不良	灰白色/灰白色	右回転	体部は内外面ともヨコナガ、底部はヘラキリ	表面が若干割線	
94	杯A			4.0	29.9	良	灰白色/灰白色	右回転	体部は内外面ともヨコナガ、底部はヘラキリ	体部内面に火焼痕あり	
95	杯A			4.0	29.9	良	灰白色/灰白色	右回転	体部は内外面ともヨコナガ、底部はヘラキリ	体部内外面に火焼痕	
96	杯A			2.7	27.8	不良	灰白色/灰白色	右回転	内外面とも割線面が割線のため調整不明		
97	杯A			3.7	27.8	良	灰白色/灰白色	右回転	体部の内外面はヨコナガ、底部はヘラキリ		
98	杯A			3.8	28.6	良	灰白色/灰白色	右回転	体部の内外面ヨコナガ、見込みナガ、底部ヘラキリ	体部内面に火焼痕あり	
99	杯A			3.9	29.3	不良	灰白色/灰白色	—	割線が著しいため調整不明		
100	杯A			4.0	30.5	良	灰白色/灰白色	右回転	体部の内外面はヨコナガ、底部はヘラキリ	体部内外面に火焼痕	
101	杯A			4.0	30.8	良	灰白/黄褐色	右回転	体部外面はヨコナガ、底部はヘラキリ	表面が若干割線	
102	杯A			4.0	30.8	不良	灰白色/黄褐色	右回転	体部外面ヨコナガ、体部内面と底部割線で不明確	内面に火焼痕あり	
103	杯A	4.1	31.5	良	灰白色/灰白色	右回転	体部内外面ともヨコナガ、底部はヘラキリ	内面に火焼痕あり			
104	杯A	3.9	30.2	良	灰色/黄褐色	右回転	体部内外面ともヨコナガ、底部はヘラキリ	体部内外面に火焼痕			
105	杯A	4.0	31.0	良	灰白色/灰色	右回転	体部内外面は割線のため調整不明、底部はヘラキリ				
106	杯A	V1		4.8	36.3	良	灰色/灰白色	右回転	体部内外面ともヨコナガ、底部はヘラキリ兼ナガ		
107	杯A			3.2	25.6	良	灰白色/灰-灰白色	右回転	体部内外面ともヨコナガ、底部はヘラキリ	外・底面に火焼痕	
108	杯A	V2		3.4	27.0	良	灰色/灰色	右回転	体部内外面ともヨコナガ、底部はヘラキリ	外・底面に火焼痕	
109	杯A			3.3	26.8	良	灰白色/灰白色	右回転	体部内外面ともヨコナガ、底部はヘラキリ	体部内外面に火焼痕	
110	杯A	—		3.1	25.2	良	灰白色/灰白色	右回転	体部内外面ともヨコナガ、底部はヘラキリ	外・底面に火焼痕	
111	杯A			3.2	26.2	良	灰白色/灰白色	右回転	体部内外面ともヨコナガ、底部はヘラキリ	体部内外面に火焼痕	
112	鉢	—		6.0	57.3	良	灰色/灰色	右回転	体部内外面と高台部はヨコナガ、底部はヘラキリ	底部に爪痕あり	
113	杯B			6.3	46.0	良	灰白色/灰白色	右回転	体部内外面と高台部はヨコナガ、底部はヘラキリ	底部に爪痕あり	
114	杯B	—		6.0	40.0	良	灰色/灰色	右回転	体部内外面と高台部はヨコナガ、底部はヘラキリ		
115	杯B			6.2	34.0	良	灰白色/灰白色	右回転	体部内外面と高台部はヨコナガ、底部はヘラキリ		
116	杯B	—		6.2	44.3	良	灰色/灰色	右回転	体部内外面と高台部はヨコナガ、見込みナガ、底部ヘラキリ	体部外面は灰を被る	
117	杯B			5.5	40.4	良	灰白色/灰白色	右回転	体部内外面と高台部はヨコナガ、底部はヘラキリ		
118	杯B	—		5.6	37.3	良	灰色/灰色	右回転	体部外面1/4を同転ヘラキリ他ヨコナガ、底部不明		
119	杯B			—	—	—	良	灰色/灰色	右回転	体部内外面ともヨコナガ、高台部・底部は不明	
120	杯B	—		—	—	—	良	灰白色/灰白色	右回転	体部内外面と高台部はヨコナガ、底部はヘラキリ	
121	杯B			—	—	—	良	灰白-灰色/灰色	右回転	体部内外面と高台部はヨコナガ、底部は不明	
122	—	—		—	—	—	良	灰白色/灰-黄褐色	右回転	頸部内面に指圧痕を残す他はヨコナガ	肩以下を欠損
123	—			—	—	—	良	灰白色/オリーブ黄褐色	右回転	体部内外面ヨコナガ、底部糸切り、見込み部分に軸	底部に火焼の痕あり
緑釉陶器											
124	皿	—		2.6	20.7	良	灰白色/灰オリーブ色	不明	内外面ともヘラミダキ、口縁部以外全面に施釉		
土器											
125	杯A	IV2		3.8	28.1	良	黄褐色/洗黄褐色	右回転	体部内外面ともヨコナガ、見込みナガ、底部ヘラキリ		
126	杯A			4.2	31.3	良	洗黄褐色/洗黄褐色	右回転	内外面とも割線のため調整不明		
127	杯A			4.0	29.9	良	洗黄褐色/洗黄褐色	不良	内外面とも割線のため調整不明		
128	杯A			3.6	27.1	良	洗黄褐色/洗黄褐色	右回転	内面割線で調整不明、体部外面ヨコナガ、底部ヘラキリ		
129	杯A			4.1	31.1	良	黄褐色/黄褐色	右回転	体部は内外面とも割線のため調整不明、底部はヘラキリ		

No.	品種	型式	口径	篩素	指数	地成	色質(内/外)	ロクロ	整形・調整	備考
130	杯A		13.1	4.2	32.1	良	褐色～鈍い褐色/褐色	不明	金黃田が剥離のため調整不明	
131	杯A		3.9	29.8	良	鈍い黄色/鈍い褐色	不明	体部内外面ヨコナダ、見込み調整不明、底部ヘラキリ		
132	杯A	IV2	12.0	4.2	32.3	良	浅黄褐色/浅黄褐色	右回転	体部内外面・見込みヨコナダ、底部ヘラキリ後ナダ	
133	杯A		12.9	3.8	29.5	良	褐色/鈍い褐色	右回転	内外面とも剥離のため調整不明	
134	杯A		12.6	3.8	29.5	良	鈍い褐色/鈍い褐色	右回転	体部内外面とも剥離のため調整不明、底部ヘラキリ	
135	杯A		12.9	3.6	28.8	良	灰白～淡赤褐色/褐色	不明	体部外面ヨコナダ、底部ヘラキリ後ナダ	
136	杯A	V2	12.4	3.4	27.4	良	鈍い褐色/鈍い褐色	右回転	体部内外面ともヨコナダ、見込みナダ、底部ヘラキリ	
137	杯A		12.7	3.6	29.5	良	鈍い黄褐色/鈍い褐色	不明	体部内外面・見込み調整のため調整不明、底部ヘラキリ	
138	杯A		12.4	3.4	27.4	良	褐色/灰白色	不明	内面調整不明、体部外面1/4ヘラケズリ、底部ヘラキリ	
139	盃		12.9	2.4	19.0	良	灰青色/灰黄褐色	右回転	体部内外面ヨコナダ、見込み調整不明、底部ヘラキリ	
140	台付皿		12.9	3.3	24.4	良	灰白色/褐色	右回転	体部外面1/4ヘラケズリ、底部ヘラキリ	
141	杯B	II2	18.3	5.2	34.0	良	淡黄褐色/淡黄褐色	右回転	体部外面1/4ヘラケズリ、底部ヘラキリ	底部に爪仕痕あり
142	杯B	III1	14.2	5.9	41.5	良	淡黄褐色/淡黄褐色	不明	体部内外面は剥離のため調整不明、底部はヘラキリ	底部に爪仕痕あり
143	杯B	IV2	12.9	4.1	31.8	良	黄灰～淡青色/褐色	不明	口縁部でヨコナダを確認、その他は剥離で調整不明	
144	杯B		—	—	—	良	暗灰色/淡黄褐色	不明	体部内面ヘラケズリ・外面調整不明、底部ヘラキリ	
145	杯B		—	—	—	良	灰白色/鈍い褐色	不明	体部内外面とも調整不明、底部はヘラキリ後ナダ	底部に爪仕痕あり
146	鉢		—	—	—	良	黄灰色/鈍い黄褐色	不明	口縁部でヨコナダを見た後片口を作り出す	底部に爪仕痕あり
147	盃		—	—	—	良	鈍い褐色/褐色	右回転	体部内外面ともヨコナダ、底部はヘラキリ	
148	甕		14.3	—	—	良	暗灰色/鈍い褐色	不明	口縁部内面を底ナダ後ヨコナダ、体部外面調整不明	
149	甕		—	—	—	良	黒褐色/暗灰色	不明	口縁部ヨコナダ、体部の内外面剥離のため調整不明	
黒色土器										
150	杯B	I1	18.2	6.1	33.5	良	暗灰色/灰白～黄褐色	不明	体部内面ヘラミガキ・外面ヘラケズリ、底部ヘラキリ	
151	杯B		18.3	5.4	33.8	良	暗灰色/灰白～灰色	右回転	体部外面1/4ヘラケズリ・内面ヘラミガキ、底部ヘラキリ	
152	杯B		18.4	5.5	35.0	良	浅黄褐色～灰色/浅黄褐色	不明	全面剥離のため調整不明	底部に爪仕痕あり
153	杯B	II1	18.0	5.7	37.0	良	暗灰色/灰白～黒褐色	不明	体部は内面はヘラミガキ・外面は3/4までヘラケズリ	
154	杯B		15.1	6.2	40.5	良	暗灰色/浅黄褐色～褐色	不明	体部は内外面とも剥離のため調整不明、底部はヘラキリ	
155	杯B		14.4	5.4	36.2	良	黒褐色/浅黄褐色～褐色	不明	体部外面ヨコナダ・内面調整で調整不明、底部ヘラキリ	底部に爪仕痕あり
156	杯B		14.4	5.1	36.2	良	暗灰色/浅黄褐色	不明	体部内外面・底部とも剥離のため調整不明	
157	杯B	III2	14.1	5.1	36.2	良	黒褐色/浅黄褐色	右回転	体部内外面・底部とも剥離のため調整不明	
158	杯B		—	4.7	32.8	良	暗灰色/淡黄褐色～灰色	右回転	体部外面1/4ヘラケズリ・内面ヘラミガキ、底部ヘラキリ	
159	杯B	IV1	—	5.2	39.4	良	暗灰色/淡黄褐色～灰色	不明	体部内面ヘラミガキ・体部外面と底部剥離で調整不明	
160	杯B	IV2	—	4.4	33.1	良	暗灰色/鈍い黄褐色～灰色	不明	体部内面横方向ヘラミガキ・外面不定方向ヘラケズリ	
161	杯B		—	—	—	良	黒褐色/淡黄褐色	不明	体部は内外面ともヨコナダ	
162	杯B		—	—	—	良	黒褐色/浅黄褐色	不明	体部内面はヨコナダ・外面は剥離のため調整不明	
163	杯B		—	—	—	良	黒褐色/鈍い黄褐色	不明	体部内面ヘラミガキ・体部外面と底部は調整不明	
164	杯B		—	—	—	良	暗灰色/暗～浅黄褐色	不明	体部内面調整不明・外面ヨコナダ、底部ヘラキリ	
165	杯B		—	—	—	良	暗灰色/暗～浅黄褐色	不明	体部内面はヘラミガキ・外面はヘラケズリ	
166	杯B		—	—	—	良	暗灰色/浅黄褐色～灰色	不明	体部内面ヘラミガキ・外面剥離で調整不明、底部ヘラキリ	底部に爪仕痕あり
167	鉢		—	—	—	良	暗灰色/淡黄褐色～灰色	右回転	口縁部・体部内面横方向ヘラミガキ・体部外面ヘラケズリ	
168	甕		—	—	—	良	暗灰色/淡黄褐色～褐色	不明	口縁部ヨコナダ、体部内外面ナダ、底部ヘラケズリ後ナダ	
169	甕		—	—	—	良	暗灰色/鈍い黄褐色～褐色	不明	口縁部ヨコナダ、体部内面ヘラケズリ・内面調整不明	

●: 復元数値、—: 分析不詳、—: 測定不可能、—: 抽出不可能、***: 指数不詳

第4章 喜住西遺跡（北地区）の調査

第1節 概要

現道に沿った南北に細長い調査区で、調査面積は506㎡である。南地区と同様、丘陵斜面を棚田に開墾している。調査区南側では厚い盛土の下に、遺物包含層が存在し、その上下で掘建柱建物や土坑、溝が検出されたが、北半では包含層や遺構はほとんど見られなかった。したがって、以下で述べる遺構はすべて調査区の南側に偏って分布する。

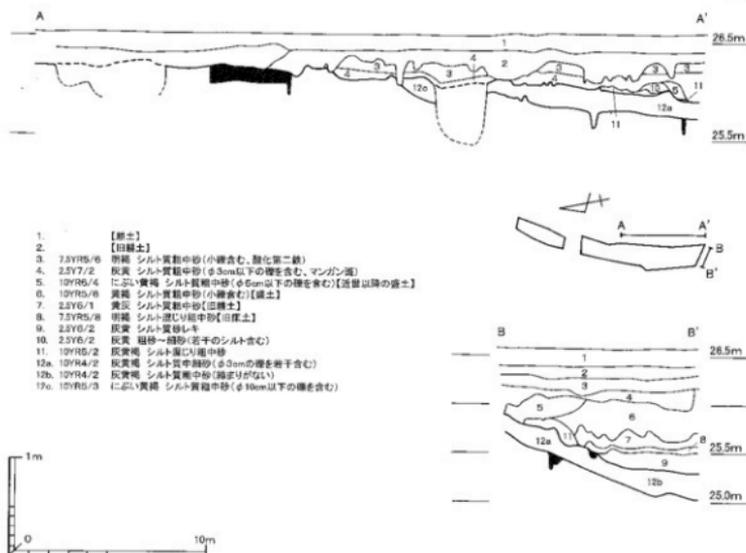
弥生時代の遺構は土坑のみ確認した。出土遺物は少なく、ほとんどが破片である。

古墳時代の遺構は掘建柱建物1棟を確認した。

中世の遺構は溝で、南北方向の一条と、3条の溝が熊手状に延びる遺構がある。

第2節 層序

北地区も南地区と同様な地形にあるが、南地区とは異なり等高線と平行する方向に細長く調査区を配しているため、削平による平坦地の造成は明らかではない。南壁の土層断面をみると、むしろ、現在の



第46図 北地区 土層断面図



第47図 北地区 遺構配置図

田面まで地盤をかさ上げするために、以前の耕作土（7層）上に大規模な盛土が行われている（4～6層）。

遺物包含層（12層）は、水平堆積するこれらの上部層（1～9層）の下に、地形傾斜に沿って斜めに堆積している。弥生時代後期の遺物が多く含まれていたが、それ以降のものもある。遺構面は遺物包含層の上下にあるが、機械掘削の際に、東側半分ほどは地山近くまで掘り下げてしまっていたため、上下に区分できなかった遺構もある。

こうした遺物包含層と遺構面の状況が見られるのは、調査区南端から約15mあたりまでで、それ以北は耕土とその盛土直下ですぐに地山に至り、遺構は極めて希薄である。地山の堆積土も、南半ではシルト質土が主体となっているのに対して、北半では砂礫質土が主体であった。しかし、全般に北地区よりも砂礫の含有が多い。

第3節 弥生・古墳時代の遺構と遺物

1. 遺 構

土坑28（第48図 図版28）

調査区南端から検出された長径約2.4m、短径1.9mを測る楕円形の土坑である。深さ約50cmを測るが、土坑南側には後述するビット17が切り込んでいる。

遺物は高杯、甕など（252・253）が出土している。

ビット17（第48図 図版28）

土坑28内の南端に切り込んで掘られており、直径約40cm、深さ約20cmを測る。

遺物は甕（254）が出土している。

掘立柱建物跡2（第49図）

調査区南端で検出された主軸を東西方向に向ける南北2間×東西4間以上の規模をもつものである。ビット内から出土した須恵器は図化することはできなかったが、古墳時代中期のものと思われ、遺構の年代を示すものと考えられる。

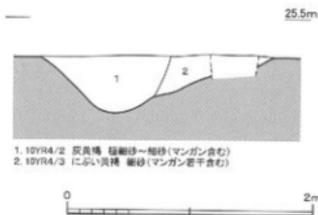
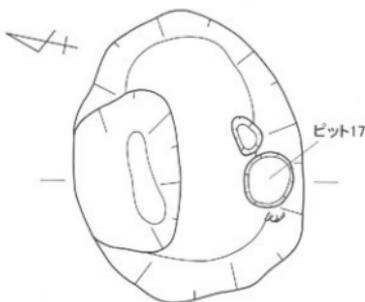
2. 遺 物

土坑28出土土器（252・253）

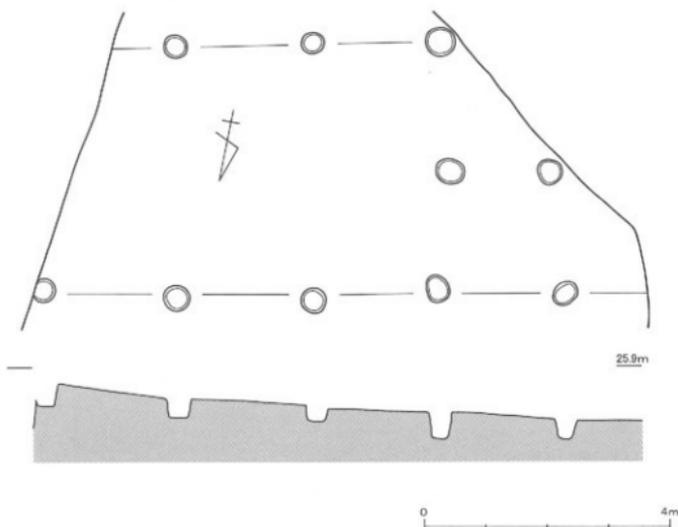
252は「ハ」の字状に開く高杯の脚部である。内外面ともにナゲ調整の痕跡が残っている。253は内外面にナゲ調整の痕跡がわずかに残る甕の底部である。

ビット17出土土器（254）

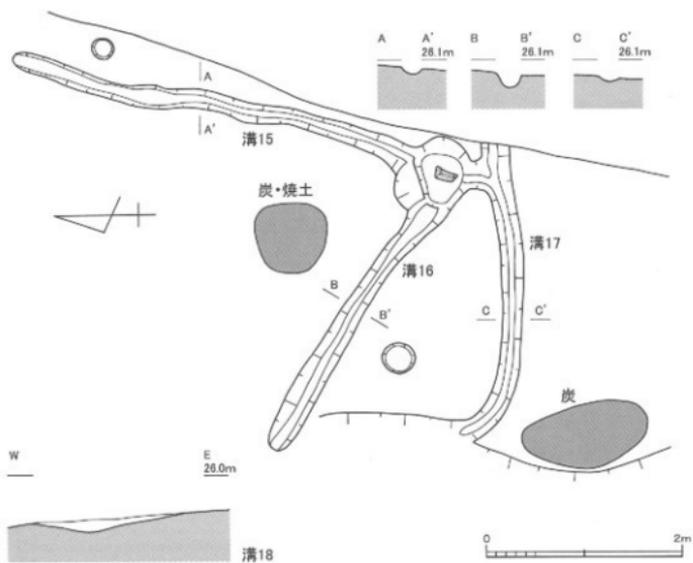
254は外面にナゲ、内面にハケメが施された甕の底部である。



第48図 北地区 弥生時代の遺構（土坑28）



第49図 北地区 古墳時代の遺構（掘立柱建物跡2）



第50図 北地区 中世の遺構（溝15～18）

第4節 中世の遺構と遺物

1. 遺構

溝15～17 (第50図)

調査区南寄りにあるが、遺物包含層の分布範囲からは外れている。三条の溝が最大径70cm、深さ約20cmの楕円形状の土坑から熊手状に延び、溝17はそのまま東へ向かって続いているようである。溝は幅20cm、深さ5～15cmほどで、浅く幅狭いものである。

溝15と16の間および溝17の両側には、炭や焼土の薄層があり、これらの溝の性格と関連すると考えられる。

溝からの出土遺物は無いが、中央の土坑からは磁石(S67)が出土している。

溝18 (第50図)

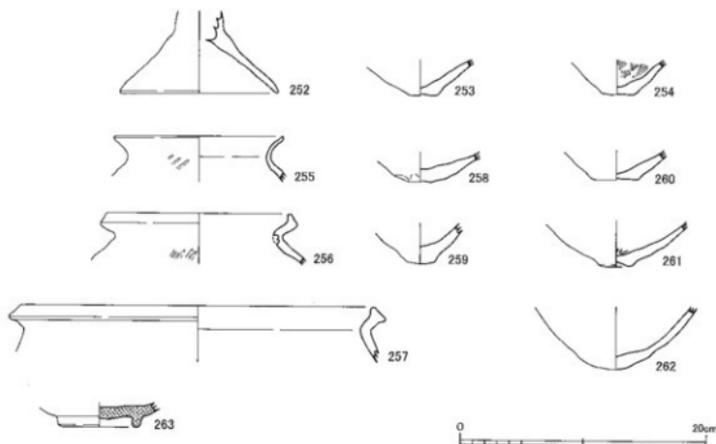
調査区南端から、ほぼ一直線に北に向かって延びる溝である。遺物包含層の上面で確認した。幅約1.5m、深さ約10cmの浅い溝で、確認できた長さは26mである。

2. 遺物

溝15～17出土石器(S67)

S67は砂岩製の大型荒砥石である。砥面は表裏および両側面の4面で、横断面は4面とも明瞭に内彎し、よく使い込まれている。下端面を中心に敲打痕が認められ、敲打で整形を行ったことがわかる。

他に土師器・須恵器が出土しているが小片のため図化していない。



第51図 北地区 出土石器

第5節 包含層出土の遺物

弥生土器・土師器・須恵器・磁器・石器・鉄器が出土したが、土器では図化可能なものはわずかであった。

弥生土器 (255~262)

包含層より出土した土器のうち、図化できたものは8点(255~262)を数え、すべて甕である。255~257の口縁は、直径約14cmを測るもの(255・256)と直径約28cmを測るもの(257)に分かれるが、比較的薄い器壁をもつ255に対し、256・257は口縁端部を上方につまみあげている。いずれも口縁端部には横ナデ、外面にはタタキの痕跡が残っている。258~262は甕の底部である。このうち、258の内面にはナデと工具による調整痕が残り、外面にはナデと押さえの痕跡が交互にみられる。

陶器 (263)

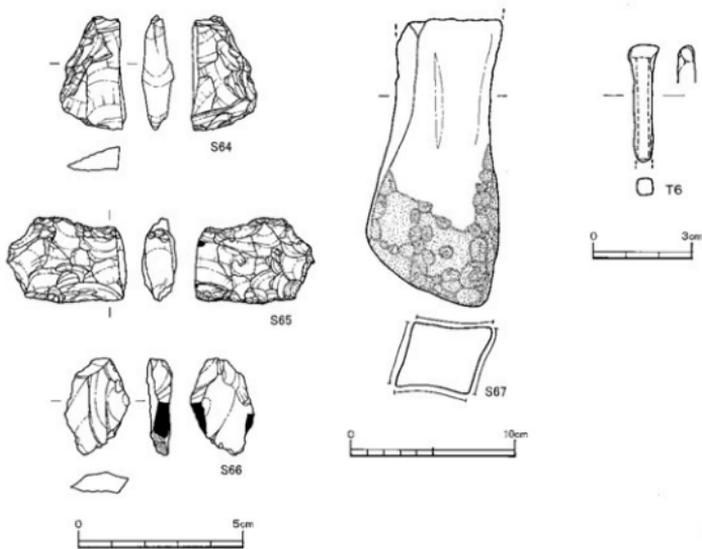
263は灰釉陶器皿である。釉は2軸で18世紀後半以降の美濃焼と考えられる。

石器 (S64~S66)

楔形石器と剥片がある。

S64、S65は楔形石器である。ともに剪断面をもつ。S65は一見、尖頭器の基部のようにも見えるが、上側の側縁が潰れて小さく抉れている。

S66は石核底面をもつ小型の横長剥片である。打面は複数の剥離面で構成され、背面は主剥離面と同一方向からの複敬面より成る。風化が比較的進んでおり、旧石器時代の遺物である可能性がある。



第52図 北地区 出土石器・鉄器

金属器 (T6)

T6は鉄釘である。頭部は潰れている。

第6節 小 結

今回の調査では、調査区の南半部から弥生・古墳時代の遺構と中世の遺構が確認された。西側に隣接する町村会が調査を実施したA地区（以下、町村会A地区）では、弥生時代と中世の遺構の他に、10世紀前半を中心とする平安時代の遺構と遺物包含層が比較的広い範囲にわたって確認され、緑釉陶器の出土も報告されている。町村会A地区を含めた専任西遺跡北地区の各時期の遺構は、開墾にともなう造成によって盛土下層に遺物包含層を含め遺構面が複数検出された地点がある一方、遺構面が削平によって残っていない地点が広くみられ、十分な調査成果はえられなかった。

第5章 五反田遺跡の調査

第1節 概要

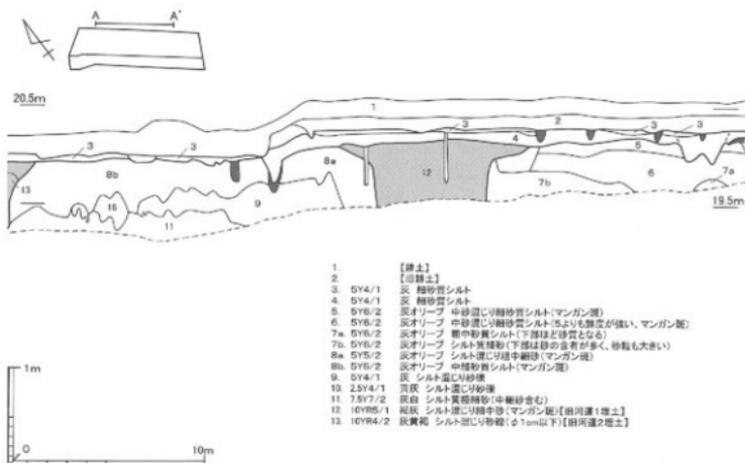
扇状地末端に位置する東西に細長い調査区で、調査面積は2年度合わせて683㎡である。西端には段丘崖がある。2面の遺構面があり、溝と旧河道を検出したが、調査時における認識の違いなどで、平成10年度の調査では調査の対象としなかった遺構がある。

第1遺構面では、調査区の東半部で近世以降の軸溝と思われるような、南北方向の浅い溝を数条検出した。

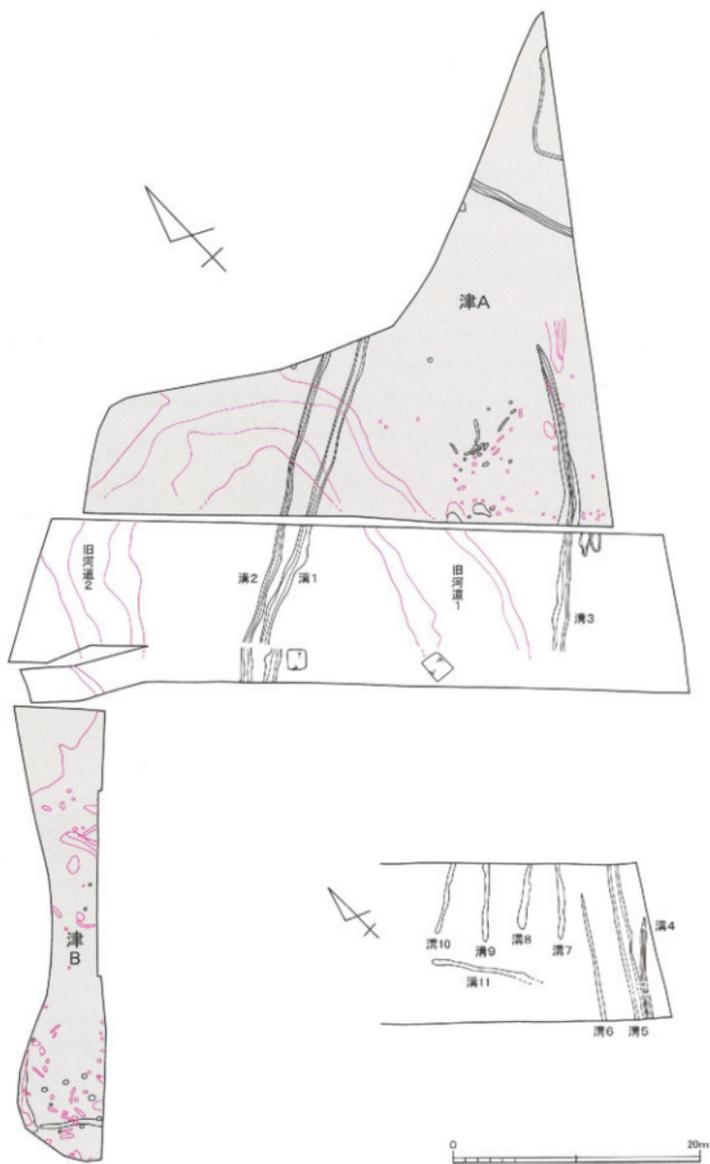
第2遺構面では、中世の2条の溝と縄文時代の旧河道を検出した。溝は現水田の南北方向の畦に沿うように走行する。旧河道は2本あり(旧河道1・2)、調査区を斜めに横切るように八の字状に走るが、北隣の津名郡町村会の調査区では一つにつながっていた。旧河道の底付近の砂礫層中からは、わずかであるが、縄文時代後期の土器や石器が出土している。

第2節 層序

調査区は水田2筆にまたがるが、比高差は40cmほどで、喜住西遺跡のような大きな段差はない。灰色系のシルト質土を基本とする土層の堆積が見られるが、遺物包含層と呼べるような層は認められなかった。遺構面は基本的に4層上面(第1遺構面)と5層上面(第2遺構面)の2面であるが、旧河道はこれより下層でしか検出できなかった。第54図では、津名郡町村会の調査成果に準じて、旧河道は第2遺



第54図 土層断面図



第54図 造構配置図 (赤線は下層の造構)

構面よりも下層の遺構として図示している。なお、調査区西半には4層が存在せず、この上面の遺構に対応する遺構もない。したがって、第2遺構面は8層上面となる。

第3節 縄文・弥生時代の遺構と遺物

1. 遺 構

旧河道1 (第55図 図版30)

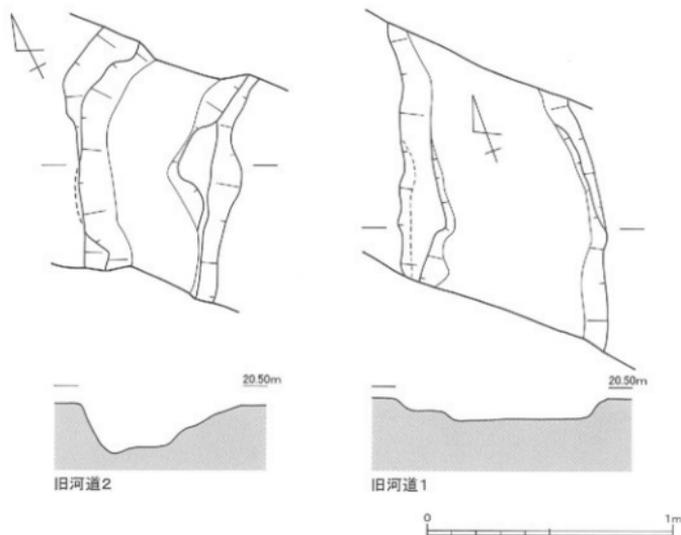
調査区中央東寄りの地点から検出された幅約8m、最大深度約1.2mを測る旧河道である。ほぼ南北方向に流れを向け、平成10年度に津名郡町村会が調査を実施した北側に隣接する地区(以下、町村会A地区)に続くものである。

遺物は縄文土器(277)が出土している。

旧河道2 (第55図 図版30)

調査区の西端から検出された幅約7m、最大深度約2.1mを測る旧河道である。旧河道1から続く流れは、町村会A地区においてほぼ直角に流れを変え、再び南西方向へと続いていく。さらに、南側に隣接する地区(以下、町村会B地区)の北端からもそれに続く落ち込みの一部が検出されており、一連の旧河道は調査地周辺の低位段丘上を蛇行していたと考えられる。

遺物は弥生土器および縄文土器(266~276)とサヌカイトの剥片類が若干出土している。



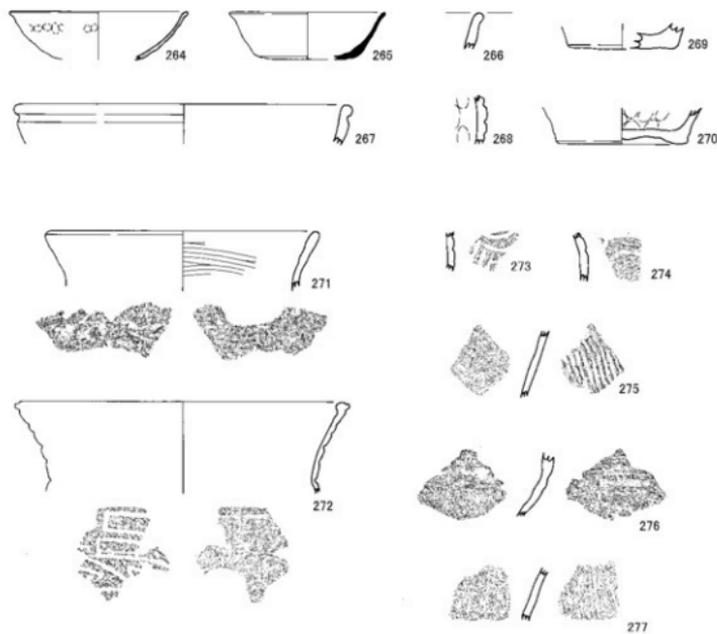
第55図 縄文時代の旧河道

2. 遺物

縄文土器および弥生土器 (266~277)

旧河道2の上層からは5点の土器(266~270)が出土している。269・270は弥生土器の甕であるが、267・268は胎土あるいは形状などから縄文土器の可能性が高いと考えられる。また、旧河道2の中層付近から6点(271~276)、旧河道1から1点(277)のあわせて7点の縄文土器が出土している。

267は胎土中に1mm程の砂粒を多く含み、口縁端部に穿孔および沈線が通っている。268の胎土にも0.5~1.5mm程の砂粒が多く含まれており、内面には指で押さえたような窪みが見られ、外面には並行する3条の沈線とナデたような痕跡が残っている。270は底部内面に指押さえた痕跡が残っているが、外面は摩滅しており、調整等は認められない。271~277の縄文土器のうち、271・272は口縁部の一部が残っており、ともに広口深鉢と考えられる。272の外面には比較的良好に縄文が残っており、施文後に沈線によって方形などに区画し、区画間の縄文を磨り消している。273~277は小破片であるが、他の土器と同様、胎土中に0.5~2mm程の砂粒が多く含まれている。いずれも外面は摩滅しているが、磨り消し縄文(273・274)や施文の痕跡(275・276)などがわずかに残っている。



第56図 出土土器

第4節 中世の遺構と遺物

1. 遺構

溝1・2 (第54図 図版12・29)

調査区を斜めに横断して、おおむねS60~65° Eの方向に30m以上延びる2条の溝である。津名郡町村会のA地区では、間隔が次第に広がっている。溝1の位置は現在の水田畔の位置と一致する。溝1は幅60cm~1m、深さ約40cm、溝2は幅約60cm、深さ約20cmである。

遺物は、溝2から瓦器碗(264)が出土している。

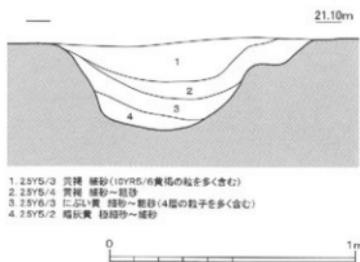
溝3 (第54図 図版12・29)

調査区に直交して南北に延びる溝である。津名郡町村会A地区の途中で途切れており、平成10年度の5トレンチでは確認しなかった。幅約1m、深さ約50cm。

溝4~溝11 (第54図 図版12・29)

溝4~溝10は調査区に直交して南北に延び、溝11はこれらと直交する。溝7~溝10は深さ5mほどしかなく、ごく浅く幅の狭い溝であるが、方向が不揃いで、間隔もあまり一定しない。溝4は他より幅広く、溝5は幅狭いが深い溝である。

遺物は、溝6から須恵器杯(265)が出土している。



第57図 中世の遺構(溝1断面)

2. 遺物

溝2出土の土器(264)

264は瓦器碗である。形態から和泉型瓦器碗と考えられる。器表が荒れているが、外面には指頭圧痕が観察される。

溝6出土の土器(265)

265は須恵器杯Aである。平坦な底部から口縁部が斜め外方に直線的に伸びる。溝の時期よりも明らかに古い8世紀代のものである。

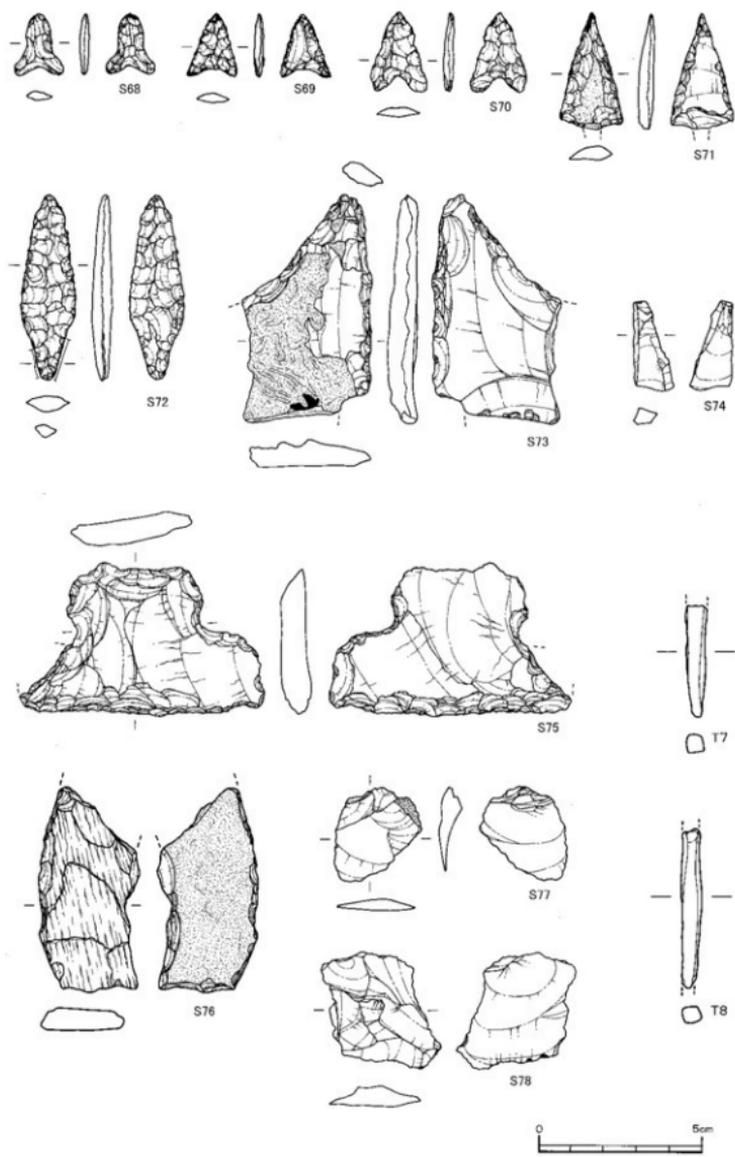
第5節 包含層出土の遺物

石器と鉄器が出土している。土器は図化できるものはなかった。

石器(S68~S78)

石鏃、石匙、削器、楔形石器、打製石包丁関連品、剥片がある。

S68~S72は石鏃である。凹基式(S68~S70)と有基式(S71・S72)があり、S69~S71は喜住西遺跡南地区包含層出土の石鏃と類似した形態である。S68は側縁が明確に屈曲するため、逆Y字状を呈する。全体を粗い剥離で整形している。S72は全面加工で柳葉形の整った形態に仕上げられている。



第58圖 出土石器・鉄器

基部と茎部の境は曖昧であるが、茎部は側縁が研磨されている。

S75は横型石匙である。刃部は階段状の二次加工で直線的で厚みがあり、大きな柄みをつける。

S73は削器としているが、二次加工の状況は石匙と類似している。

S74は楔形石器の削片である。

S76は結晶片岩の板状材の周囲に調整剥離を行ったものである。石材から、打製石包丁の関連品としておく。

S77とS78は剥片である。S77は背面にポジティブな剥離面を大きく残し、打面は複数の剥離面で構成される。剥離角を含め、いわゆるポイントフレイクに類似する。S78は平坦な打面を有する剥片で、背面は多方向からの剥離面構成される。

これらの石器は喜住西遺跡南地区で出土した石碇と同様、縄文時代～弥生時代のものが混在しているようである。喜住西遺跡南地区出土の石器と同様な理由で、凹基式石鏃は縄文時代後期に、大型の有茎式石鏃は弥生時代中期に属するものであろう。

金属器 (T7・T8)

T7とT8は鉄釘と思われるものである。ともに頭部を欠き、T8は先端も欠損する。

第6節 小 結

今回の調査では、縄文時代および中世の遺構が確認された。延長約70mにわたって検出された旧河道は、町村会A・B地区を含めた一帯を蛇行しながら西流していたものと考えられる。旧河道の上層からは弥生土器が出土し、中層から出土した縄文土器は施文の様相などから後期の特徴をもつと考えられ、縄文時代後期から弥生時代にかけて旧河道の大半は埋没したと思われる。また、中世の溝については、町村会の調査で13～14世紀を中心とする須恵器や瓦器碗などが出土していることから、当該時期に位置付けられると思われる。

第6章 結 語

第1節 遺構について

2年度にわたる発掘調査によって、喜住西遺跡では縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代、室町時代、近世以降の各時代に属する遺構や遺物を検出することができた。また、五反田遺跡では縄文時代および中世の遺構を検出することができた。

これまで五色町内では遺跡の発掘調査例が極めて少なかったが、平成7年度以降、ほ場整備事業に伴い広石下地区周辺あるいは鮎原地区周辺で発掘調査が相次いで行われており、遺跡の状況がしだいに明らかになりつつある。ここでは、これらの調査成果も加味しながら、今回の調査で得られた成果を簡単にまとめておきたい。

まず、縄文時代では、喜住西遺跡の有舌尖頭器が単独出土しながら注目される。淡路島内における有舌尖頭器は1981年段階では5遺跡が確認されていただけであったが（増田1981年）、1998年には13遺跡となっており（兵庫県教育委員会1998年）、出土例が増加している。今後、北淡町まるやま遺跡のような石器ブロックの発見も期待されよう。

縄文時代の遺構としては後期の旧河道が五反田遺跡で検出された。遺物量はわずかで、砂礫層中から出土しているため磨耗しているため、五反田遺跡に縄文時代の居住域が存在するとは考えにくい。遺跡の南西側約300mにある丘陵には後期の竪穴住居跡が検出された外ヶ鼻遺跡があり、喜住西遺跡では石籬を中心とする縄文時代の石器が出土している。喜住西遺跡では縄文時代の遺構が検出されず、土器も出土しなかったため時期は決し得なかったが、東浦町個遺跡出土の石籬の形態と共通することから縄文時代後期に比定した。石器に転磨が認められないことから、喜住西遺跡の未調査範囲の中に縄文時代後期の遺構が存在することは十分考えられる。このように、五反田遺跡出土の縄文土器については、周辺遺跡との関連を想定するのが妥当であろう。

弥生時代では、喜住西遺跡で竪穴住居跡3棟（うち2棟は周溝のみ）、掘立柱建物跡1棟のほか土坑や溝、旧河道が検出された。また、津名郡町村会の調査区でも竪穴住居跡1棟（F地区）や土器がまとめて出土した溝や土坑（C地区）が検出されている。これらの遺構は弥生時代中期後半～後期に属するものである。その広がり、等高線に沿う南北方向で100m以上、東西方向で60m以上と広範囲に及ぶものの、遺構の密集度は低い。周辺に目を転じてみると、喜住西遺跡の南東に隣接する飛谷遺跡では1100㎡ほどの範囲が発掘調査されており、弥生時代後期初頃の竪穴住居跡3棟などが検出されている。住居跡は拡張や建て替えが行われており、多量の土器や人型の有基式石籬が出土している。土器には中期末の様相を示す絵柄土器も含まれる。また、喜住西遺跡の背後の丘陵には喜住遺跡があり、発掘調査は行われていないものの、広範囲で弥生時代後期の土器が採集されている。これらの遺跡は、それぞれ別個の遺跡ではなく、未調査の喜住遺跡に集落の中心部があり、その周辺部にあたるのが喜住西遺跡あるいは飛谷遺跡なのであろう。これらの遺跡が一つの遺跡として捉えうるならば、淡路島内における弥生時代の集落としては、かなり大規模なものとなる。それは、鳥飼浦に向かって開けた平野部の喩仏とも言うべき位置に立地することとも無関係では無いと考えられる。

なお、津名郡町村会の調査では五反田遺跡でも弥生時代後期の土坑などが検出されているが、今回の

調査では明確な弥生時代の遺構は認められなかった。五反田遺跡では住居跡など集落の中心となる遺構が発見されておらず、その実態は不明と言わざるを得ない。後期の集落が丘段上ではなく平野部の低位段丘上に立地するとすれば、喜住西遺跡の集落とどのような関係があったか興味深い。

弥生時代の遺物はそれほど多いものではなく、良好な出土状態を示すものも少ないが、土坑3出土の土器は後期後半の一括資料として重要である。石器ではサヌカイト製の大型石鏃があり、中期後半に位置づけた。また、打製石包丁に吉野川流域と共通する形態のものが存在することは、地理的に理解できることである。

古墳時代では、喜住西遺跡北地区で掘立柱建物1棟を検出した。わずかな柱穴出土の遺物によって時期を判断するならば5世紀中頃となろうか。古墳時代の遺構は津名郡町村会の調査区では確認されておらず、周辺でも古墳時代の集落遺跡は知られていない。

平安時代では、喜住西遺跡で9世紀後半から10世紀初頭の溝1条が確認された。須恵器、土師器、黒色土器などが多量に出土し、緑釉陶器もわずかながら含まれる。杯、皿類の供盤形態の器種が大半を占め、出土状況から極短期間に投棄されたものと考えられた。隣接したところに相応の建物跡などが検出されるのではと期待されたが、溝の北側はほ場整備の対象地区であっても、盛土が行われるため津名郡町村会の発掘調査の対象とはならなかった。また、町村会が調査を行った各地区で10世紀前半の遺構が検出されているものの、中心となる遺構は発見されていない。

この時期の特筆すべき遺物としては、山城系の緑釉陶器と搬入品の耳皿がある。緑釉陶器は津名郡町村会の調査でも12点出土している。津名郡内では緑釉陶器の出土する遺跡が増加しており、普遍的な流通が指摘されている。緑釉陶器や灰釉陶器は確かに希少品ではあるが、須恵器や土師器とともに少量の緑釉陶器や灰釉陶器が供膳具として利用されるというのが、当時の一般的な姿であろう。

中世では、喜住西遺跡で15世紀を中心とするピット、土坑、溝などが検出されている。溝には現在の棚田の段下で検出されているものがある。緩傾斜地を削平して造成された平坦地には、この頃まで遡るものがあり、当時は牛舎の場ではなく居住地として造成されたものであった。ピットは集中するところもあるが、建物跡の配列を認めることはできなかった。礎石も併用されるような建物であったと考えられる。なお、津名郡町村会のE地区では3間×4間以上の掘立柱建物1棟が検出されている。また、土坑には礎を伴うものがやや多く認められたが、共通性は少なく性格は不明である。

この時期になると喜住西遺跡の前面に広がる低位段丘上の平野部は耕地として利用されており、五反田遺跡で検出された溝もその一部を構成するものであろう。

中世の遺物については、正確な組成比を算出しているわけではないが、鍋や羽釜など煮炊き具を主体としており、供膳具は少ない。また、瀬戸や備前など島外からの交易品がわずかながら含まれている。瀬戸内海の海運が発展した時期であり、河口部に成立した鶴岡中瀬遺跡のような中心的な集落との関係が推定されよう。

近世では、喜住西遺跡の東端を中心にピット列や土坑が検出されている。出土遺物から18世紀後半以降の遺構であるが、集落の構成要素となるものではない。

五色町内における埋蔵文化財調査は、平成7年度以降のほ場整備事業の進展に伴い、津名郡町村会によって精力的に進められてきた。その中で、新たな遺跡も多数発見され、多くの知見が集積されつつある。本報告では特に、遺跡の主体をなす弥生時代について十分な検討を行うことができないが、考古学の分野での五色町史の解明に多少なりとも活用いただければ幸いである。

第2節 溝11出土の土器について

溝11から出土した土器は、平安京出土土器を中心として行われている詳細な編年との対比から、9世紀第4四半期～10世紀初頭に比定されるものである。溝内からの出土ではあるが、非常に一括性の強い七器群として捉えられるものであることは、第3章第4節で記述したとおりである。須恵器と土師器さらに黒色土器から構成される出土土器群は、白磁・青磁に代表される輸入磁器をまったく含まず、山城系とされる全面施釉・蛇目高台の緑釉陶器皿が1点共伴している。こうした状況にある土器群の器種組成と形態的な特徴等の傾向を抽出するなかから、七器群の様相についての概況をみてみたいと考える。

器種構成の特徴

出土土器群を構成する須恵器・土師器・黒色土器の占有比率は、概ね49%：28%：22%の割合にあり、数量的には須恵器が中心的な種別となっている。3種類の土器が出土している良好な類例がないため他の遺跡との比較ができていないものの、種別構成の複雑な郡城・官衙関連の遺跡と異なる状況は、郡城周辺域における土器様相の一例を示すものであろう。

第59図に示す器種別の構成をみると、須恵器では杯A（報告書によっては碗とされている場合もある）が全体の約73%を占め、杯Bが約21%、鉢・壺・皿類がそれぞれ約2%の構成となり、杯Aが圧倒的多数になる。98%が供膳形態の器種で占有され、壺形土器1点のみがその例外となる。土師器でも杯Aが57%、杯Bが23%で、杯類のみで80%の割合となる。ここでも非供膳形態となる器種は壺2点と壺1点のみであり、皿類・鉢を加えた供膳形態の割合は90%となる。器種構成の面でも壺が加わるものの、基本的な構成は須恵器とはほぼ類似した内容となる。黒色土器は内面が黒色となるA類ばかりであり、B類の存在をみない。ここにおいても、杯Bが86%・鉢が5%で総計91%となる。器種は杯B・壺・鉢のみであり皿・壺類の出土を見ない。須恵器・土師器で6割近い占有率を占めていた杯Aが黒色土器に見られないことは大きな特徴であり、明確な器種区分が行われていたことが知れる。

こうした器種構成は遺跡の性格に起因するところが大きいと考えられるが、今回の調査では本溝以外に明確に当該期に属する遺構が確認されていないことから、本遺構ひいては本遺跡の性格を推定することは困難と言わざるを得ない。器種構成のうえからは、供膳形態の土器が多数を占めることから律令的な性格を考えてしまいがちとなるが、遺構等でそれを裏付けるものがないことから、溝11出土土器のみをもって断定することは避けたいと思う。

調整法的・形態的な特色

ここでは、各種別において多数を占める杯類についてみてみたい。まず須恵器杯Aについては、底部が所謂「円板高台」の痕跡を留めるものの、底径は大きく、見込みの落ち込みはまったくみられない。底部外面は、ほぼすべてがヘラリキ未調整のままであり、それ以外をヨコナデとする。同時期の生産遺跡である占城山1号窯跡や向上・古城窯跡群（いずれも三田市第60図）と比較すると、器高は3～5cmの範疇でおさまるものの、口径は窯跡資料の13～17cmと比較すると、12～14cmとやや小ぶりな作りとなる。それに対して、杯Bは口径が13cm台から16cmとなり、一回り大きな器となる。そのうち、大型の口径となる113～115の口径部は杯Aのそれと類似した形態となるが、小型の116～118は若干雄を異にする。また、80・81のように大きく焼け歪んだ製品が使用されており、須恵器の供給側と使用者である本遺跡との微妙な関係を示しているものでもある。

土師器と黒色土器は、調整技法・形態的特徴において共通する点が多いことから、同一工人によって

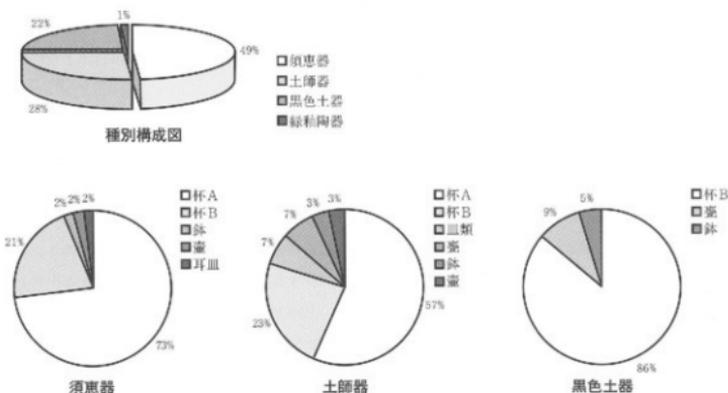
製作されたとされている。本遺跡の場合、両者に共通する杯Bが土師器では5点のみであるものの、形態的にはほぼ両者とも類似していることから、同一工人集団による製作を本遺跡においても確認することができる。その一方で、黒色土器に転用されるものは杯Bのみとする区分律が存在していたのではないかと推測される。さらに、壺においては明らかにその製作者が異なっており、専門工人の存在を考慮する必要があるのかも知れない。

また、調整技法的には土師器の表面剥離が著しく、技法上の正確な確認が困難な条件にあるものの、杯B外面の底体部境を回転ヘラケズリした後脚部の貼り付けを行う。多くはこのケズリの範囲が狭く、脚部貼り付けの際に同時に回転ナゲを施すが、黒色土器157・158などは体部の3分の1近くまで回転ヘラケズリが及ぶ。杯Aは土師器のみであるが、形態的には底部の形状・口縁端部形態などは須恵器と類似する点も多く、両者に密接な関係が存在している可能性が看取される。黒色土器の杯B150・160には内面に横方向にヘラミガキが施されているため、本来的にはこうした調整が一般的であったものと考えられる。

以上のように、黒色土器出現の比較的初期の段階にあたり、「律令的土器様式」から「前期平安京的土器様式」として、国産産軸陶器・輸入磁器・須恵器・土師器・黒色土器など多彩な種別と多様な器種が出現し、器種構成に新たな展開がもたらされる時期にあたるため、概して器形の崩れが少なく、比較的风格の整った状態を留めている。

型式の認識とその細分

このように、溝11出土の土器については概ね平安京Ⅱ期新設跡から同Ⅲ期古段階に相当する土器群として認識されるものであるが、型式の細分については第2表の土器観察表に基づく器高指数によって行った。従って、第3章第4節で記述している須恵器・土師器・黒色土器における各供體形態の器種（杯A・杯B）の型式設定は、これに基づくものである。また、本来的には各種別のなかで器高指数による型式の細分を完結すべきであるが、今回は資料点数が少ないことと、総合的な供體形態の補完関係を明らかにしたいとする考えから、全種別を同一の口径基準値によって分類することとした。口径の18cm強



第59図 溝11出土土器の器種構成図

をⅠ型式、15cm弱～16cmをⅡ型式、13cm半ば～14cm強をⅢ型式、13cm弱～14cm弱をⅣ型式そして12cm前半のものをⅤ型式とし、各種別毎に器高による高・低別の細分（1類・2類）を実施した。

須恵器

杯Aの場合Ⅳ型式・Ⅴ型式をみることができる。器高的には5cm弱と3～4cm強の2クラスに細分することができる。同時期の向上・古城窯跡群や古城山1号窯跡の分析では、杯Aの器高指数は口径約13～16cm、器高約3～5cmの間に収まる一法量で構成されている。本遺跡の場合には資料点数が少なかつたために2型式の設定を行うことができたが、資料のサンプリングとしては決して作爲的に抽出したものではないにもかかわらず、こうした結果になったことは重視しなくてはならないと考える。古城山1号窯跡においても、器高指数表は確かに一法量の状況を示す散漫な分布となっているが、詳細に観察すると口径16cm前後、15cm前後、14cm弱と12cm強の4箇所により濃密な集中をみることができる。口径18cm前後の大型品も存在することから、製品の製作において、5つの大きさの口径を意識していたのではないかと想定できる。本遺跡の場合は、Ⅳ型式が14cm弱に、Ⅴ型式が12cm強の集中箇所に相当することとなる。

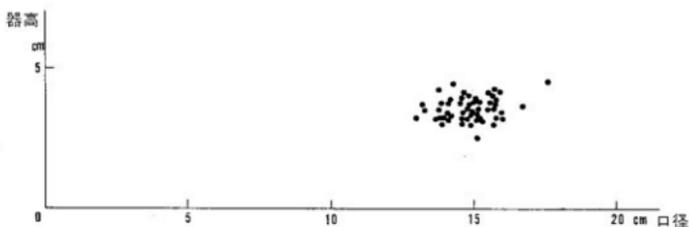
杯Bは資料数が6点のみであるが、傾向として口径約15～16cmのⅡ型式、約14cm弱のⅢ型式を設定した。両型式とも器高によって二分されることも考えられる。

土師器・黒色土器

土師器と黒色土器の供膳形態器種は、同一の工人によって製作されたと考えられているため、まとめて取り扱うこととする。

杯Aの土師器には口径約13cm強のⅣ型式、約12cm強のⅤ型式の2型式を確認することができるが、黒色土器には杯Aの存在をみない。杯Bでは黒色土器にⅠ型式からⅣ型式が確認でき、土師器にはⅡ型式からⅣ型式が存在する。Ⅰ型式は口径18cm強となるが、黒色土器の1例をみるのみである。Ⅱ型式は15～16cm、Ⅲ型式は14cm前後、Ⅳ型式が13cm前後となる。いずれの型式とも器高差による細分はできなく、1類としてまとめられる可能性が高い。このように両者を比較すると、杯Aはまったくの土師器専有の器種であり、杯Bは黒色土器が優勢種別であることが見て取れる。本遺跡に土師器と黒色土器を供給した工房においては、器種による種別と区分が計られていたのではないかと想定される。また、須恵器では器高による細分が行われているのに対し、土師器・黒色土器では口径による区分のみで終始している可能性もある。

以上三種別について器高指数を基とする型式設定をみてきたが、Ⅰ型式については黒色土器杯Bが、



第60図 古城山1号窯跡（三田市）出土須恵器杯Aの土器指数

II型式・III型式は須恵器と黒色土器の杯Bに、IV型式は須恵器と上飾器の杯Aに、そしてV型式は須恵器杯Aに優先的な型式として意識されていたのではないかと考えられる。都城遺跡あるいは官衙遺跡でない所謂一般集落遺跡の場合、確かに大筋としては一器種一法量はまだ画然と守られ、生産現場でもそれに基づいた器造りが行われているが、その内実では意外と各種別毎に口径の違いがかなり意識されていたのではないかと思われる結果を得ることとなった。本遺跡は明確に官衙的な遺跡として位置づけられるものではないが、供膳形態の器種比率が異常に高いことから公的な性格あるいは中央政権との強い繋がりを考える必要があるのかもしれない。

参考文献

- 兵庫県教育委員会 1992年『相野古窯跡群』近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書（XVII）
- 古代の土器研究会編 1994年 古代の土器3『都城の土器集成III』
- 津名郡町村会 1999年『津名郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』平成7～9年度 埋蔵文化財発掘調査
- 津名郡町村会 2000年『津名郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅱ』平成10年度 埋蔵文化財発掘調査
- 津名郡町村会 2001年『津名郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』平成11年度 埋蔵文化財発掘調査
- 津名郡町村会 2002年『津名郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅳ』平成12年度 埋蔵文化財発掘調査
- 兵庫県教育委員会 1998年『まるやま遺跡—本州四国連絡道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告V—』
- 増田一裕 1981年「古香尖頭器の再検討—本州・四国の出土例を中心として—」『旧石器考古学』22 旧石器文化談話会



全景 (西から)



全景 (東から)



2区南壁(北西から)



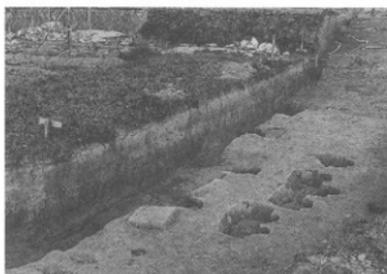
3区北壁(南西から)



4区南壁(北東から)



3区南壁(北西から)



5区北壁東半(南西から)



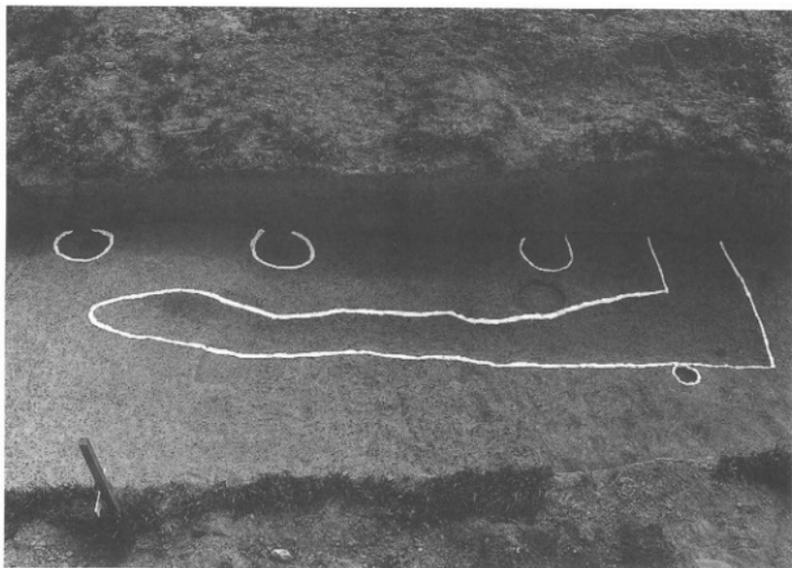
5区北壁西半(南西から)



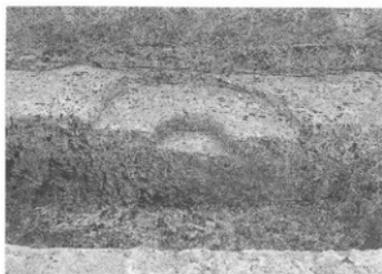
5区南壁東半(北西から)



5区南壁西半(北西から)



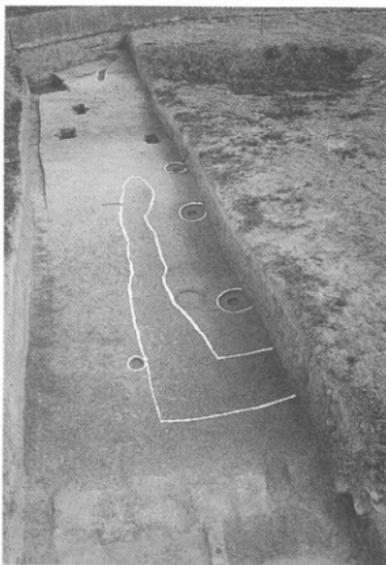
掘立柱建物跡1・溝1全景 (北から)



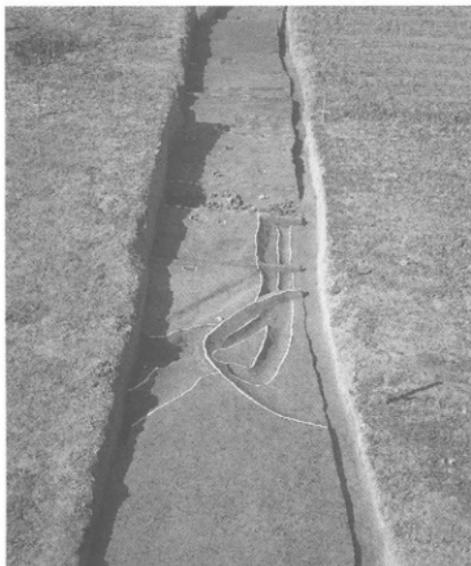
柱穴2断面 (北から)



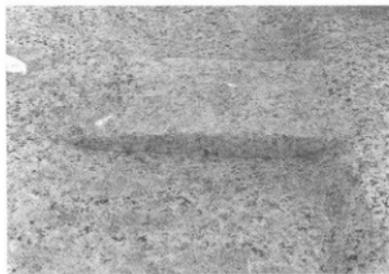
柱穴1断面 (北から)



掘立柱建物跡1全景 (西から)



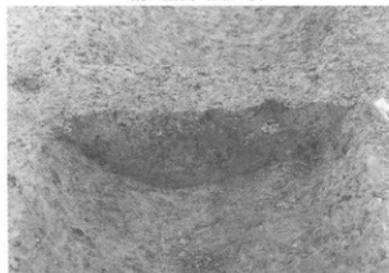
上層全景(東から)



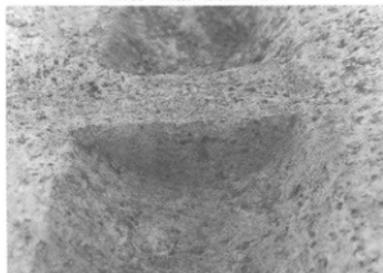
溝12断面(西から)



土坑4全景(南西から)



溝5断面(西から)



溝6断面(西から)



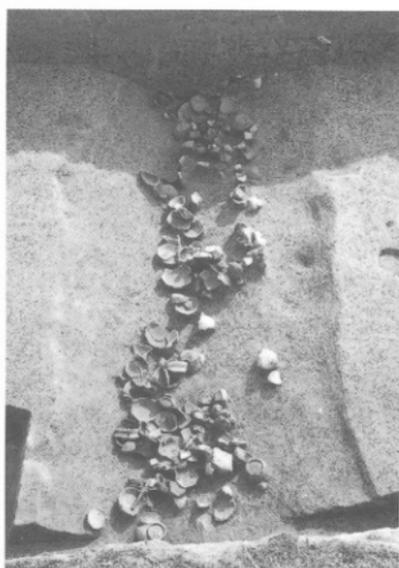
溝11全景(東から)



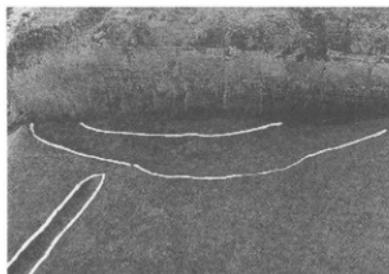
同断面(南から)



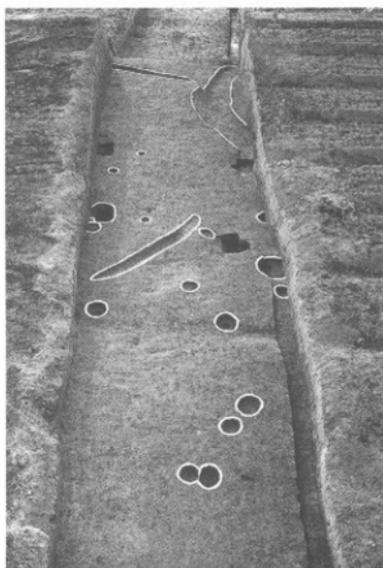
同土器出土状況(北から)



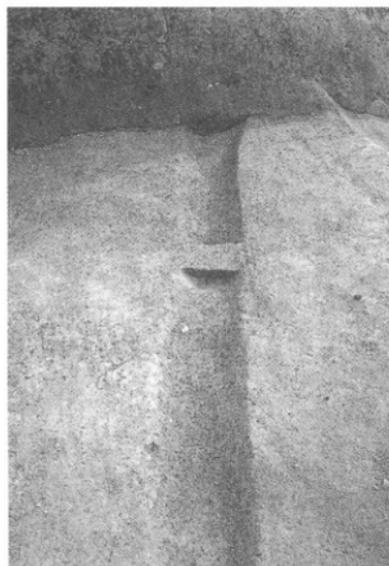
同全景(北から)



竪穴住居跡3(南から)



全景(東から)



溝7(北から)



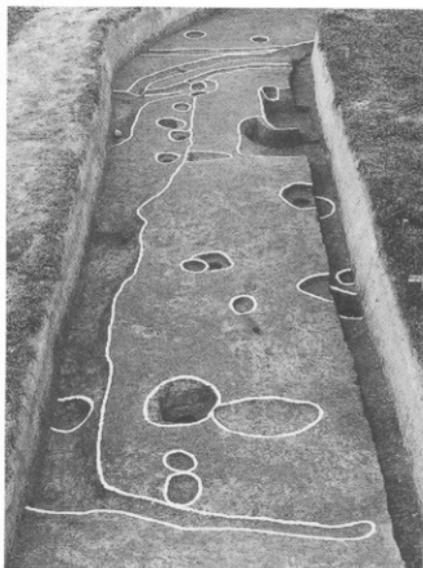
竪穴住居跡3断面(西から)



ピット4断面



上層全景 (北西から)



上層全景 (東から)



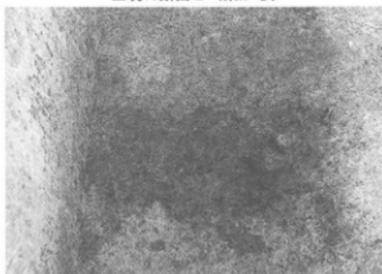
土坑18断面1 (西から)



土坑18断面2 (東から)



土坑18断面3 (西から)



土坑18内焼土 (東から)



土坑22断面 (北から)



土坑23・24断面 (東から)



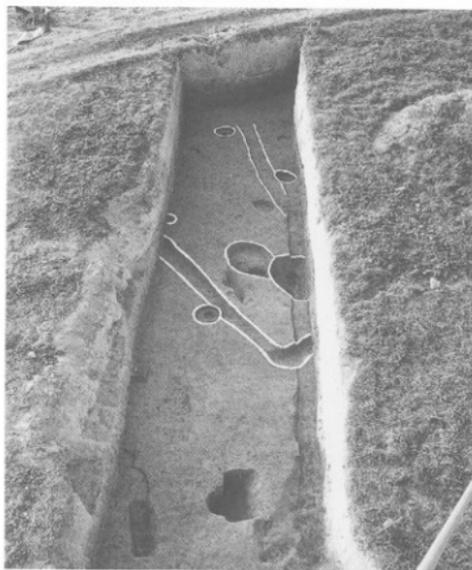
ピット14断面



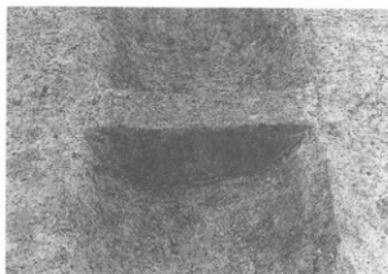
ピット11・12断面



ピット13断面



下層全景 (南東から)



溝9断面 (東から)



土坑7・8 (北から)



溝10断面 (東から)



ピット15断面 (北から)



全景(東から)



溝14断面(南から)



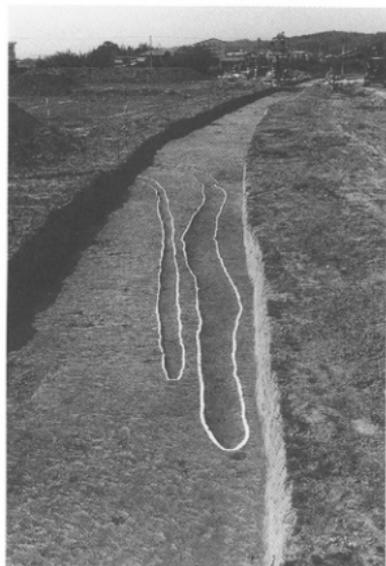
1区南壁(北西から)



3区南壁旧河道部(北西から)



3Tr 全景 (南から)



4Tr 全景 (東から)



3Tr 溝 (南東から)



3Tr 西壁 (東から)



全景 (東から)



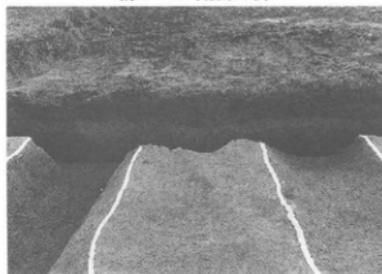
溝4~6 (東から)



溝1・2 (北西から)



溝4・5断面 (北から)



溝1・2断面 (北から)



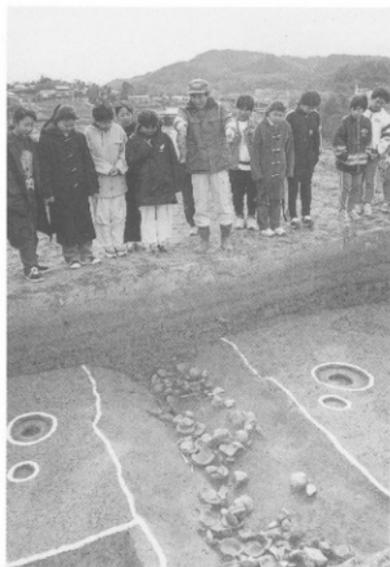
溝11土器検出



遺構面精査



溝11実測



広石小学校児童の見学



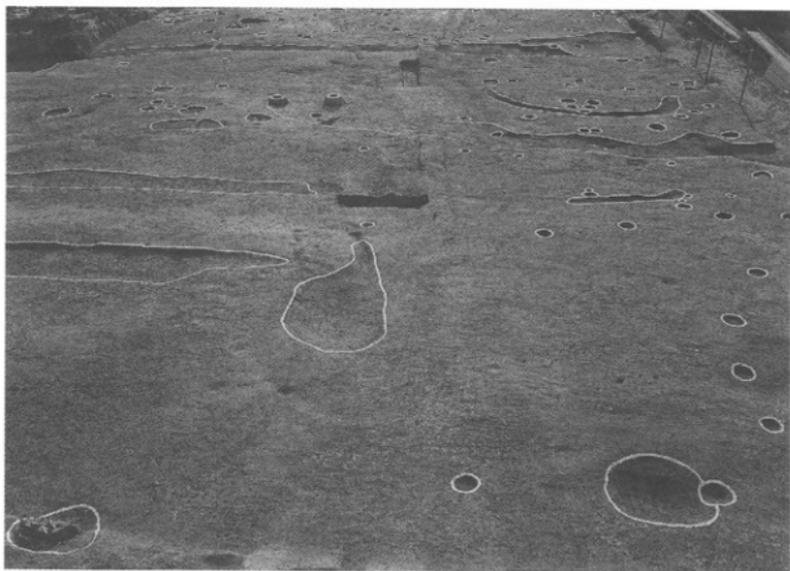
同左



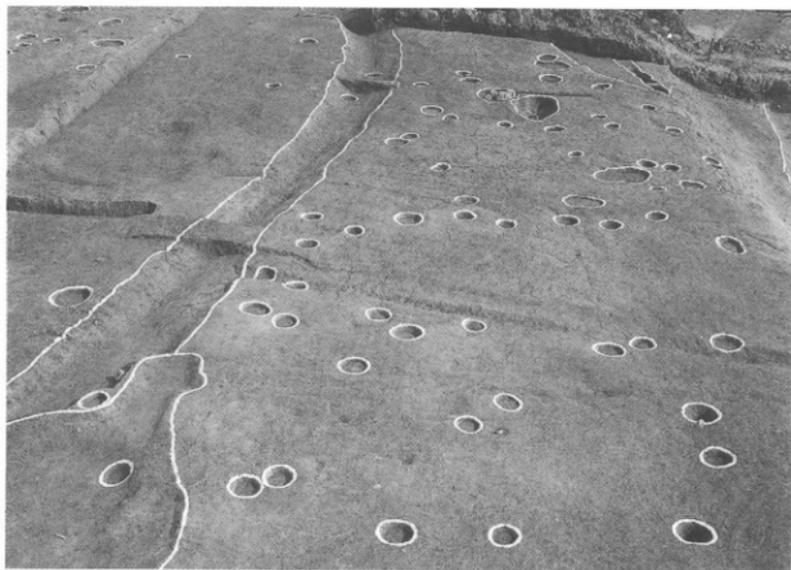
1・2区全景 (西から)



全景 (西から)



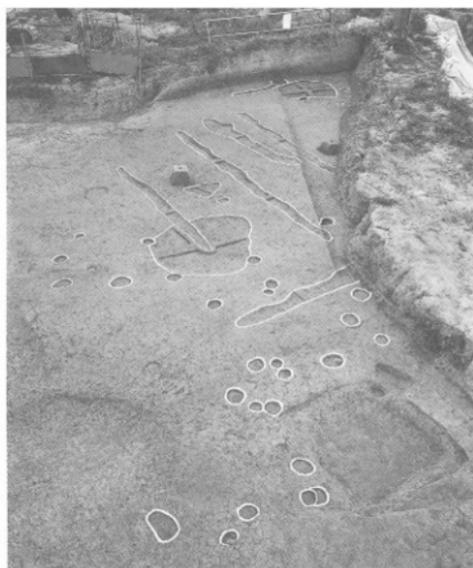
3・4区全景 (東から)



4区全景 (北から)



4・5区全景 (西から)



5区北西部下層遺構全景 (東から)



竪穴住居跡1全景 (西から)



同検出状況 (東から)



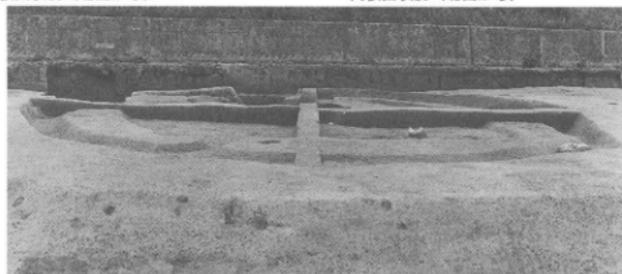
同全景 (東から)



竪穴住居跡1 検出状況（北西から）



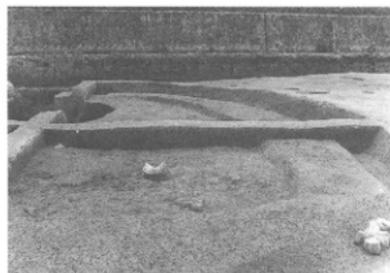
同検出状況（北西から）



同南北断面（西から）



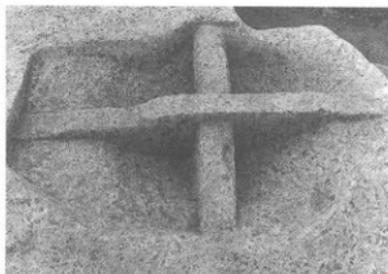
同東西断面（西から）



同南北断面南半



同東西断面西半（南から）



竪穴住居跡1中央土坑断面（南から）



中央土坑・排水溝断面（西から）



ベッド部断ち割り断面（西から）



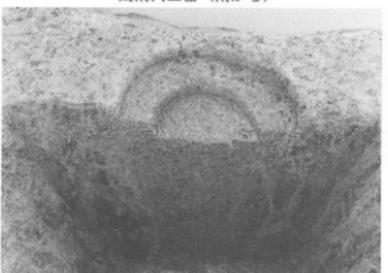
ベッド部下層の溝（東から）



周溝内土器（南から）



床面の土器（西から）



支柱穴1断割り（北から）



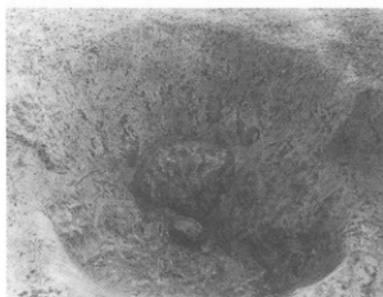
支柱穴3断割り（北から）



土坑2（北から）



同検出状況（北から）



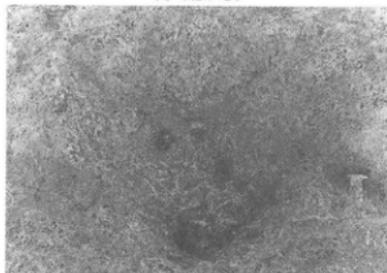
同完掘（北から）



土坑3土器出土（西から）



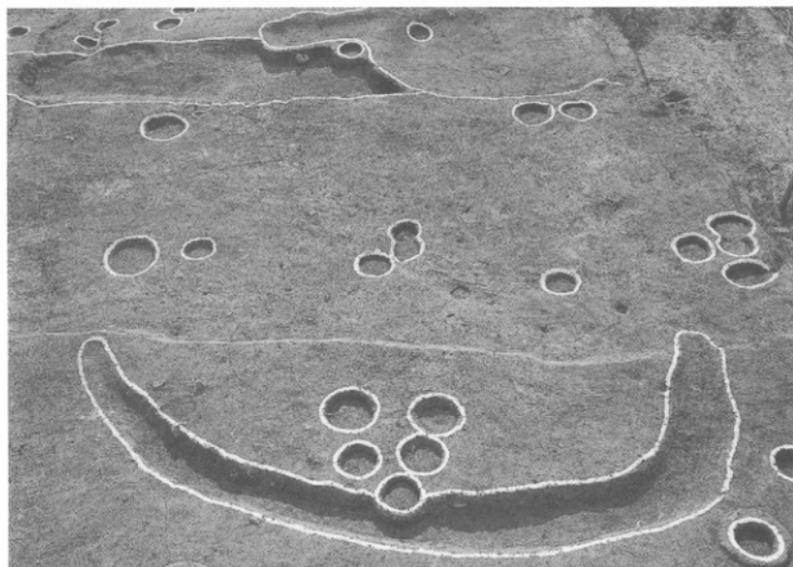
同（北から）



同完掘（西から）



同土器出土（北西から）



竪穴住居跡2全景（東から）



溝2断面（南から）



土坑6断面（西から）



土坑6土器出土（南から）



土坑5断面（西から）



溝11全景（東から）



同断面（北から）



同土器出土（西から）



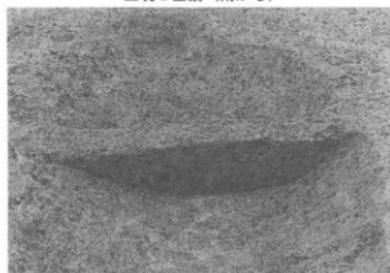
同全景（北から）



土坑9全景（南から）



同断面（北から）



土坑10断面（南から）



土坑11断面（西から）



土坑12断面（南から）



同瀬戸花瓶出土状況（北西から）



土坑14全景（南から）



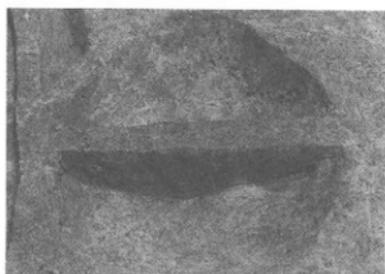
土坑13全景（南から）



同断面（北から）



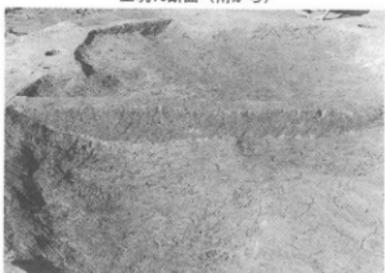
土坑18断面（東から）



土坑16断面（南から）



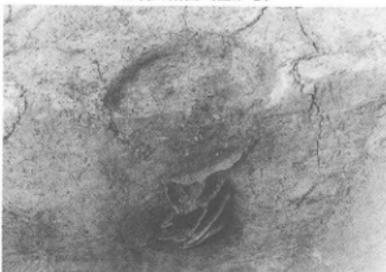
土坑17全景（北から）



土坑19断面（西から）



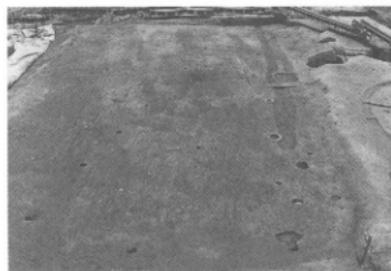
土坑20断面（西から）



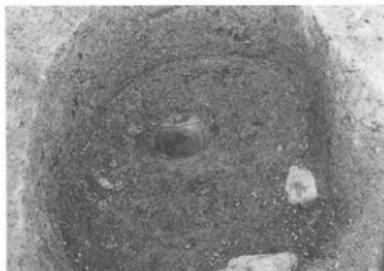
ピット9土器出土状況



1区ピット群（東から）



ピット列1・2・3（南から）



ピット列1土器出土（西から）



土坑27断面（南から）



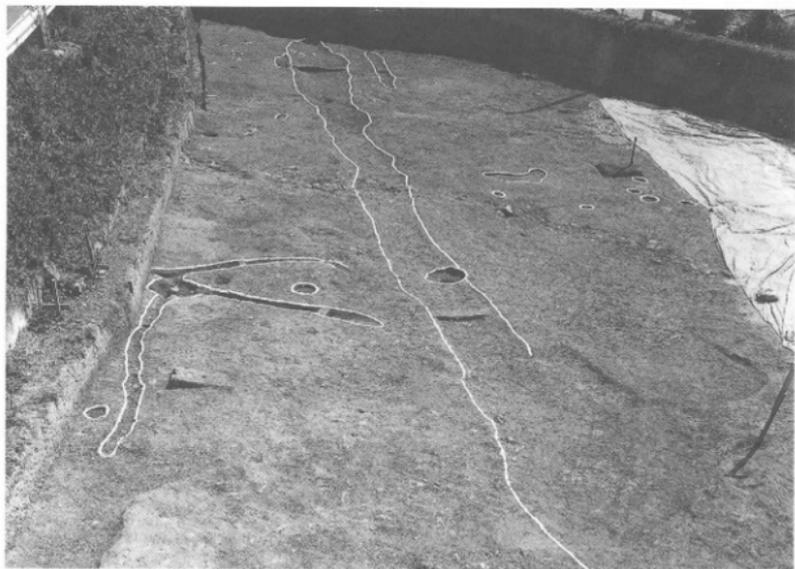
土坑27全景（北西から）



土坑25断面（南から）



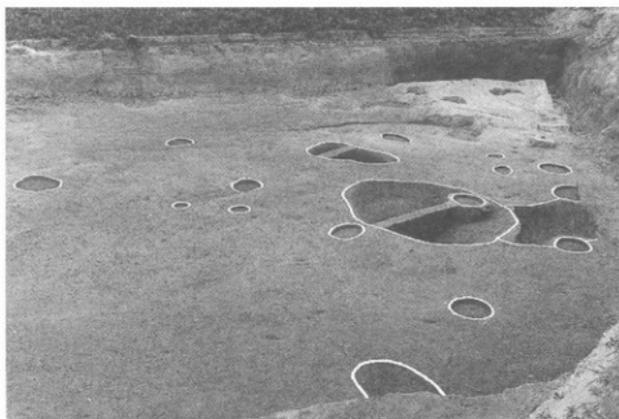
土坑26断面（西から）



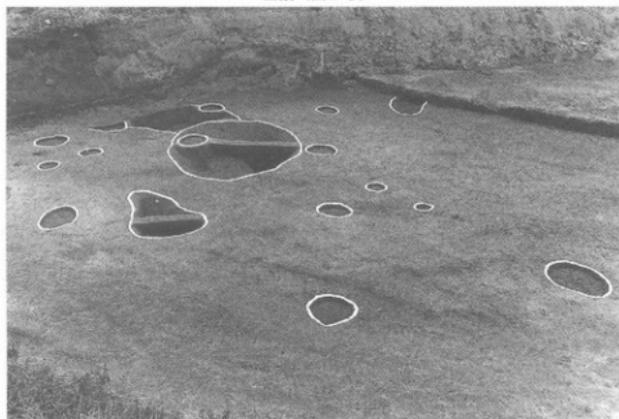
全景（北から）



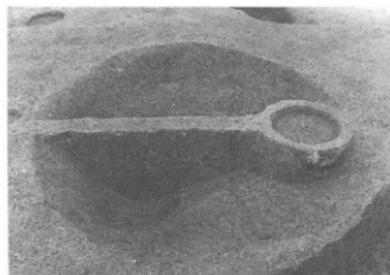
溝15~17（西から）



全景（西から）



掘立柱建物跡 2（東から）



土坑28・ビット17（西から）



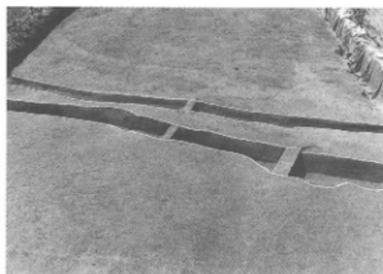
ビット17断面（西から）



第1遺構面全景 (東から)



第2遺構面西半全景 (東から)



溝1・2全景 (東から)



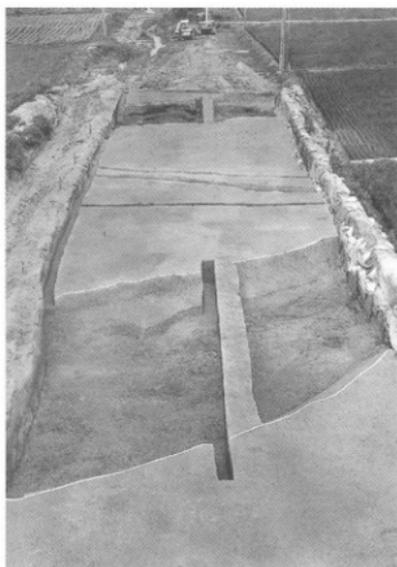
溝1・2断面 (南から)



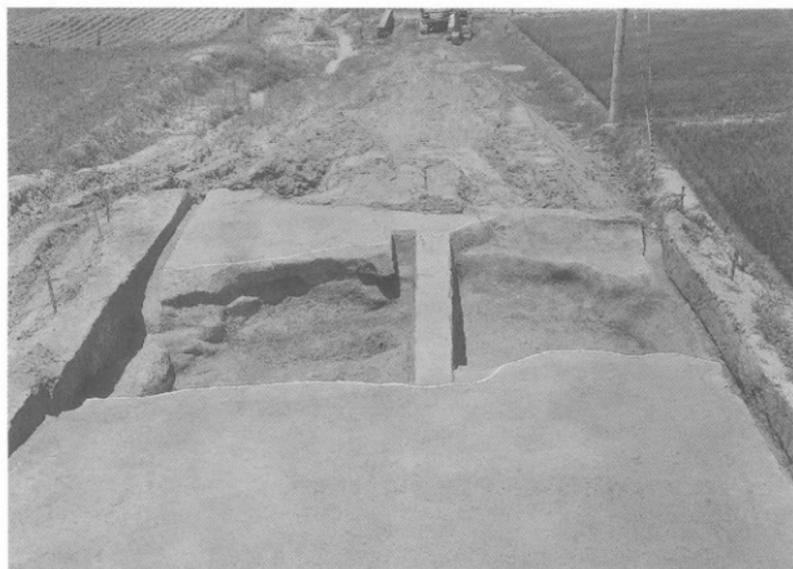
旧河道1 断面（南から）



旧河道2 断面（南から）



旧河道1・2 全景（東から）



旧河道2 全景（東から）



竪穴住居跡1検出



同掘削



断面実測



南地区有舌尖頭器出土状況



堺小学校児童の発掘体験



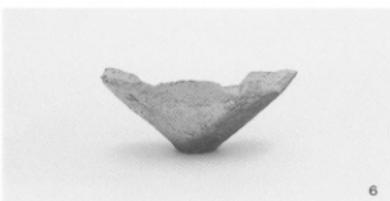
同左



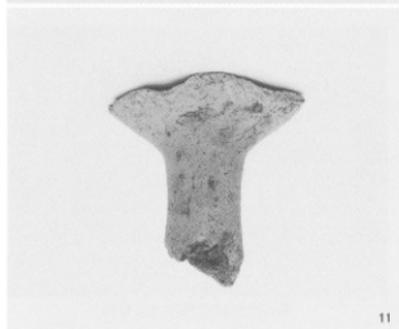
同左



2



6



11



14



15



16



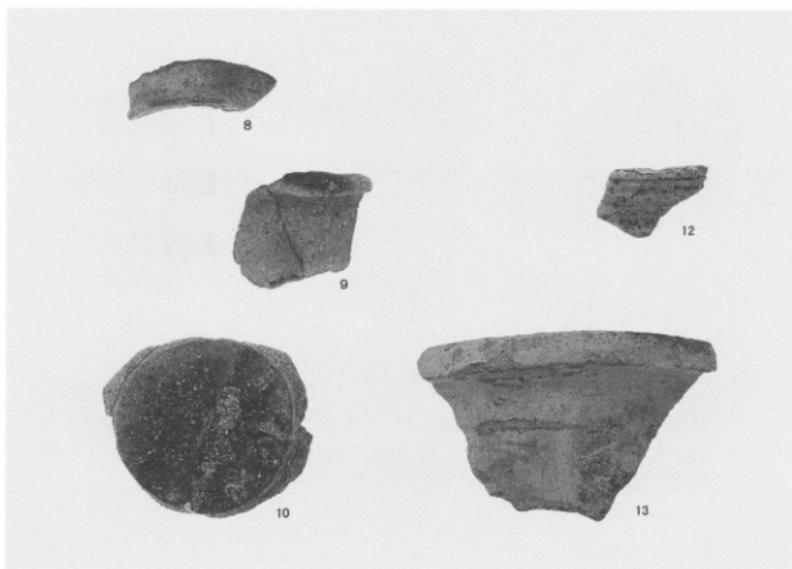
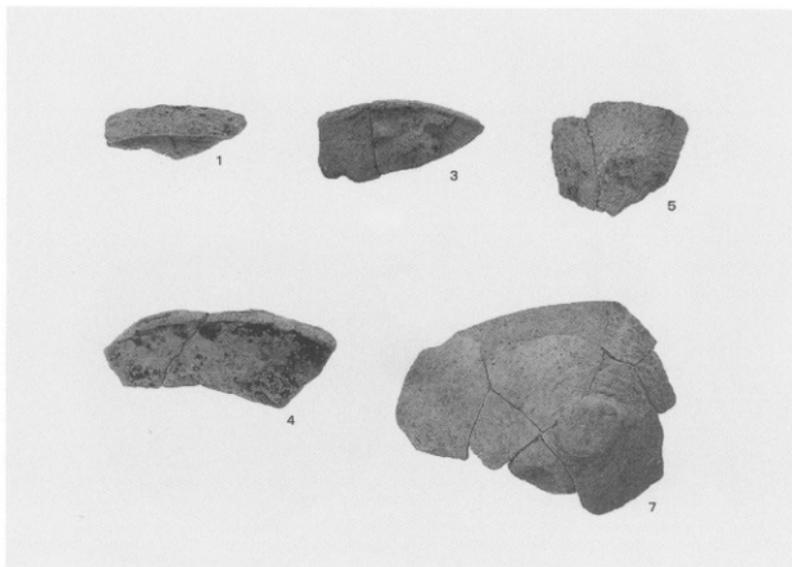
19

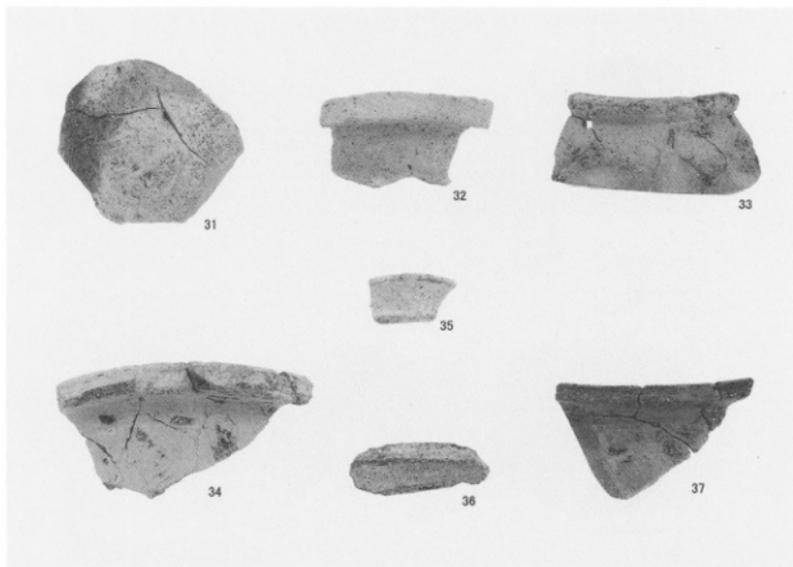
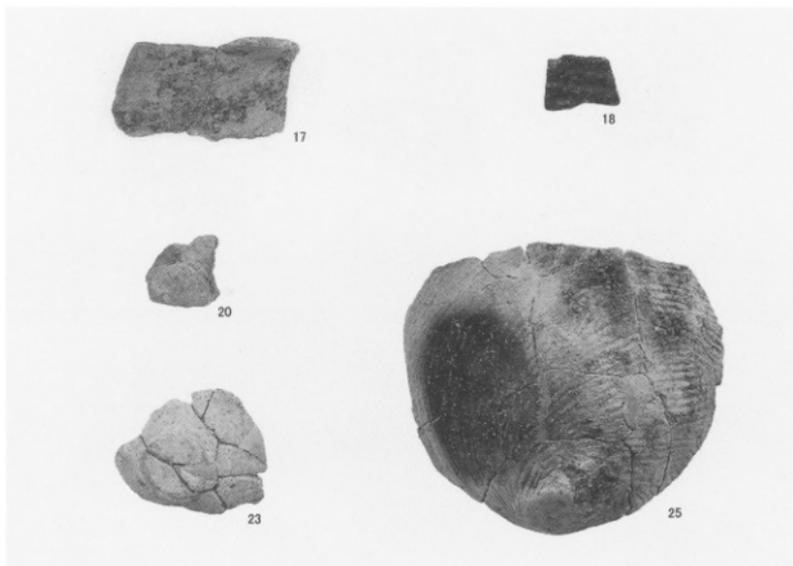


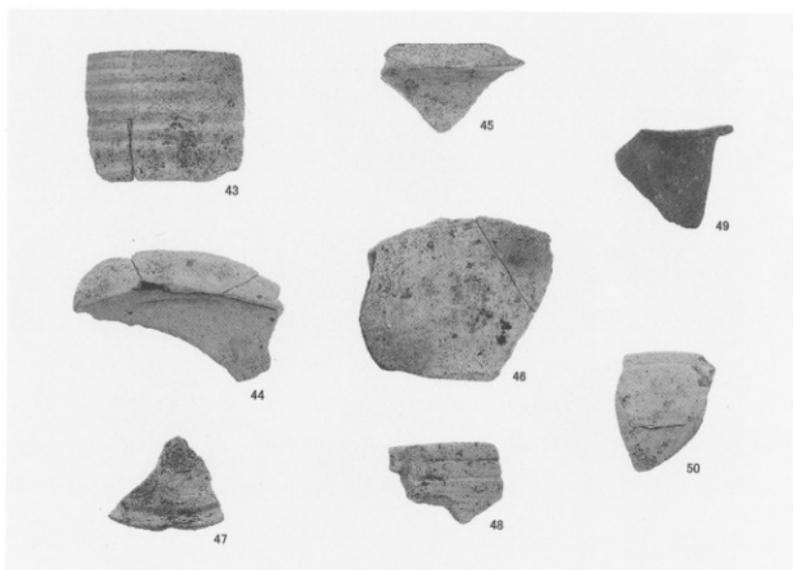
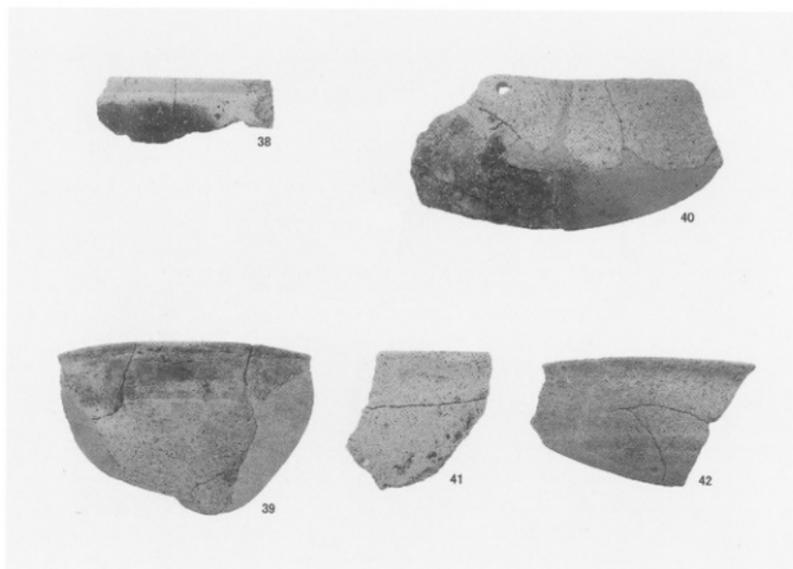
21

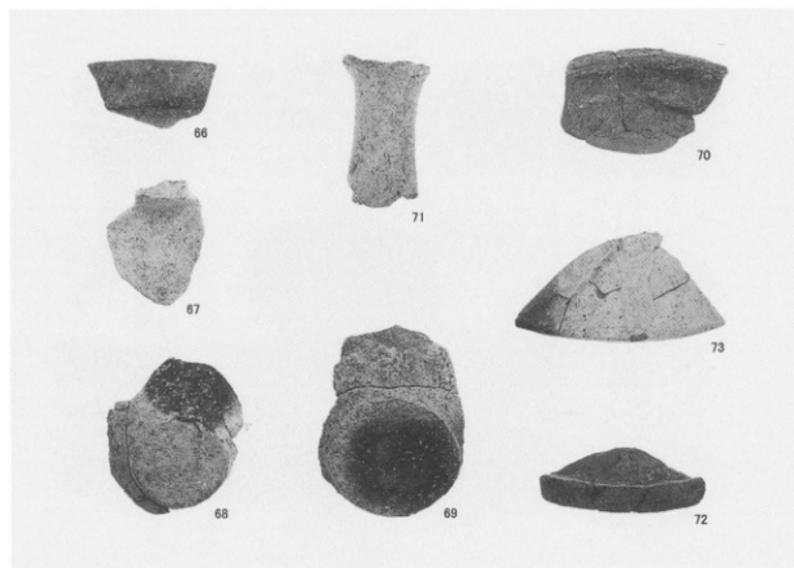
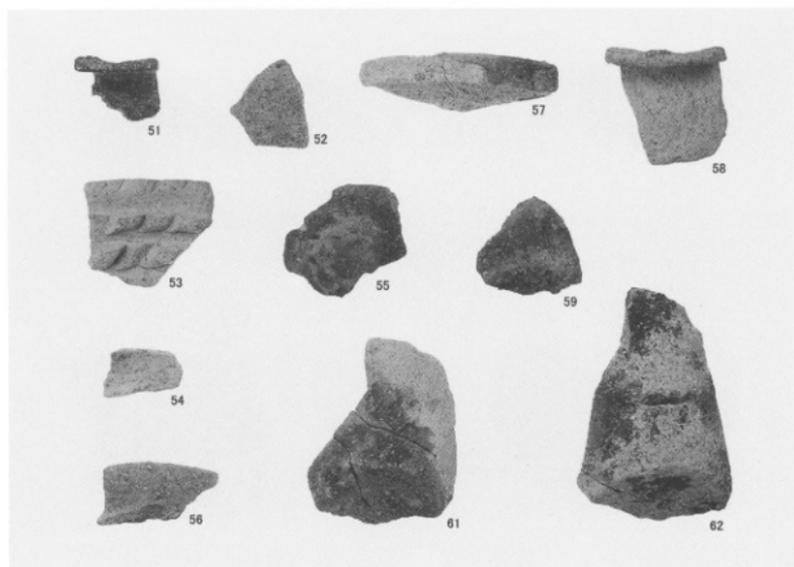


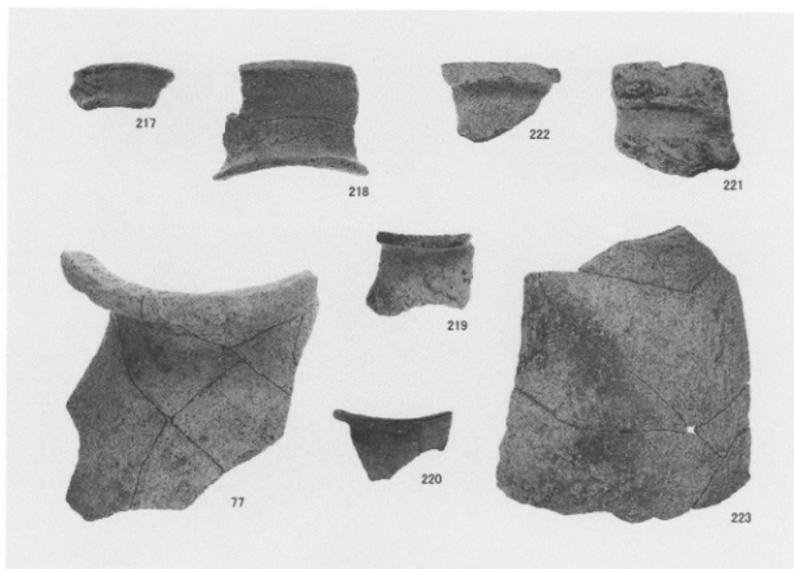
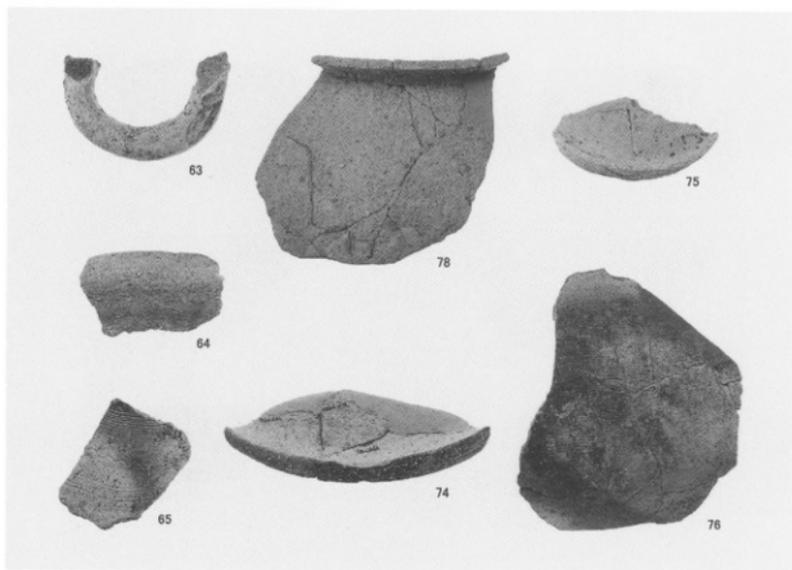


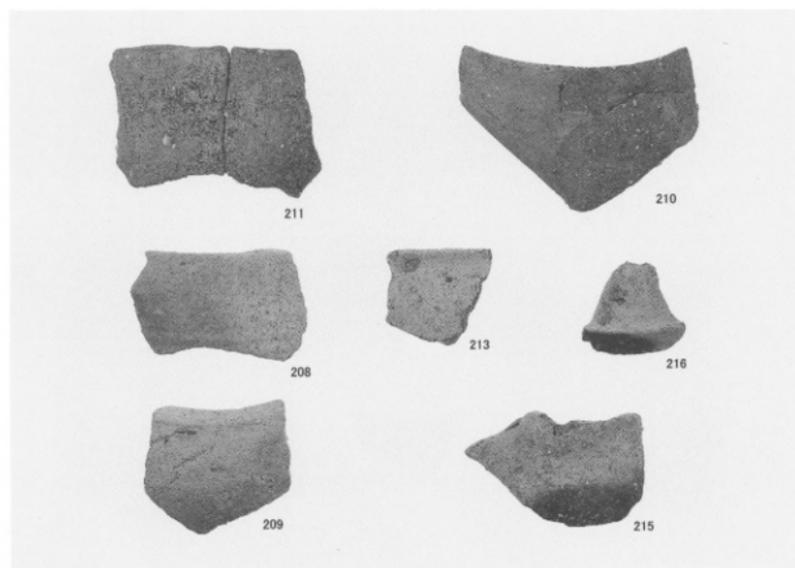
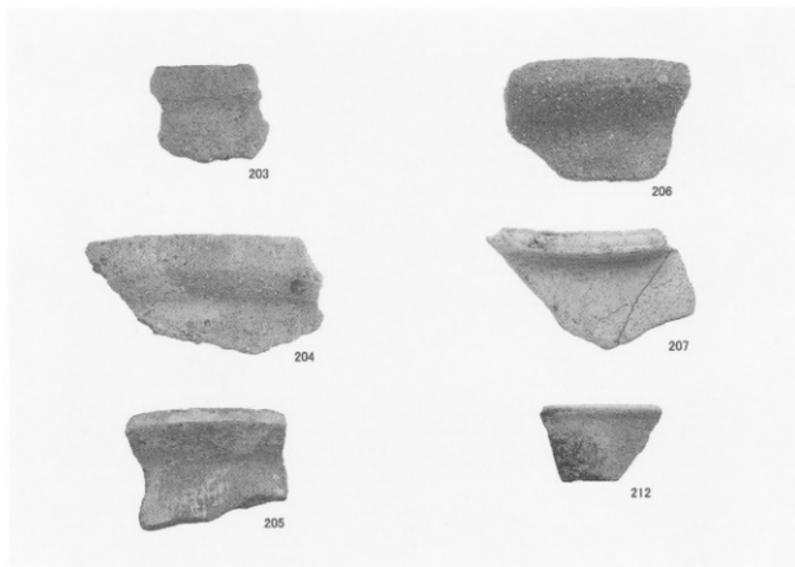


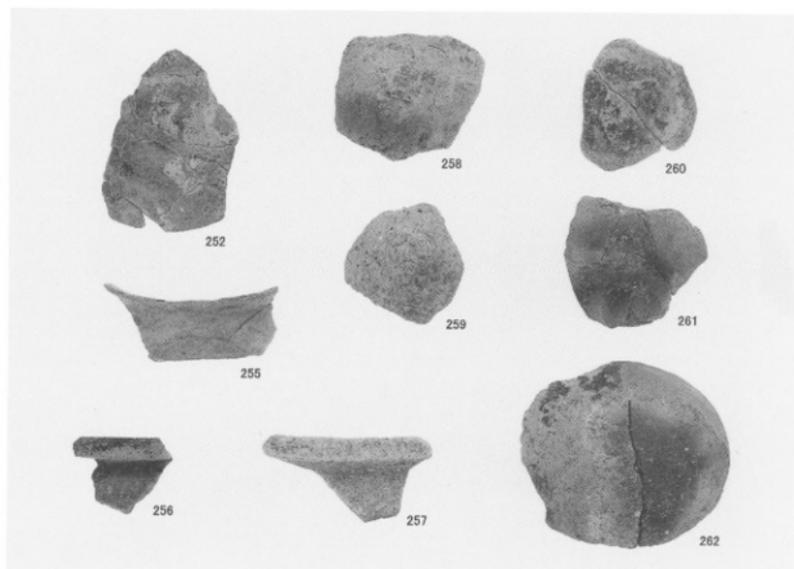
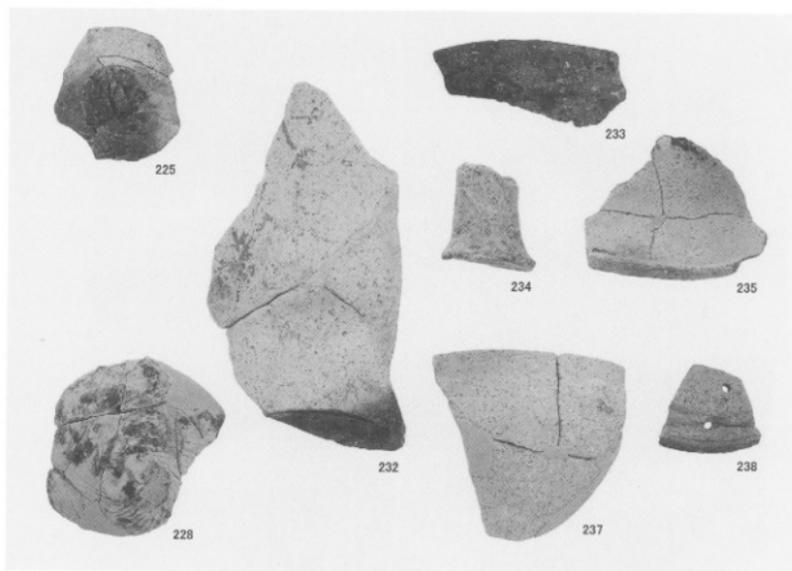
















104



81



106



108



109



110



113



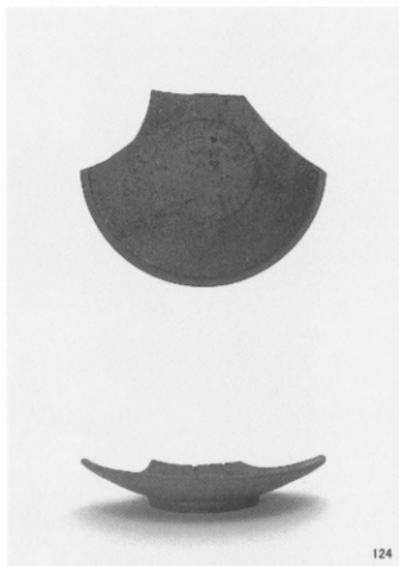
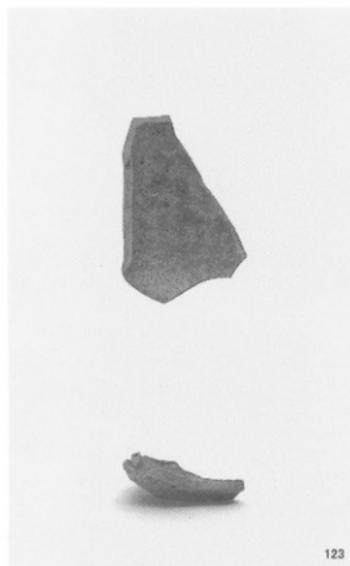
114



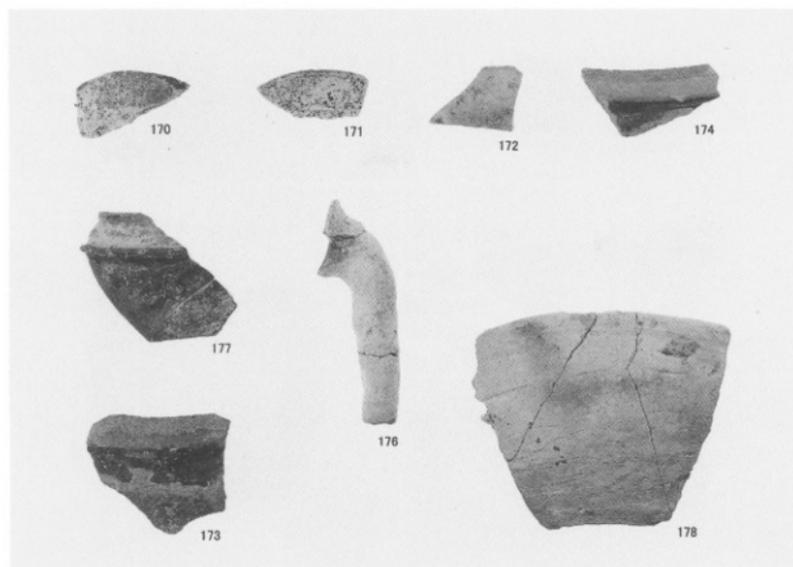
117

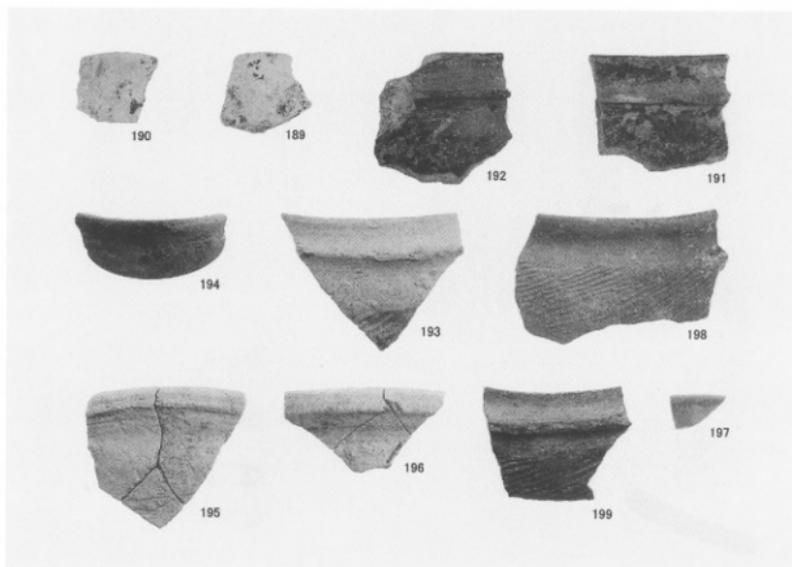
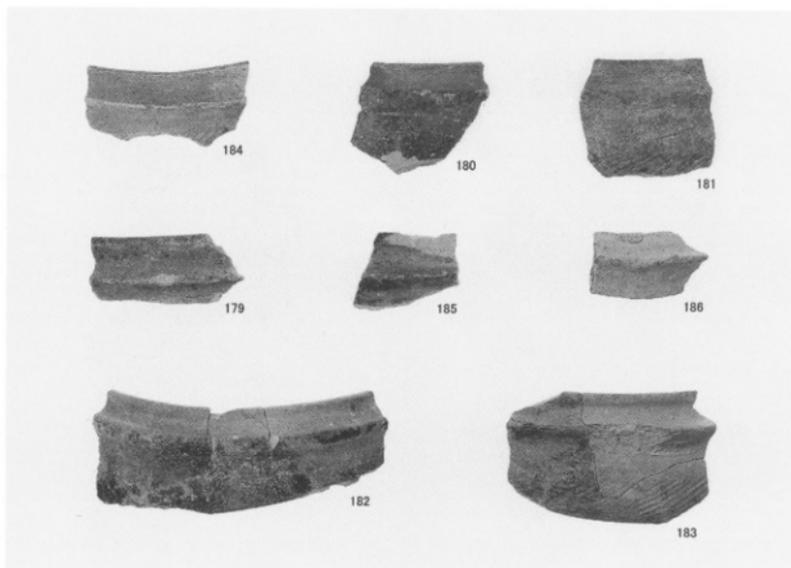


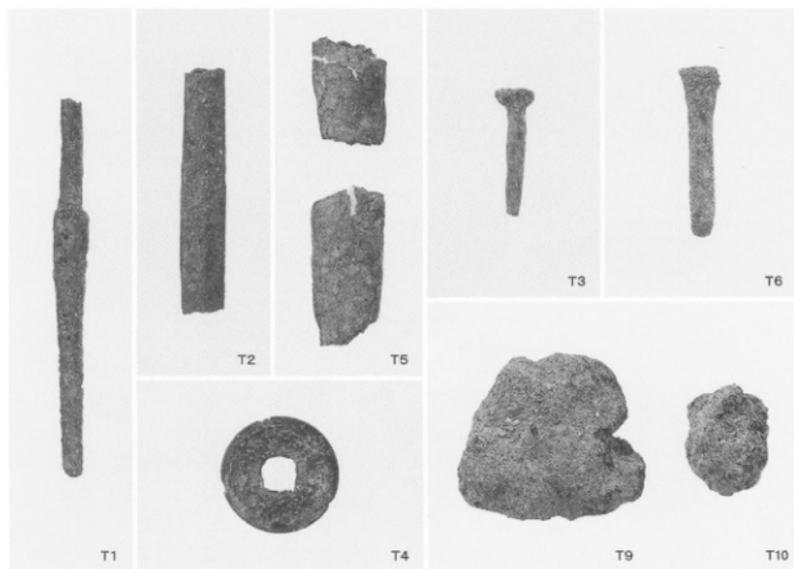
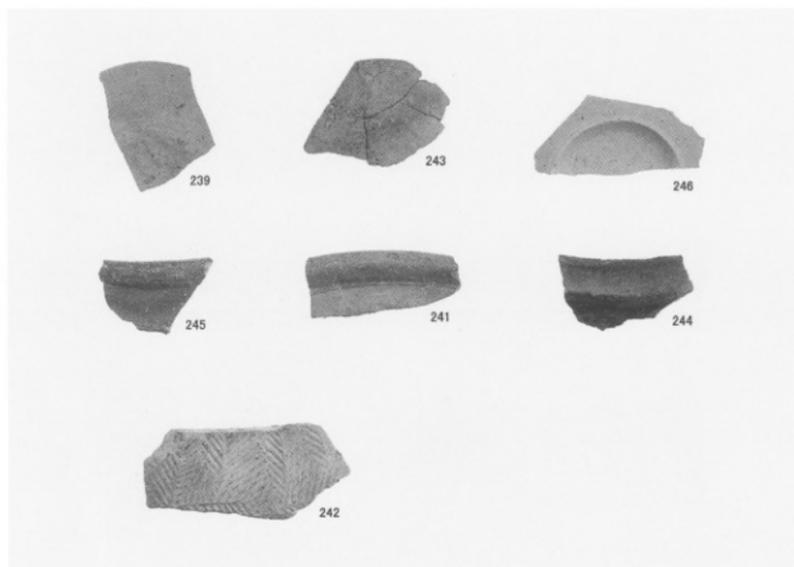
118

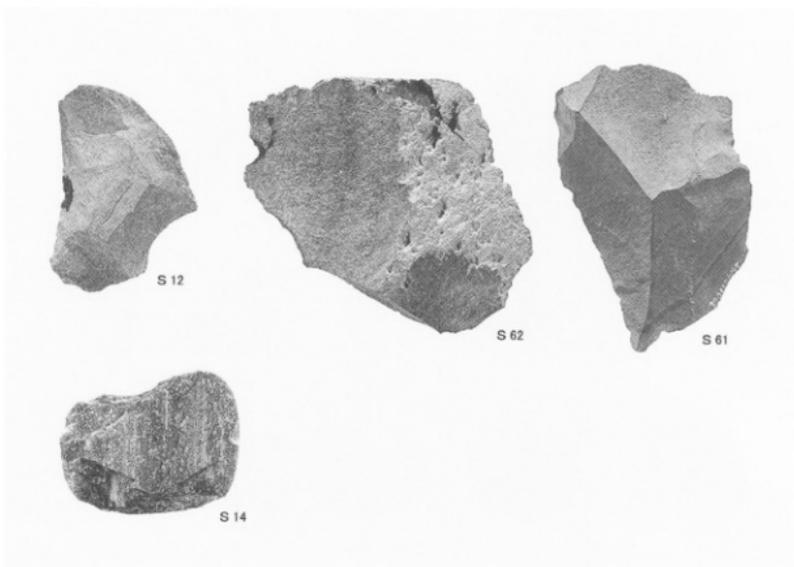
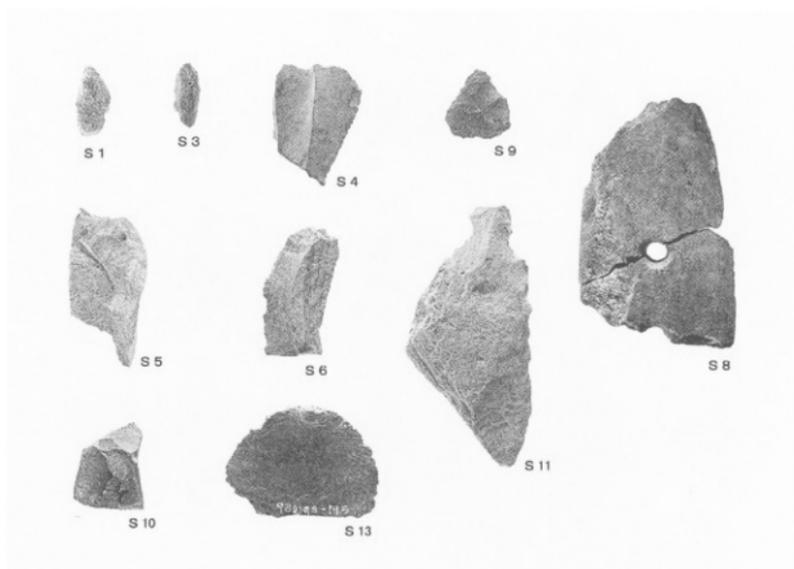


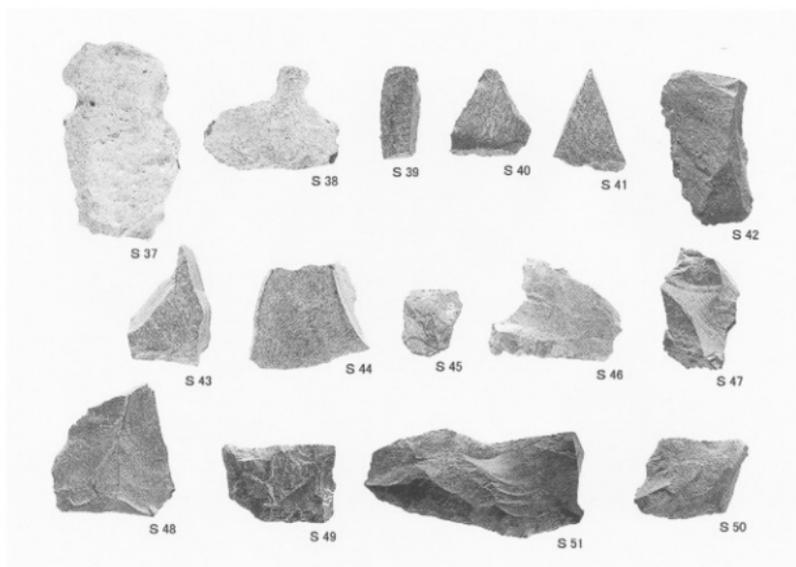
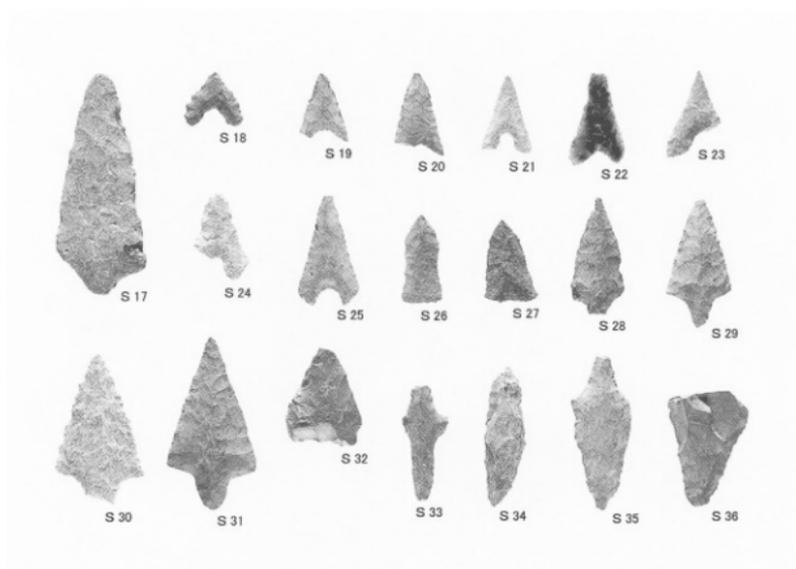














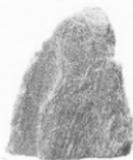
S 52



S 55



S 54



S 53



S 57



S 16



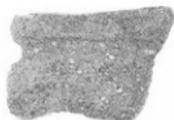
S 63



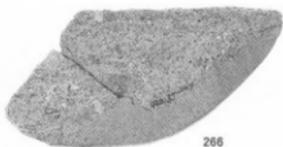
S 15



S 67



267



266



268



269



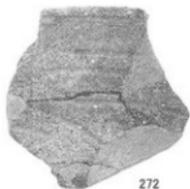
271



273



274



272



275



277



276



270



264



T 7



T 8

(S65・S66は喜住西遺跡北地区)



S 68



S 69



S 70



S 71



S 72



S 77



S 73



S 75



S 78



S 66



S 65

ふりがな	きじゅうにしいせき ごたんだいせき							
書名	喜住西遺跡 五反田遺跡							
副書名	一般国道島飼浦洲本線道路改良事業に伴う発掘調査							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第266冊							
編著者名	藤田 淳・平田博幸・仁尾一人・松岡千寿							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5							
発行年月日	2004(平成16)年3月19日							
所収遺跡名	所在地	コード 市町村	遺跡調査番号	北緯		調査機関	調査面積	調査原因
				東経				
喜住西遺跡	兵庫県津名郡 五色町広石下 字喜住	28685	確認調査 970385 本発掘調査① 980198 木元掘調査② 990137	34° 22' 11"	134° 47' 10"	確認調査 1997年11月10 日～12日 本発掘調査① 1998年1月21 日～3月12日 本発掘調査①	確認調査 190㎡ 本発掘調査① 846㎡ 本発掘調査② 2386㎡	一般国道島 飼浦洲本線 道路改良事 業
五反田遺跡	兵庫県津名郡 五色町広石下 字五反田			34° 22' 11"	134° 47' 00"	本発掘調査① 1999年5月6 日～8月30日		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
喜住西遺跡	集落跡	弥生時代 平安時代後期 室町時代	壁穴住居跡・土坑・溝 溝 土坑・溝	弥生土器・石器 須恵器・緑釉陶器・土師器・黒色土器 須恵器・土師器・備前焼				
五反田遺跡		縄文時代後期	旧河道	縄文土器				

※緯度、経度は、平成14年4月1日施工の改正測量法による世界測地系の値である。

兵庫県文化財調査報告 第266冊

津名郡五色町所在

喜住西遺跡 五反田遺跡

— 一般県道鳥飼浦州本線道路改良事業に伴う発掘調査 —

平成16年(2004年)3月19日発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号
TEL 078-531-7011

発 行 兵庫県教育委員会
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
印 刷 欄 岸 本 印 刷 所
〒676-0805 高砂市米田町米田400-1
